

ら自分の宮殿にゐて貰ふに迷惑する事、又あの侍臣等を置くのは無用の長物で只金が入る一方で放埒や遊宴を行はせる以外に取り柄はないのだから、今後は、父の様な年寄相手になる者ばかりを残して、其の數を減じて貰ひたいと要求した。

リヤは始めは自分の耳や眼を信ずる事が出来ず、又そんな不人情な事を言ふのが、自分の本當の娘だとも信ぜられなかつた。自分の手から王冠をとつておきながら、父の侍臣の數を減じ、老人に對する相當の待遇をさへ吝む事を本當にする事は出来なかつたが、娘は飽く迄も不人情を言ひ張つたので、王は怒りの餘り娘を忌はしき罵り、娘の嘘言を責めた。王がさう言つたのも無理のない事である。王の従へてゐた百人の騎士達は皆選り抜きの品行正しく態度の厳格な人々であつて、その職務に忠實であつた人達ばかりであつたから、娘が言つた様に決して放埒や遊宴に耽ける様な事はなかつた。そこで王は自分の馬の用意をさせ、百人の騎士と共に次の娘リガンの所へ行かうと思ひ立ち、娘の忘恩を責め、石の如き心を有する魔女だの、海に住む怪物よりも怖ろしい心の娘だの罵り、その上聞くも怖ろしい呪の言葉を以て、娘ゴネリルが一生涯子を生まぬ様に、若し生まれば娘が自分に對してなした輕蔑と侮辱との報ひとして、同じ様にその子がゴネリルに輕蔑と侮辱とを與へるやうに、そして娘が不孝者の子を持つ事が毒蛇の齒よりも怖ろしいものであることを身に

染みて悟る様にと祈つた。ゴネリルの夫、アルバニー公爵は王が受けた不親切な待遇には自分も責任があると考へられるかも知れないが、自分は一切關係してゐないと辯解したが、王は少しもそんな事には耳を籍さず、怒つて馬に鞍を置き命じ従者をつれて次の娘リガンの宮殿へと急いだ。そして王は、コオデリヤの過失（若し過失と云ひ得るならば）が姉のと比べて如何にも少なかつた事を考へて泣いた。又ゴネリルの如き畜生にも等しき女に、自分の様な大の男を泣かしむる程の權力を與へた事を心より恥ぢた。

リガン夫妻は威勢と華美とを極めてその宮殿に暮してゐた。リヤは召使、ケイアスに、やがて後から行く王とその従者等を迎へる用意をせよと言ふ、娘への手紙を持たして先に遣はした。一方、ゴネリルも前以てリガンに使臣を送り、父の氣儘と不機嫌とを告げ、父が従へて行く従者達を入れるのを斷つてしまへと忠告した。この使者はケイアスと同時に到着して不意に出會つた。然もその使者こそ、以前王に對して無禮を働いた爲めにケイアスに蹴り飛ばされた、あの仇敵の執事であつた。ケイアスは此の男の顔が蟲が好かぬので、何故に此處へ來たかを疑ひその男を罵り決闘を挑んだが執事はこれを斷つたので、ケイアスは本氣に怒つて、悪事を働きよこしまな報知を持つて來る様な者に相應する程、したゝかその男を殴り附けた。ケイアスはリガン夫妻から父王の使者であつ

た性質上、厚遇を受けるべき筈であつたが、この事が耳に這入つたのでケイアスは足枷の刑に處せられる事となつた。だから王が宮殿に入つた時、先づ王の眼に映つたものは、その恥づべき状態にゐた忠僕ケイアスの姿であつた。

此の事は王が期待してゐたことを裏切つて待遇の悪い前兆であつたがそればかりか、まだく悪い事が相尋いで起つた。王が娘夫婦に對面したいと言つた時に、夫婦は夜通し旅行した疲れの爲に今晚は對面が出来ないと斷つた。然し王が怒つて飽迄も對面したいと言つたのでしぶしぶ父を迎へる爲に出て來た處、其所にはあの憎む可きゴネリルも一緒に出て來たのである。そして自分の事のみ都合よく言ひつくろひ、妹にまで父を憎ませようとした。

此の事件だけで、老王を怒らせるに充分であつたのに老王は更にリガンがゴネリルの手を執つてをるのを見た。老王はゴネリルにこの老人の白髪を見るのを恥かしいとは思はぬかと尋ねた。さうするとリガンは父に向ひ、あなたはもはや年寄つて分別も無くなり、自分よりも若く思慮ある人の支配と指導を必要とするのだから、も一度ゴネリルと一緒に姉の宮殿に歸り、侍臣を半ばに減じて、姉の許しを乞ひ平和に暮す様にと勧めた。リヤは自分の膝を折つて、自分の娘に衣食を乞ふ言ふ事が如何にも不道理に響くので、そんな不自然な世話はされ度くないと頑張つて、ゴネリルと一緒に

には絶対に歸らないと斷言し、此處に自分と百人の騎士と泊る決心だと言ひ、リガンはよもや自分が王國の半分を與へた恩は忘れてはゐるまいし、又リガンの眼は姉の程鋭い所がなく優しくて親切さうだからと言つた。そして王は自分が侍臣を半分にしてゴネリルの所へ歸る位ならば、むしろフランスへ渡つて何一つ與へなかつた娘と結婚したフランス王に少しばかりの給與を乞はうとさへ言つた。

王が姉娘ゴネリルの所で受けたより親切な待遇をリガンの所で受けようと期待してゐたのは間違であつた。リガンは不孝競べに姉に負けてはならぬと思ふかの様に父に向つて五十人も侍臣を従へてゐるのは多過ぎる、二十五人で充分だと言つた。そこでリヤは始んご心も張り裂んばかりになり、ゴネリルの許す五十人の方が二十五人の倍であるから、その愛情もリガンの倍だらうと思つて、ゴネリルの方を向き一緒に歸らうと言つたがゴネリルは又口實を設け、自分達の召使ひに用を足して貰へばいゝのだから、二十五人は愚か、十人でも、五人でも多過ぎるとさへ言つた。そして心の曲つた姉妹達は深い恩愛を受けた老年の父に對して、慘酷な態度を競ふてゐるかの様に、父が一度は王であつたといふ名残を示す爲に留めて置いた(到底王者としては充分でない)侍臣や尊嚴をさへも、段々と數を減じ果ては何一つ残すまいとさへした。華美な従者と言ふものが人間の幸福に無く

て叶はぬものではないが、王であつた身が乞食となり、數萬の軍人を指揮した者が、唯一人の従者さへ無い身となるとは實にみじめな變り方である。まして眞實の娘が恩を忘れて父を捨てた事を思ふては、従者を失つた苦しきよりも勝つて、この哀れなる王の心を打碎いたのである。王は、二人の娘達の無道な行ひも、愚かにも斯んな娘達に王國を分ち與へた後悔との念も、心は動搖し、夢中になり、無道な惡女共に仇を返し、世の娘達の後世の見せしめにしようまで呪つた。

王が自分の老ひた腕では到底できさうもない、嚇し文句を言つてる最中に、夜はせまつて、その上電光雷鳴の怖ろしい暴風雨となつた。姉妹達は尙も侍臣を従へる事を許さうとせないで、王は此の様な恩知らずの娘達も一つ屋根の下に居るよりは、外の嵐の猛り狂ふ中にゐる方がましだと思つて馬を命じた。姉妹達は我も我が身に苦痛を求める人には、いゝ懲しめになるだらうと言ひ、王をその嵐の中に追ひ出して戸を閉めてしまつた。

風は益々猛り狂ひ、雨は益々加はつた。王はこんな雷鳴風雨と戦はねばならなかつたが、無情な姉妹達に比すれば却つて樂な位であつた。行けきも行けども樹立の影さへ無い荒原の中に、暗夜のしかも嵐の犯ふ中を、王は彷徨ひ歩いた。そして暴風と雷雨に逆ひつゝ、王は醜き人間の跡かたをも無くするため、風には地を吹き飛ばして海に沈め、海の波には天地を呑み盡さんこゝを願つた。

今は王の傍を離れず、不幸の内にも滑稽を以て王を笑はせ慰めようとする道化者の外には唯一人の従者さへ無かつた。この道化者は、今晚雨を凌いで歩くには骨が折れる故、いつそ娘の所へ歸つて憐みを乞ふ方が宜しからうと王にすゝめて、歌つた

小ちやい／＼智慧しか無い身は

あゝ疲れた、大雨風だ！

運に氣嫌を任かさにやならぬ、

雨が毎日降らうとも雨が。

そして今晚の様な夜こそ婦人達の傲慢を冷やすのには持つて來いの晩であると言つた。

一度は王であつたリヤも今は道化者一人をつれてみじめなままで、忠實な従者ケイアスに身をやつしてゐるケント伯爵に巡り合つた。王はケント伯とは少しも氣附かなかつたが、伯は常に王の側を離れようとはせなかつたのである。

—193—
「まあ、陛下こゝにおいでなさいましたか。夜を好む動物でもこんな晩は好みませぬ。此の嵐に恐れて獸共さへ洞穴から出掛けませぬ。人間の身では迎もかういふ苦しみや恐れには堪へられませぬ」。と言ふと王は遮つて答へた。大きな苦しみがあると他の小さい苦しみは感じないものだ。心

が平和な時には身體はデリケートになる。心に大なる悩みがあるこそそのみが心を苦しめるものだ。それから娘の忘恩を責めて、丁度口が食物を運んでくれた手を引き裂いてしまふ様なものだ。子供にとつて両親は手であり食物であり凡てであるのだから。

然し善良なケイアスは、王を風雨の中にさらして置く事を好まず、熱心に王を説いて、荒野に立つてゐた小さな怪しげな小舎に入れた。そこへ道化者が最先に這入つたが、幽霊がゐると言つて怖れて逃げ出して來た。が好くしらべて見るにこれは風雨をさけて小舎にもぐり込んでゐたベトラムベトラムの乞食に過ぎない事が判つた。その男が化物のまねで道化者を嚇かしたのであつた。此の乞食は本當の氣狂か、それとも同情ある田舎人の憐みを惹く爲に氣狂の眞似をしてゐるものか、自分で憐れなトムだとか哀れなターリグッドターリグッドなきと稱し、「哀れなトムに何か下され」と言ひながら田舎を廻り自分の腕に針や釘又は迷迭香きんねんこうの刺等を刺して、血を流し怖ろしい動作と共に祈つたり、又呪文を唱へたりなどして、正直な田舎人の心を動かし又は嚇かして施し物を與へさせる連中の一人であつた。王は裸體をかくすために、腰に一枚の毛布を纏ふた、このみじめな姿を見て、この男をも亦自分と同じ様に娘に財産をすつかり譲つた、めにこんな淺ましい姿になり果てた者だと思へた。王は不親切な娘を持つたものでなければ、誰だつてこんな見る影もない有様になるものでないと思つたからである。

然るに王もいろ／＼と亂暴なことを言ひ出したので、ケイアスは明かに王は娘達の酷い取扱ひの爲に氣が狂つたのだと推察した。ケイアスは折さへあれば忠義を盡さうと思つて居たが今や、これまでにない好機を得て王の爲に非常な役目をつこめた。ケイアスは王の侍臣中の忠臣達の助けを藉り、夜明け頃に、自分の友達やケント伯と同様に忠義の士の住むオバア城に王を移し、親らはフランスに向つて出帆しコオデリヤの宮殿に赴き、そこで感動させる様な言葉で父王の哀れな状態を説き、姉達の極悪非道な振舞を手に取るやうに物語つたので、孝心深く優しいコオデリヤは涙を流しながら夫王に願ひ、この残酷な姉や姉婚達を撃ち亡ぼし、父王に今一度王位を取戻す爲、充分な軍隊を連れて英國に渡らして呉れと乞ひ、その許を得、コオデリヤは間もなく大軍を引きつれてドオバアに上陸した。

—195—
さうしたはづみかりヤ王は、ケント伯爵が氣が變だからと思つて附けて置いた番人の眼を盗んで逃げ出し全く氣狂になつて、藁や蔴いらくまや麥畑で摘んだ雜草等で作つた冠をかぶり、怪しげな歌を歌ひながら見るも憐れな姿で、ドオバア附近の野原を彷徨ふてゐるのをコオデリヤの侍臣が見附け出した。コオデリヤは早く父に會ひ度いと心ではたまらなく思つてゐるが、醫者の注意により、しば

らくの安眠を與へ且つ醫者のすゝめた藥草の効果で父が安靜になるまで面會を延ばすこととした。若し父の病氣が癒つたならば、自分の持つてゐる金銀寶玉のあり丈を與へようとコオデリヤが約束した。醫者の秀でた療法に依つて、リヤは間もなく病が癒けて娘と對面する迄になつた。

親子の對面の有様は何も美しい光景であつたらう。王は嘗つて限りなく愛してゐた娘を再び此所に見ることの出來た喜びも自分が怒りの餘り、僅かばかりの罪の爲に勘當した人から、こんな親切を受ける事を恥ぢる心で胸が一ぱいになつてゐた。その感情の葛藤と未だ充分に治つて居ない病氣も手傳つて、自分が今何所にゐるのか、自分に斯くも優しく接吻して、話をする人が誰であるかさへ忘れた程であり、又側に居る人達に、若し自分がこの婦人をコオデリヤだと思つてゐるのが間違つてゐても笑つて呉れるな等と言つて、我が子の前に膝を曲けて許しを乞ふた。娘も其の間同様に膝を折つて父の祝福を祈り父が娘の前に跪くのは勿體ない事であるが、自分が跪くのは子としての義務であり、自分こそ本當のコオデリヤであると語り、姉達の不孝を吸ひ消して上げようと言つて父に接吻した。そして例へ自分に咬み附いた敵の犬でさへ、そんな晩には家の中に入れてやり、暖めてやる程なのに、まことの父、しかも年寄つて白鬚になつる親を、そんな寒い晩に放り出した姉二人は、自分自身を恥かしいとは思つてないのだらうかと言ひ、父を助ける目的でフランスか

ら來た譯を話した。そこで王は自分は耄碌して、何をしたのかさへ判らないのだから、以前の事は忘れて許してくれる様に願ひ、自分に對して責任を持つ姉達が情なくするのに引きかへ、何の責任もないお前に思を受けることは有難いことだと言ふも、コオデリヤは姉と同じ程自分にも責任がありますと答へた。

安眠と藥草との効果で、冷酷な姉妹のために心を攪き亂され、調子を狂はしてゐた王の感覺も元通り回復することが出來た。さて我々はこの老王を、安心して孝行な娘の保護の下に置いて、あの無道な姉妹に就て二三の事件を語らう。

自分の年老ひた父にさへあんな無道であつた二人の忘恩の魔女達が、何うして夫に對して忠實であるかと保證し得よう。二人は間もなく夫に對しても、表面上義務や愛情を示す事さへ倦いて、自分達が他の男に愛を捧げてゐる事を明らかに示すやうになつた。二人の惡むべき戀の相手が同一人であつたのも因果である。

エドモンドは故グロスタア伯爵の子であつたが陰謀を企て、嫡兄、エドガアの地位を奪ひ取り今や、伯爵となつてゐる悪人で、ゴネリルやリガンの様な人非人には好い戀の相手であつた。丁度この時リガンの夫、コオンウォール公爵が死んだのでリガンは直ぐ様グロスタア伯爵に結婚の意

思を示した。然るに姉は此事を知り自分も深い戀を契つた伯爵に對する嫉妬の情を燃やし、ゴネリルは妹を毒殺しようと思つた。然るに、此の悪計が露見したのミ、ゴネリルが伯爵と不義してゐるのが公爵の耳に入つて、夫アルバニー公はゴネリルを獄屋に投じた。其處でゴネリルは戀の破滅と怒りのために自刃した。斯くして天の刑罰は二人の無道の娘の上に下された。

此の事件の上に注がれてゐた人々の眼は、姉妹の身にその罪にふさはしい死を見て、天の審判に驚嘆したが、只その身の善行に依つてもつミ幸福な最後を遂げるだらうミ思はれてゐた、若くて徳の高いコオデリヤ嬢の悲惨な運命を見ては、天の不思議な力を驚かざるを得なかつた。然し恐ろしい事實は、純潔と敬虔ミは此世の中では必ずしも成功しないと云ふ事であつた。ゴネリルとリガンミがグロースター伯爵の指揮の下に送つた軍勢が終に勝利を得て、王位に即く妨碍となる者は一切無い様にしようと思つてゐた伯爵の悪計によつて、伯爵はコオデリヤを捕へて獄中で殺した。斯く天は孝女の手本として世に示した後、未だ若い娘の身である純潔な少女を天國に拉し去つた。リヤも娘の死後長くは生きてゐなかつた。

王が死ぬ前に、姉妹から虐待を受けた最初から、この哀れな最後を遂げるまで王に従ひ、忠實に仕へてゐたケント伯爵は、自分がケイアスと言ふ名前に従つて來てゐたのである事を王に知らせようと思つたが、狂つた王の頭にはそれが一體、何うした譯なのか判断する事が出来ず、何故にケント伯とケイアスミが同じ人なのかが分らなかつた。で伯爵も今こんな時にどくしく説いた所で無用だと思ひ止まり、此の王の忠臣もよる年波ミ王の薄幸ミを悲しんで間もなく王のあみを追つて墓場へ行つた。

やがて天の審判がグロースター伯爵の上にも下つた。彼は陰謀が露見し嫡兄ミ決闘して殺された。然るにゴネリルの夫であつたアルバニー公爵が、コオデリヤの死にも無關係であり、リヤ王を虐待せよミて殊に妻をそ、のかしめせなかつたのであるが、何故に王の死後ブリテンの王位を繼いだかと言ふ事は今告げる必要はあるまい。この物語の主眼であるリヤ王ミその三人の娘達はもう死んでしまつてゐるから。

マクベス

ダンカン温和王がスコットランドを治めてゐた時、マクベスと呼ぶ偉い貴族が住んでゐた。此のマクベスは王の親類であり、宮廷に於てもその勇氣ミ戰功ミに依つて非常に重んぜられてゐた。その一例を挙げると最近彼は雲霞の様なノールウェイの大軍に後援されてゐる賊軍を打滅ほした事が

ある。

スコットランドの二將軍マクベスとバンクォーとが、その大戦に勝つて歸る途中、荒れ果てた野原を通つてゐるに、其處へ不意に女の様ではあるが鬚をはやした、皺の寄つた顔や奇妙な服等は全く此の世の物とも思はれない様な三人の怪物が現はれて將軍達の行方を遮つた。その怪物が怒つた様な様子をして、皆黙れと言ふ様に皺だらけの唇へがさ／＼の指を當て、立つてゐた時、マクベスが最初に呼び掛けた第一の怪物はマクベスをグラームスの貴族といふ敬稱を言つて挨拶した。將軍はそんな怪物が自分の名を知つてゐるのを少しも驚かなかつたが次いで第二の怪物がコオドアの貴族といふ稱號を以て呼んだ時、自分はその稱號を要求する権利さへ持つてゐなかつたので、も一層驚いた。そして第三の怪物は「未來の國王萬歲」と言つた。此の様な豫言的な挨拶は、王子達が生きつゝの限りは自分が王位につく望さへ無い事を良く知つてゐたマクベスを非常に愕かせ、又怪物共はバンクォーの方に向き直つて謎の様な言葉で、バンクォーは現在マクベスより偉大ではないが將來はずつと偉大になるであらう！今日ではマクベス程幸福ではないが將來はずつと幸福になるだらう！親らは王となる事はあるまいがその子孫達はスコットランドの王になると豫言した。そして彼等は空中に消え去つた。兩將軍はさてこそこれが妖婆か巫婦の類だなと悟つたのである。

二人が此の奇怪な出来事にしばらく思案して立つてゐた時、王よりの使者が駆けて来て、マクベスにコオドアの貴族の尊號を授けると言ふ王の命令を傳へた。事實が不思議にも妖婆達の豫言と一致したのでマクベスは驚いた。その驚愕のため呆然と立つた儘、その使者に返す言葉さへ出なかつた。此の時以來マクベスの心中には第三の妖婆の豫言が又今と同じ様に成就して、何日かスコットランドの王位に即くだらうと言ふ野心がむら／＼と起つたのである。

マクベスはバンクォーの方を向いて言つた。「君は子供たちが、行く／＼王になるだらうと思ひませんか、あの妖婆達が僕に言つた事が全くよく當りましたから。」バンクォーは答へた。「そんな希望を持つてゐなざるに、つい王冠までも欲しくなりませんやうぜ。然し、さうかするに、悪魔が人間を邪道に誘はうとして、わざと一寸した事に臉を見せておいて、重大な事件でおこしいれる事がある。」

然し妖婆達の邪惡な暗示がマクベスの心中に深く／＼染み込んでゐたので、親切なバンクォーの警告に従ふ筈はなかつた。其の時以來マクベスの考へは盡く、如何にしてスコットランドの王位を獲ようかと言ふ一事に集中された。

マクベスには妻があつた。その妻に妖婆達の不思議な豫言と、その豫言が半ば適中した事を知らせた。夫人は悪い心の野心家であり、自分の夫も自分が王位に即く事さへ出来れば何んな事でも

やり兼ねない女であつた。そしてマクベスが血を流さねばならぬ事を考へて決心を鈍らすのをあく迄鼓舞し、其の豫言を實現するには王を殺す事が絶対必要な階段であるを説いてやまなかつた。

王は常に臣下に親しみを結ぶため、好んで貴族や重臣の邸を訪問せられたのであつたが、折も折二人の王子マルコルムとドナルドとを伴ひ數多の貴族な侍臣達を従へて、マクベスの軍功をねぎらうために彼の邸へ行幸になつた。

マクベスの城は景勝の位置にあり、その近邊の空氣は新鮮、爽快であつた。鳥の巢のある所は空氣が佳いと言はれてゐるが、燕や雀なきの巢が城の軒や、庇等思ひ思ひの所にあるのを見ても判る。王は此の場所が非常に氣に入つたばかりか、笑顔の下に奸策を藏し、罪の無い草花を見せかけて、其蔭に毒蛇をひそませてゐる様なマクベス夫人の心を籠めた款待にも非常に満足を表した。

王は旅行のために疲れたので、早くから寢室に退いた。(當時の習慣で)王の室には二人の侍臣が側に眠る事になつてゐた。王は今日の歡待を事の外喜び寢室に退く前、重臣達にそれ〴〵贈物を與へ、中にもマクベス夫人には最も親切な女主人として、高價なダイヤモンドを贈つた。

扱時は眞夜中で、世界の半面は萬物すべて死せるかの様に靜かである。眠つてゐる人の心も惡夢に襲はれて、家の外にゐるものは狼や殺人者ばかりである。マクベス夫人は、此時王を殺さうとし

て眠りもせず謀計を巡らしてゐた。夫人は女の身でこの様な厭はしい行には携はらない筈であつたが、王を暗殺するにはマクベスは餘りに人情深き性質であるを怖れてゐた。夫人は夫が野心家であるにも拘らず、小心であるため野心家が、常に忍んで冒さねばならぬ大罪を遂行する程の勇氣のない事を知つてゐた。夫人は一度は彼を説き附けて、暗殺を決心させたものゝ、その決心に疑を挟んだ。そして夫の天性は(夫人の性質よりもつゞき人情深か、つたので)この決心を鈍らし、よく目的を果さないかも知れないを心配したので、自分の手に懐劍を握り王の寢臺に近づいた。寢室に侍る二人の侍臣には、前以て酒をうんと呑ましてあつたので、彼等は酔ひつづれ自分の義務も何も忘れて眠つてをり、ダンカン王は旅の疲でぐつすり寢込んでゐた。然し夫人がその寢顔を熱心に見た時王の顔が何所もなく自分の父に似てゐる所のあるのに氣が附いて、何うしても劍を擬することが出来なかつた。

夫人は夫と相談するために戻つて來た。マクベスの決心は鈍つてゐた。彼の心の中に此の蠻行に逆ふ強い理性が動いてゐた。第一にマクベスは王の重臣であるのみならず王の近親であり、しかも其日は王を招待した主人で、客に對する禮儀より言つても戸を閉して、人殺し等の入るのを妨ぐ義務がありながら、自分で劍を取る等々は以ての外の事であり、それから又、このダンカン王が如何

に慈悲深くあつたか、如何に臣下に對して寛大であつたか、如何に貴族——特にマクベス自身を、愛したかを考へ、斯る王にはきつと天の特別の加護があるだらうし、又臣下も必ず復讐をするだらうと考へた。その上マクベスは、王の御蔭で凡ての人々から尊ばれてゐるのに暗殺者の譏りを以て此の名譽を汚されるに忍びなかつた。

マクベス夫人は夫がこんな心の中に苦惱してゐるのを見て、後悔の念にかられ陰謀を斷念しようとしてゐることを知つたが、いさゝかの事で此の悪計を捨てる様な女でなかつたので、自分の極悪な精神を夫の心に注ぎ込まうとして夫に色々説き始め、一旦計畫した事を中止してはならぬしこんな事位は易々に行はれ簡単に濟んでしまふから、短かい一晚の働を怖れて、後々長く王位に即く幸福と榮華とを取逃してはならぬと理詰めにして夫を説きつけ、しかも夫の心變りしたここを輕蔑し、浮薄であり、憶病であると罵り、自分は乳を飲ました事があつて、乳飲兒の可愛らしい事も知つてゐる、然し夫が王を暗殺しようとする約束したやうに自分が殺さうと約束したなら自分は顔には笑をたゞながら、愛兒を自分の胸から引き離し、それを投げつけてその脳味噌をも出して見せると言ひ、その上暗殺の罪は酔つて眠つてゐる侍臣に着せる事が出来ると智慧つけた。夫人が斯くも毒舌を以て鈍らうとする夫の決心を喚び起し、果てはマクベスの勇氣を再び振ひ起して血醒い仕事を

をしようか決心させた。

マクベスはそこで手に懐劍を握り、暗の中をダンカンの寢室へと忍び寄つたが、歩いて行く時に眼の前に、自分の方へ柄を向けた、尖先からも、又からも血の滴つた他の劍が現はれた。手を延ばしてそれを握らうとする空に消えて終つた。之は暗殺の事を思ひ詰めて頭が混亂して居たので、マクベス親らが描き出した幻影に過ぎなかつたのである。

此の驚怖をも振り捨て、王の寢室に入り、只一討ちで王を殺してしまつた。彼が漸く暗殺の目的を達した時、同じ室に寝てゐた侍臣の一人が夢中で笑ひ出し、今一人の者が「人殺し」と叫んだので、二人共眼を覺し、共に短かい祈りをした後、一人が「神様お助け下さい」と言ふと他の一人が「アーメン」と言つて二人共再び眠つてしまつた。マクベスは側に立つて聞いてゐたので、一人が「神様お助け下さい」と言つた時に「アーメン」と言はうとした。實は彼も最初の助けの祈を願つて居たのであるが、言葉が咽喉に支へて遂に言ふ事が出来なかつた。その時である、マクベスは又何所からともなく叫ぶ聲を聞いた。

「もう安眠は出来ないぞ。マクベスは安眠を殺してしまつた。生命を養ふ無邪氣な安眠を。」
續いてその聲は家中に響き渡つた。

「もう安眠は出来ぬぞ。グラミスが安眠を殺してしまつた。だからもうコオドアも眠ることは出来ない。マクベスも最早眠る事は出来ない。」

マクベスは斯かる怖ろしい幻影に悩まされつゝ、室の外に様子を窺つて居た夫人の許へやつて来た。夫人は夫が仕事をやり損じ、計畫が挫かれたのでないかと思像してゐた。そして夫が非常に惱亂した様子で出て来たのを見て、氣の弱い事を責め汚れた手の血潮を洗ひにやつた後で罪を二人の侍臣共に負はせるために、自分はその劔を持つて血を彼等の頬に塗りに再び室にはゐつて行つた。

夜は明けた。隠す術もない殺害事件もそれと共に知れ渡つた。マクベス夫婦はさも悲しさうな顔をして、暗殺者は侍臣共に相違ないと（懐劔が侍臣達の側にあり二人の顔は血にまみれてゐた）力を籠めて保證したけれども、凡ての人の疑惑はマクベスの上に注がれた。こんな愚かな侍臣共が殺したと疑ふよりも、マクベスが殺したと思ふ方が餘程妥當であつたからである。王の二子は直ちに難を避け、長男のマルコルムは英蘭の宮廷にのがれ、弟のドナルベインは愛蘭に走つた。

王位を繼ぐ筈の王子達が斯くして國を立退いたので、血の續いてゐたマクベスは當然王の位に即いた。茲にあの妖婆達の豫言は文字通り實現せられたのであつた。

マクベスも夫人も思ひ通りに王位にはついたので、マクベスは王となりとも其の後位を繼ぐも

のは彼の子ではなく、バンクオーの子であると言つた彼の妖婆達の豫言を夢にも忘れる事が出来なかつた。唯バンクオーの子孫に榮えを與へる爲に自分達の手に血を塗り、此の怖ろしい極罪を犯した事を考へると、無念なのでいつそバンクオー父子を殺害して、之まで自分達の場合に不思議にも適中した妖婆達の豫言を避けようか決心した。

二人は此の目的の爲め或日大宴會を開いて重立つた貴族達を盡く招待した。中でもバンクオーミその子フリヤンスミは特に鄭重な招待を受けた。其招待に出席するためにバンクオーが夜になつてから宮殿へ来る路には、マクベスの命を受けた刺客が待ち伏せしてゐて、バンクオーを刺し殺した。然しフリヤンスは争鬪の最中に遁れてしまつた。このフリヤンスの子孫からスコットランド歴代の王が出でその後裔であるジェームス六世は英蘭のジェームス一世となつてスコットランドと英蘭との兩國を併合君臨するやうになつたのである。

食卓についてからも王妃マクベス夫人は、極めて愛想よく且つ上品な態度で、女主人らしく禮儀を正し、萬事に氣を配つて座にある凡ての人の心を取り込んだ。マクベスも亦貴族達と打ち解けて語りながら、これで親友バンクオーさへ来ればもう國內の高貴の人々は凡て自分の官殿の中に集つた事になるのだと言ひ、バンクオーの来ないのは、怠慢の罪であつて、何か悲しい不幸が起つたの

でなければいゝ、がなごみ語つた。丁度その時、暗殺されたバンクオーの亡霊が室に現れて、マクベスが今座らうとした椅子に腰を掛けた。マクベスは元より勇敢な將軍であり、ごんな悪魔ごでも平然として對面する事が出来たのであるが、此の怖ろしい幻影を見た時ばかりは驚愕の餘り顔色は土の様になり、亡霊を凝視したまゝ、全く魂を奪はれて立つてゐた。王妃にも貴族達にも何の幻影も見なかつたので、マクベスが空席を凝視してゐるのを見て（皆はさう思つた）不意に精神が錯亂したものだと思ひ、妃は夫の耳に、そんな物が見えるのは、ダンカン王を殺さうとした時に劔が空中に見わたのと同じ幻影だと思ひついてたしなめた。然しマクベスは亡霊を見つめながら、人々が色々言ふのを聞かず狂ほしい言葉を叫び續けた。然もその言葉が餘り意味有りけなので、妃は怖ろしい秘密が露見する事を恐れ、マクベスは折々こんな病氣に悩まされるのであるご虚偽の口實のもとに皆に斷り大急ぎで客を歸らした。

こんな怖ろしい幻影に捕はれてゐるのはマクベスばかりでなかつた。マクベスも王妃も共に毎夜毎夜怖ろしい悪夢に悩まれた。然し殊に兩人を苦しめたのはバンクオーの血よりも、むしろ逃げたフリヤンスであつた。フリヤンスからこそ代々王位に即くべき王者が生れるであらうご信じてゐたからである。此の悼ましき心配の爲め二人の心は少しも平和を得なかつたのでマクベスは遂に、今

一度妖婆達を探し出し何うすれば良いかと聞かうと決心した。

マクベスは妖婆達を荒野の洞窟に訪ねて行つた。妖婆達は其所でマクベスの來るのを豫知して、怖ろしい呪咀薬を用意し、悪靈共を呼び出して未來を占はしめようと待つてゐた。その呪咀薬に言ふのは蛙、蝙蝠、蛇、大蜥蜴の眼、犬の舌、小蜥蜴の脛、梟の羽、悪龍の鱗片、狼の牙、海の毒鱈の咽喉、魔女の木乃伊、毒人參の根（これは暗夜に掘つたのでないご利かない）山羊の膽汁、猶太人の肝、墓の上に根を張つた櫟の小枝、死兒の指、こんなものを皆寄せ集めて大釜の中で煮出し、煮過ぎると狍々の血で冷し、これに自分の子をつた牡豚の血を注ぎ、人殺しの絞首台からつた油火にくべて造るのである。この呪咀の薬で妖婆達は悪靈を呼び出し問ひを掛けるのである。妖婆達はマクベスに向ひ、自分共がその疑問を解かうか、それごも又師匠である悪靈に願はうかご尋ねた。マクベスは今見た物凄儀式に怯ぢる氣色もなく勇ましく答へた。「師匠ごやらは何處にゐる。予に會はせよ。」そこで妖婆達は三つの悪靈を呼び出した。まづ先に現はれた悪靈は兜を被つた頭の姿で、マクベスの名を呼びながら、ファイフの領主に用心せよご言つた。マクベスはその注意に感謝した。それはマクベスがファイフの領主マクダツフに嫉妬を受けてゐたからである。

第二の幻影は血まみれになつた小供の姿をして現れて、マクベスの名を呼び、怖れる事はない、

人間の力なんか鼻であしらへ。女に生落された者で、マクベスを害し得るものは無い。殺伐に、大膽に、決行せよと勧めた。そこでマクベスは叫んだ。

「ではマクダッフ、生きてゐろ、汝を恐れる必要はないが念のために運命から證文を取つて置かう。汝の息の根をも止めてやらう。予の憶病な根性を吐り附けて、雷が鳴らうと、平氣で眠つて居られる様にするために。」

その姿が消えたかと思ふに、第三の悪靈が冠を被つた子供の姿をして手には木の枝を持つて現れた。その子供は又マクベスの名を呼んで、あの大きなバーナムの森が、ダンシネーン丘の上へ攻寄せて来るまでは、戦に負ける事はないと言つて、マクベスに謀反を恐れる事はないと力づけた。マクベスは叫んだ。

「愉快な豫言だ。絶妙。だれが森を引きぬいて、地に生え着いてゐる木の根を動かす得るものぞ。自分は人並の壽命を保ち、不意に惨殺される様な事の無い事は判つた。だが、まだ一つ聴きたくて堪らん事がある。こら、此事も汝の力で告げられるなら言へ……バンクオーの子孫が此國に君臨することがあるのか。」

此の時大釜は地に沈み、音楽が聞え始め、帝王らしい八つの陰影がマクベスの側を通つた。しか

もその最後にはバンクオーが居りその手には鏡を持つてゐた。それはまだまだ澤山居る事を示してゐるのである。そして血みどろになつたバンクオーはその子供等を指してマクベスを微笑した。マクベスはこれを見て、さてこそこの子供等が後にスコットランドに君臨するバンクオーの子孫であると知つた。その後妖婆共はマクベスに尊敬と歓迎の意を表するために靜かな音楽につれて踊りながら消へ去つた。これ以來マクベスの思想は殺伐凶暴になつた。

マクベスが妖婆の囁きを出て切めて聞いたのは、今やイングランドに在つて、マクベスを倒し正嫡マルコルムを王位に即けやうとして、ファイフの領主マクダッフが、軍勢を集めてゐたマルコルムの許へ通れて行つたと言ふ報知であつた。マクベスは狂はんばかりに憤怒して、マクダッフの城を陥れ、後に残つて居た妻子を殺し、續いてマクダッフを少しも關係のある者共を盡く殺してしまつた。

—211—
この様な慘酷な行動を見た貴族達は皆、マクベスを疎んじ、遁れ得る限りは、イングランドで起した大軍を率ゐて進軍しつゝあるマルコルムとマクダッフの軍隊に投じマクベスを怖れて遁れ得なんだ者までも秘かに敵軍の勝利を願つてゐた。マクベスの新兵はのろくゝと進軍した。皆此の暴君を憎み、尊敬してゐる者は一人だに無く悉くマクベスを疑つてゐた。茲に至つてはマクベスも遂に

叛反人の爲に殺されたことは言へ、今は墓場に快よく眠り最早も毒も、國內の怨恨にも 國外の敵軍にも惱まされぬ平靜な状態に居る、自分が暗殺したダンカンを却つて羨むやうになつた。

斯んな最中にマクベスの隱謀の唯一の相談相手であつた王妃が死んだ。夜な夜な二人が悪夢におそはれた時にも、マクベスは一時的な慰安を王妃の胸に求めてをつたのであるが、さしもの王妃も犯した罪を後悔する念も、人民からの憎しみに耐へ兼ねて自刃したと信ぜられてをる。このためにマクベスは誰一人自分を愛し、心配して呉れる者もなく、又今は陰謀を打明ける一人の友達さへもない天涯孤獨の身になつた。

マクベスは命すら惜しからず。却つて死をさへ願つてゐたけれどもマルコルムの軍隊が近づいて來たことを聞いた時には流石に昔の勇氣が心に湧き起つて「甲冑を身に著けて」死なうと決心した。其の上妖婆共の便り無い約束を覺束なくも信じて女に生み落された者で、自分を害し得るものはなく、バーナムの森がダンシネーンの丘の上へ攻寄せて來ない限りは敗けないと言つた事を思ひ出して、そんな事は有り得ないと信じてゐた。そこで彼は敵の攻撃を防ぐに屈強な自分の城に立て籠り不快氣にマルコルムの近づくのを待つてゐた。ところが或日一人の使者が蒼白になり、怖れ戦きながら駈けて來て、言葉も絶々に報告した所によるに、その男が丘の上で見張りをしてバーナムの方

を見てゐると、森が動き始めた様に思はれると報告した。マクベスは叫んだ。

「嘘をつけ。畜生、もし嘘ださするに、すぐ手近の木に汝を吊して、餓死するまで打棄つてをくぞ。もし事實なら予をさらしたつて關はぬ。」

今やマクベスの信念は搖ぎ出し、惡靈共の言つた同じ言葉を疑ひ始めた。實はマクベスはバーナムの森がダンシネーンに來る迄は恐れる必要はなかつたのである。それに今森が動き出した。

「若し彼奴が報告する通りださするに、武器を取つて打つて出る、逃けても止まつても駄目だ。あゝ日の光を見るのも厭になつた。早く予も死んでしまひ度い。」

此の絶望的な言葉を殘して、今や城のあたりまで攻め寄せて來た敵軍の中へ踊り込んだ。

見張りの男が森が動いて來ると思ひ込んだ奇妙な出來事は何でもない事だつた。マルコルムは計略のうまい將軍だつたので、本當の兵數を敵に知らさない爲めに軍隊がバーナムの森を行進する時には、兵士に一本づゝの木を切つて持たせたのであつた。此の様に枝を前に翳して進んだために、遠くから見てゐた番兵を驚かしたのである。さて先に惡靈が述べた言葉は、マクベスの考へてゐたのと同じ意味こそ異つてはゐるが、事實となつて現れたのである。かくてマクベスが頼んでゐた命の綱は切れた。

兩軍の間に激しい戦は始まった。味方の兵士達も事實、皆マクベスを憎みマルコルムやマクダツフの軍隊に加勢してゐたため、誰一人援助するものも無かつたけれども、マクベスは猛然と勇氣を振り起し死物狂ひで、手向ふ敵を片端から切り捨て、遂に大將マクダツフの側まで来た。併しマクダツフを見るや、誰よりもマクダツフに注意せよと悪靈に言はれてゐたことを思ひ出して引返さうとしたが、戦の初めからマクベスを探し廻つてゐたマクダツフは、それを遮つて引戻し、二人の間には激烈な戦が始つた。マクダツフは自分の妻や子を殺した罪をひどく責め、マクベスは彼の家族を殺した事を既に深く悔ひてゐたので、戦はふさしなかつたが、マクダツフは飽迄も強ひて、遂には暴君、殺人者、地獄犬、悪黨など罵つた。

そこでマクベスは、女の生み落した者で自分を害する者はないと言つた悪靈の言葉を思ひ出して會心の笑をもらしながら言つた。

「無駄な骨折だ。マクダツフ。其劍で予に血を流させることが出来るやうなら、斬るこの出来ない空氣にも切形が附けられやう。予の生命には呪ひがしてあるから、女に生み落された男なんかに殺される虞はないぞ。」

「その呪ひは駄目だと思へ。汝が常住信仰してゐる偽つきの悪靈に聞き直して來い。マクダツフ

は凡骨のやうに女の腹から生れたのでないぞ。おれは母の腹を裂いて生み出された人間だ。」

「おれの憎むべき、其舌の根」マクベスは最後の頼りの綱も切られて、震へながら叫んだ。

「あの嘘つきの悪魔共め、兩義の言葉で人を欺き、耳へは約束を守るらしく聞かせておいて、肝腎の望を失はせる悪魔共め。もう信ずる事は出来ないぞ。……汝は戦はない。」

「ぢや降参しろ。命だけは助けて見せ物にしてやらう。珍らしい妖怪の様に、そして盾板に「評判の暴君」を書いてやらう。」

「降参なんかするものか。」とマクベスは捨鉢になつて勇氣を振り起し、「あの青二才のマルコルムの脚下で地面を嘗めたり、愚民共に呪ひ辱められる様な目に逢ふものかい。たごへバーナムの森がダンシネーンにやつて來ようよ、女に生み落されない汝が立向はうよ、最後の運試しをして呉れる。」と斯く狂はしく言ひながらマクダツフに立ち向つたが、激戦の後遂に敗れ、その首は斬られて若い正嫡の王マルコルムに贈物とされた。マルコルムは久しい間叛逆者の惡計のために剝ぎ取られてゐた政權を取り戻し、ダンカン温和王の後を受けて、貴族や人民の歡呼のうちに王位に即いた。

終りよきは皆よし

ルウジロンの伯爵バートラムは最近父が死んだため、爵位と領地とを得る事になった。フランス王はバートラムの父を愛してゐたので、その死を聞くにすぐバートラムにバリーの宮廷まで急いで来る様にと言ひ送つた。王は亡き伯爵と親しくしてゐたので、その子のバートラムにも特別の寵愛と保護を與へようと思つたからである。

フランス宮廷の老貴族ラフーが伯爵を迎へに來た時、バートラムは今は伯爵未亡人である母と一緒に暮してゐた。フランス王は非常な専制君主であつたから、その招待も言つても勅令、否、嚴令であつたので、臣下である限りみんなに身分が高くてもそれに従はぬ譯には行かなかつた。伯爵夫人は、その可愛い子供と別れるのが、つい先程失つた夫の葬式を、もう一度する程に辛かつたけれども、息子を一日も留めて置かず、すぐに出發する様に命じた。伯爵を迎へに來たラフーは故伯爵の死を悼み、また不意に息子の不在になるのを色々と慰めて、宮廷一流の追従で、王はバートラムの幸福を計つて下さるまいふ位の意味で、王が如何にも親切な人であり、伯爵夫人の夫としても良いだらうし、バートラムの父にもなつて下さるだらうと語つた。ラフーは又伯爵夫人に、王は大病

にかゝつてゐて、醫者からこゝも癒らないと宣告されたと言つた。夫人は王の病氣を聞いて非常に同情を寄せ、ヘレナの父がヘレナは夫人の侍女であつて、其場にゐた。若し生きてゐたならば、きつと王の病氣を癒す事が出來たのにと言つた。それから夫人はヘレナはジェラルド、ド、ナルボンと言ふ名醫の一人娘であり、その父が臨終の時娘の行末を呉々も頼んだので、その死後ヘレナをあげかつてゐるのであると、ラフーにヘレナの身の上話を少し話した。伯爵夫人はヘレナが偉い父から受継いだのだと言つて、娘の氣高い氣質と優れた性格を褒めた。へた。夫人がこんな話してゐる時、ヘレナは悲しげにすゝり泣きをしてゐた。夫人は靜かに父の死をそんなに歎きな言論した。バートラムは母に別れを告げた。伯爵夫人は涙ながらに色々祝福を祈りつゝ、愛兒と袂を別つた。そしてラフーに息子の世話を頼んだ。

「さうぞ貴下が此の子に注意してやつて下さい。宮廷等には不馴れですから。」

バートラムは最後にヘレナと言葉を交した。が唯ヘレナの幸福を望むと言ふ挨拶に過ぎなかつた。そして別れの言葉を結んで言つた。

「さうぞ母上に親切をして、よく面倒を見て上げて下さい。」

ヘレナはずつと前からバートラムを戀してゐた。そして黙つたまゝ、悲しげに泣いてゐた時も、父

ジェラール、ド、ナルボンの爲に涙を流してゐたのではなかつた。ヘレナは父を愛しては居たが、今別れやうとしてゐる人に對するより強い愛情の爲に、死んだ父の形や姿までも忘れてゐた。娘の胸はバートラムの姿以外の幻影を想像する事が出来なかつた。

ヘレナは長い間バートラムを戀してゐた。然しヘレナは絶へずバートラムがフランスの最も古い家柄の後裔であり、ルウジロンの伯爵である事を忘れなかつた。それなのにヘレナは賤しい身分の生れであつた。彼女の両親は語るに足る程の身分の者ではなかつた。然るに伯爵の先祖は皆貴族であつた。だからヘレナは身分の高いバートラムを自分の主人とし、君主として尊び、自らは伯爵の下婢として仕へ、伯爵の國土の爲めに死なうと言ふ願より外に何も考へてゐなかつた。身分の高い伯爵と自分の賤しい生れとの間には非常に大きな距離があると思つてゐたので、ヘレナは常に言つた。

「私は一つの輝いた特別な星に戀をして、それと結婚したいと願つてゐる様なものです。バートラムは私よりは高い高い所にゐるのですもの。」

バートラムの留守中、ヘレナの眼には涙の乾く暇さへなく、胸には悲しみが満ちてゐた。ヘレナは望みの無い戀をしてゐたのではあつたが、いつでも伯爵を見る事が出来ると言ふ事はまだしもやる瀬ない慰めであつた。ヘレナは常に座つて伯爵の黒い瞳を見上げ、弓なりの額や美しくしい卷毛等

をながめながら、遂には自分の心の繪板に、——その心はいとしい愛人の顔の輪廓の一線さへ残らず記憶に書留める事が出来た——すつかり戀人の似姿を描き得る様になつた。

ジェラール、ド、ナルボンは死ぬ時娘に、何一つ残さなかつたが只、貴重な折紙附の處方書を残したのみである。その薬は父が藥學の深い研究と長い醫術の經驗に依つて最も權威あり、決して誤りのない醫藥として集めたものであつた。その處方書の一つに、ラフーが話した王が今罹つてゐる病氣に良く利くと言ふ薬があつた。そこでヘレナは王の病狀を聞くと、今まで大層卑下し、失望してゐたのが、急に大望を起して自分でバリーへ出掛けて行き王の病氣を癒さうと決心した。然し例へヘレナが立派な處方書を持つてゐるにしても、王も醫師も皆この病氣は癒らぬものと思つてゐるのだから、ヘレナの様な貧弱な學問も浅い少女が病氣を癒さうと申し出た所で、それを聞き入れて呉れさうにも思へなかつた。併し、自分が投薬する事さへ許され、ばきつと成功すると言ふ確かな希望をヘレナは持つてゐた。自分の父が當時、最も有名な醫者であつたから、父の熟練を信じ切つてゐた。ヘレナは此の良薬が自分に幸運を齎らす遺産として、天に輝いてをるすべての幸福の星に認められてをると言ふ強い確信を持つてゐた。遂にはルウジロン伯爵夫人と言ふ名譽をさへ得られるだらうと信じてゐた。

パートラムが去つてから間もなく、伯爵夫人は家令から、ヘレナがパートラムに戀をしてをりその跡を遂つてバリーへ行かうと言ふ意味の獨語を言つてゐたのを立聞きしたと告げられた。伯爵夫人は家令に禮を言つて去らせ、ヘレナに話し度い事があると傳言を頼んだ。今ヘレナの事に就て聞いた伯爵夫人ははからずも遠く過ぎ去つた日の思出を心に浮べた。その日と言ふのは恐らく夫人がパートラムの父を始めて戀し始めた頃の事であつただらう。そして獨語を言つた。「私の若い時分もさうだつた。戀は青春の薔薇に着いてゐる刺である。人間は青春時代に何んなに自然の子として育つても戀と言ふ過失をするものである。その時分にも少しも過失だなどとは思ないけれども。」伯爵夫人が自分の若い時分の戀のあやまちに思ひ耽つてゐた時、ヘレナが室にはゐつて來た。そこで夫人は言つた。「ヘレナ、私はお前のお母さんだと言ふ事を知つてゐるでしやう。」「どうしまして、あなたは私の御主人です。」夫人はも一度繰返して言つた。「お前は私の娘です。そうです。私はお前のお母さんです。お前は何うして私の言ふ事をそんなに驚いて蒼い顔をするんです。」ヘレナは自分の戀を怪しまれてゐるのかと怖れて、顔色を變へ頭は亂れて答へた。「お許し下さいませ。奥様、あなたは私のお母様では御座るません、ルウジロン伯爵が私の兄様でもなければ、私があなたのお娘でもありません。」「然しね、ヘレナ、お前は私の子の嫁になるかも知れません。そしてお前はきつ

とそれを望んでゐるでせう。お前は、母だとか娘だとか言ふ言葉に迷はされてゐる様だが、ヘレナ、お前は、私の息子を戀してゐるでせう。」「奥様お許し下さいませ。」驚いてヘレナが答へた。「お前は私の息子を愛してゐるのかね、」夫人が又繰返してたづねた。「奥様、あなたはあの方を愛してゐらつしやいませんか。」「お前そんな逃げ口上ばかり言ふものぢやないよ。さあ、お前の戀はすつかりわかつてゐるのだから、隠さずにお前の心持を言つておしまひ。」ヘレナは止むなく跪いて自分の戀を自白し、耻と怖れを以て貴い女主人に許しを願つた。そして二人の身分が不均合であるさういふ意味を表現するに適當な言葉で、パートラムは私が戀してゐる事を少しも知らないと言ひ張り、自分の賤しい、望みのない戀は丁度印度人が常に太陽を崇拜してゐるけれ共太陽はその崇拜者を見下してゐるばかりで、それ以上何もその崇拜者に就て知らないと同じであると言つた。夫人はヘレナが最近バリーへ行かうと言ふ意向を持つてゐないかたづねた。ヘレナはラフーから王の病氣を聞いた時以來巴里行は心に定めた計畫であると話した。「それがお前のバリーへ行く動機なのかね、正直に言つておしまひ。」ヘレナは正直に答へた。「奥様、あなたのお子さんの爲ばかりに私はそんな事を考へたので御座るます。もしあの御方がゐらつしやらなければ、バリーの事も、藥の事も、王様の事も私の頭からは消えてゐましたでせう。」夫人は、此の一伍一什の告白を譽めもせぬ

ば又非難もせないで、直ぐにヘレナに王様の病氣によく利くと言ふ藥の効果に就て尋ねた。夫人はその藥はジェラール、ド、ナルボンが、その所持品中でも最も珍重してゐたものであり、臨終のきはに娘に興へたものであつた事を知つた。そして夫人自らその時娘の身の上を引受けた堅い約束を思ひ出し、娘の幸運も、王の生命も唯此の計畫を實行するにある事を知つたので（その考へは可愛い少女の思ひ付きではあつたけれど、夫人には王の病氣を癒し、ジェラール、ド、ナルボンの娘の未來の幸運を作る爲に、天の力が見えない働きをしたものごしか思はれなかつた。）そこで、ヘレナに自由にバリーへ行く事を許し、親切にも充分の用意と適當な供人を附けてやつた。ヘレナは伯爵夫人の祝福と、成功の祈りに送られてバリーへ出發した。

ヘレナはバリーへ着いた。そして知己の老貴族、ラフの盡力で、王に面會する事が出來た。併し多くの困難は猶待ち受けてゐた。王に此の若い美しい醫者の差出した藥を用ひる様に勧める事は容易な事ではなかつた。ヘレナは私はジェラール、ド、オルボンの娘であるご告げた。（王は父の名聲をよく知つてゐた）そして父の長い間の經驗と熟練との精髓を集めた至寶であるご言つて貴重な藥を納め、しまひには勇ましくも、若し此の藥が二日間に王を元通りの健康體に回復しないなら、自分の命を賭けませうご言つた。王は遂にそれを試みようご言ひ、若し王が二日間に癒らなければ

ヘレナは命を失ふが、若し藥がきけば、フランス中の男を誰でも（王子丈は例外であるが）夫に撰ぶ事を許さうご約束した。ヘレナが若し王の病氣を癒したならばその謝禮として夫を撰ぶ事を求めたからである。

ヘレナが父の藥の効能に對して抱いてゐた望は破られなかつた。二日間が終らない前に王は元の様な健康體に治つた。そこで王は宮庭内の若い貴族達を集めて、美しい醫者に報酬として約束して置いた夫を撰ばせようとした。そしてヘレナにその未婚の若い貴族達の群を見廻して、その中から夫を撰ぶ様に言つた。ヘレナは撰擇にぐづくしてゐなかつた。その貴公子達の中にルウジロンの伯爵が居つたからである。ヘレナはバートラムに向つて言つた。「此の人こそ私の夫です。私はあなたを夫にもらふとは申しませぬ、伯爵様。私はあなたの指導の下に生きてゐます限り此の身を捧げあなたの爲に仕へませう。」「それではバートラムこの娘をつれて行け、この娘はお前の妻なのだ。」と王が言つた。バートラムは躊躇せず、王の贈物である身を捧げるご言ふヘレナが嫌ひである事を斷言して、此の娘は貧乏な醫者の娘であり、自分の父の情で育ち、今もまだ自分の母の恵で居候をしてゐるのだご言つた。ヘレナは伯爵が自分を輕蔑し拒絶する此言葉を聞いて、王に言つた。

「王様の御回復なさつた事を私は大層喜びます。がもうこれ以上の事はおかまひ下さいますな。」

然し王は自分の命令が、こんなに輕んぜられるのを見逃しにする譯には行かなかつた。そして又貴族達に結婚を授ける事がフランス王の多くの特權の一ツであつたからである。その日すぐバートラムはヘレナに結婚させられた。バートラムにまつては無理強ひな、不快な結婚であつたのみならず可愛相な娘にとつても全く先の望のない結婚であつた。ヘレナは自分の命を投出してさへ得たいと願つてゐた貴族の夫を得たのであるが、こんなフランスの王に雖も夫の愛だけは授ける事が出来なかつたので、唯華やかな空虚を得たにすぎなかつた。

ヘレナが結婚するや否や、バートラムは、妻から王に夫を宮庭から去らしたいと願はした。そして王から妻が夫が去つても佳いと言ふ許しを得て歸つて來た時、バートラムは自分は此の不意の結婚に就いて充分の準備をしてゐなかつた爲、非常に心が動搖してゐるから、自分が何をしようか怪しむではいけないと語つた。たとへヘレナがそれを怪しまなかつたにしても、夫が自分を捨てようとする意志のある事を知つた時には歎かずにおれなかつた。伯爵は妻にすぐ母の所へ歸る様に命じた。ヘレナは此の不人情な命令を聞いた時に答へた。「私は此の事に就て何も申し上げませぬ。然し私はあなたのため最も從順な召使で御座ります。そして永久に真心よりの忠節を盡して私の賤しい星が、あなたの大なる幸運の不均合であるその砂漠を補ひませう。」然し、此の謙遜なヘレナの言

葉も、高慢なバートラムの心を動かして優しい妻に同情させる事は出来なかつた。伯爵は普通に禮儀とするだけの別れの挨拶さへもせないで立ち去つた。

そこでヘレナは伯爵夫人の許へ歸つて行つた。ヘレナは自分の旅行の目的は果して、王の一命を取り止め、自分の心より愛する夫、ルウジロン伯爵に結婚はしたけれども、高貴な義母の許へ落膽して歸つた。そして家に入るや否やバートラムからの手紙を受取つたのであるが、それを讀んだヘレナは殆んど心臓も破れさうであつた。

親切な伯爵夫人は、ヘレナが自分の息子の撰んだ妻であり、高貴な身分の女であるかの様に、丁寧な歓迎の言葉を以て迎へた。そして情のこもつた言葉でバートラムが結婚式の日唯一人で妻を家に送り返した不親切を慰めた。然し此の情ある迎への言葉もヘレナの悲しい心を惹き立てる事は出来なかつた。「奥様、主人は去りました。永久に去りました。」と言つてバートラムの手紙に書いてある次の様な句を讀んだ。「お前が若し私の指にはめてゐる指輪を得る事が出来たなら、——私は決してそれを離さないだらうが——その時こそお前は私を夫と呼んでよいのだ。だが、そんな『その時』と言ふものは決して來ないものなのだ。」「まあ、何さいふ怖ろしい言葉で御座いませう！」ヘレナが言つた。伯爵夫人は娘に辛抱して待つてをる様に頼み、バートラムは何處かへ行つて

しまつたのだから、その代りにお前は本當の自分の子供である。バートラムの様な亂暴な男の二十人も従つてゐる様な立派な貴族に嫁いで、奥様くみと呼ばれてゐても佳い位の資格があると言つた然し此の自分の優れた母が、嫁の悲しみを慰めようとして、身を卑下したり、親切な追従を言つても凡て無駄であつた。

ヘレナは尙手紙を見つめたまゝ、悲しみの極泣き叫んだ。「私に妻なぞがなくなり、フランス中に私の物が何一つ無くなる迄」夫人はそんな言葉が手紙の中に書いてあるのかとたづねると、「ハイ奥様」ミ唯一言哀れなヘレナは答へ得ただけであつた。

次の朝ヘレナは居なくなつてゐた。そして自分が居なくなつてから夫人に渡される様に、自分が不意に立去る様になつた理由を告げる爲に書いた手紙を残して行つた。その手紙の中には、自分がバートラムを故郷からも生家からも追出してしまつた事を非常に歎しく思ふ事、それから自分の罪を償ふために、聖ジャック・ル・グランの寺院へ順禮に出掛ける事等を書き連ね、最後に自分の夫に對して彼があれ程嫌つてゐた妻はもう永久に彼の家に歸つて來ない事を告げて呉れミ頼んで結んであつた。

バートラムはバリーを去つて後、フロレンスへ渡り、フロレンス侯爵の軍隊の士官になつた。そし

て戦争中で多くの勇敢な行動に依つて勇名を馳せた後、母から手紙が來て、ヘレナがもう自分を困らせはしないと言ふ都合のよい知らせに接した。そこでバートラムは家へ歸る準備をしてゐた時にヘレナは身に順禮の服を着て、フロレンスの街へやつて來た。

フロレンスの町は聖ジャック・ル・グランの寺院へ行く順禮が常に通る町であつた。そしてヘレナは此の町に着いた時、容好きの寡婦が住んでゐて、斯の寺院へ行かうとしてゐる女の順禮遠を常に家に迎へて泊らせ、親切な待遇をすると言ふ事を聞いた。それでヘレナは此の親切な婦人の所へ行つた。寡婦は愛想よく迎へて、何でも此の有名な街で珍らしいと思ふものがあれば案内してあげようと言つた。そして又侯爵の軍隊を見たいと思ふなら、軍隊がすつかり見られる所へつれて行つてあげようと語つた。「その中にはあなたの方の國の人も居りますよ、ルウジロン伯爵と言ふ名です侯爵は戦争で大變な手柄を立てた人なんです。」ヘレナはバートラムに出合ふのを知つて、もう何も見度いとは思はなかつた。が、女主人について行つた。ヘレナにとつては自分の愛する夫の顔を今一度見る言ふ事は、哀しいそして苦しい喜びであつた。「あの人は美しい男ぢやありませんか。」ミ寡婦が言つた。「私はあの人が大好きです。」とヘレナは心から言つた。道を歩いてゐる間絶えず、話好きな寡婦はバートラムの事ばかりを言ひ續けた。バートラムの結婚の話から、自分の

妻である哀れな婦人を置き去りにして、一緒に住むのが嫌なばかりに侯爵の軍隊へ入つた事等を話した。此の自分自身の不幸な話をヘレナは辛抱強く聞いてゐた。然しそれが終つてもまだバートラムの話は盡きてゐなかつた。と言ふのは寡婦が他の話をし出した。それはバートラムと寡婦の娘との戀物語であつたので、一語々々ヘレナの胸の奥にまで響いた。バートラムは王から自分に強ひられた結婚は好まなかつたけれ共、戀を感じない様な男ではなかつた。彼がフロレンスに軍隊と共に留まる事になつて以來、若い美しい淑女のダイアナと戀に落ちたのである。その娘こそヘレナを泊めた寡婦の娘であつた。そしてバートラムは每晚様々な音楽と、ダイアナの美を讃へる爲に作つた歌とを以て、娘の窓の下に来て娘を戀に誘惑した。男の願ひと言ふのは家の者達が寢靜まつてから娘の室へ忍び入る事を許させようと言ふのであつた。然しダイアナは決してこの亂暴な要求に應じなかつたし、又男が結婚した事を知つてゐたので、その願ひに對しても少しの好意をさへ見せなかつた。ダイアナは慎み深い母の手許で育てられて居た。そしてその母と言ふのは、今では落ぶれてはゐるが元は高貴の生れで、キャピュレの貴族の後裔であつた。

親切な婦人はかふいふ話をすつかりヘレナに物語つた。分別ある自分の娘の徳高い性質を存分に褒め、全く自分が施した優れた教育と良い躰けのお蔭だと言ひ、其の上バートラムがうるさくダ

イアナにつきまごつて、もう明朝は早くフロレンスを出發すると言ふので、今晚は是非ダイアナを訪問する事を許して呉れる様にと執拗く頼んでゐる事をも語つた。

ヘレナはバートラムが寡婦の娘に對する戀を聞いて悲しんだけれ共、尙この話から熱心なヘレナの心は（前の計畫が失敗した事等で少しも氣を挫かれはしなかつた）不人情な夫の氣を取戻すために一つの計畫を想ひついた。ヘレナはそこで寡婦に自分がバートラムの棄てた妻ヘレナである事を明かし、親切な女主人こそその娘に願つてバートラムの訪問を特に許し、又自分をダイアナだとしてバートラムに會はせて呉れる様にと願つた。そして自分が夫に此の様な秘密を作つて會ふ事を願ふ重なる原因は、夫がそれさへ自分が得たならば自分を妻と認めてやらうと言つた、指輪を夫から得た爲であつた。

寡婦と娘とは、なかば此の不幸な捨てられた妻に對する同情に動かされ、なかばヘレナがその報酬として、將來もつて御禮をするが、その印として金一封を與へたからさういふ利益に動かされて此の事件に就てヘレナに援助をしようとする約束した。その日の内にヘレナはバートラムの所へ自分が死んだと言ふ通知を傳へさせる様にした。そして自分が死んだと言ふ報知に依つて、夫に自由に二度目の妻を撰ぶ事が出来ると思はせて置いて、自分が變装してゐるダイアナに結婚を約させよう。

望んだのである。そしてヘレナは若し自分がその指輪とその約束を共に得る事さへ出来たならばその事から未來の幸運が幾らか出て来るだらうと確信して居た。

夕方、暗くなつてから、バートラムはダイアナの室に招ぜられた。ヘレナはそこに彼を迎へる爲に待つてゐた。夫が言ふ追従らしいお世辭や戀の打掛け話等は、ダイアナだと思つて言つてゐるものだとは知つてゐたが、ヘレナには例へ様もなく嬉しく響いた。そしてバートラムは非常に婦人が氣に入つて、遂に夫となり永久に彼女を愛しようと言ふ嚴やかな約束を結んだ。是を見てヘレナは大層バートラムを喜ばせた。談話の主が本當の彼の妻であり、悪んでゐたヘレナである事を知つても、怒らない程眞の愛情が湧いて来る前兆であればいゝに望んだ。

バートラムはヘレナがそんなに多感の婦人であるとは知らなかつた。若し知つてゐたならば妻に對してあの様に冷淡ではなかつたであらう。その上毎日／＼ヘレナを見てゐたので、その美くしさに馴れて氣に留めてゐなかつた。我々が絶へず見馴れてゐる顔は、美しくいしる平凡にしる、初めて見た時に受ける様な感じを失つてしまふものである。又ヘレナの理解力が何んなであるか言ふ事をバートラムが知る事が出来なかつた。といふのは彼に對する愛情と尊敬の念とから、バートラムの前に居る時はいつもヘレナは黙つてゐたからである。然し今は自分の運命や、又戀の計畫の

幸福な終結等が凡て、今晚の會合でバートラムの心に好い印象を残して置くか否か云ふ事に掛かつてゐると思つたので、夫を喜ばせる爲にあらゆる智恵を絞つた。ヘレナの生々とした會話の楚々たる温雅さや、その立居の端麗さにバートラムはすつかり魅せられて、自分の妻になつて呉れよと願つた。ヘレナは夫の指の指輪を愛情の證として望むバートラムは直に與へた。そして此の大切に保存して置かねばならぬ指輪を交換に、ヘレナは夫に王から贈られた指輪を與へた。夜明け前にヘレナはバートラムを送り出した。そしてバートラムは直ちに自分の母の家へと旅立つた。

ヘレナは寡婦とその娘に自分と一緒にバリーへ行く事をすゝめた。ヘレナの考へた計畫を完全に果たす爲には二人の援助がまだ／＼必要であつたからである。三人がバリーに着いた時、王はルウジロンの伯爵夫人を訪問に行つた事が判つたので、ヘレナは大急ぎで王の跡を追つた。

王は今も壯健であつた。そして自分の命を救つて呉れた娘に對する感恩の情は、王の心の中に溢れてゐたので、ルウジロンの伯爵夫人を見るや否やヘレナの事を語り初め、自分の最も大切な寶物が夫人の息子の馬鹿の爲に失はれた事を語つた。然し此の話題が夫人を困らせ又心からヘレナの死を悼んでゐるのを見て言つた。「奥様、私はもう凡てを許し、凡てを忘れしました。」然し其の場に居た心の優しいラフーは、自分の可愛いヘレナの想ひ出がそんなに輕々しく取り扱はれるのを見逃し

にする事は出来なかつた。「此の事だけは私が言はなければなりません。若伯爵は陛下に對し、母上に對し、御夫人に對して、大罪を犯されました。それ以上自分自身に對して最大な罪を犯されたのです。何故かと言へば、その人の美しくしさは凡ての人の眼を驚ろかせ、その言葉は凡ての人の耳を捕虜にし、その人の奥ゆかしい氣品は凡ての人の心をしてその人に仕へたい願はせる様な、そんな立派な妻を失はれたからです。」王は言つた。「失つた人の事を褒める益々その人が懐かしくなるものだ。さうだ、彼を此處へ呼べ。」彼と言ふのはバートラムの事であつた。バートラムは王の前に出て來た。併し王はバートラムがヘレナに對してした罪を深く悲しんでゐるのを見て、亡き父と立派な母に免じてその罪を許し又元通り寵愛する事となつた。然し伯爵を見てゐた王の温和な顔が見る／＼内に變つた。それは王がヘレナに與へた指輪をバートラムが指にはめてゐたからである。王はその指輪をやつた時ヘレナが、若しも何か大變な不幸にでも出會つた時王自身に與へる外には何んな事があつても離さないと天の女神達に誓つて言つた事を良く覚えてゐた。バートラムは王が何うしてその指輪を手に入れたかと言ふ問に答へて、或る婦人が窓から投げてくれたのだと言ふ有りさうもない話をし、結婚の日以來ヘレナには決して會はなかつたと言ひ張つた。王はバートラムが彼女を嫌つてゐる事を知つてゐたので、殺したのではないかと怪んだ。そこで王は近衛兵に命

じてバートラムを捕へよと言つた。「余は恐ろしい考へに取まかれてゐる、ヘレナの命が無残にも取られたのではないか。」この時ダイアナと母とが這入つて來て、王に願つてさうか王の權力でバートラムをダイアナに結婚させて下さい。彼は結婚の堅い約束をしてゐるのですからと歎願した。バートラムは王の怒りを怖れて、そんな約束をした覺悟はないと否認した。そこでダイアナは（ヘレナからもらつて置いた）指輪を出して、確かであると証言した。そこでバートラムに結婚の約束をした時この指輪と引換へに、彼が今はめてゐる指輪を與へたのであると言つた。此の言葉を聞くに王は亦近侍に又この女をも捕へよと命じた。此の女の言ふ事とバートラムの自白とが異つてゐるので、王の疑ひは益々加はつた。王は若し兩人がヘレナのこの指輪をさうして手に入れたかを自白しなければ殺してしまはうと言つた。ダイアナは自分がその指輪を買つた寶石屋を母親に呼んで來てもらふ事を許されたいと王に願つた。許されたので母が出て行くに、直ぐにヘレナをつれて歸つて來た。

我が子に危険のせまるのを獨り悲しみながら見てをり、息子が妻を殺したと言ふ疑ひが本當であるかも知れないと思つて心配してゐた、善良な伯爵夫人は、自分が生みの母と同じ様な愛情を以て愛してゐたヘレナが尙生きてゐた事を知つて、抑へる事の出来ない歡喜を感じた。王は喜びの餘り

それがヘレナである事を殆んご信する事が出来ないやうであつた。「此の人は本當にバートラムの妻だらうか。」ヘレナは未だ自分が妻として認められてゐないのを感じてゐたので答へた。「いゝ、陛下、あなたの御覽になるのは妻の影に過ぎません。名前ばかりで本當の妻ではありません。」バートラムは叫んだ。「両方です。両方です。さうぞ私を許して下さい。」「お、あなた、私が此の美しい娘に變装してゐました時には、驚く程御親切でした。まあ御覽なさいこれがあなたのお手紙ですよ。」ミヘレナは答へて前には泣く泣く讀んだ手紙を今は嬉しげに讀み上げた。「お前が若し私の指にはめてゐる指輪を得る事が出来たなら」それが出来たのです。あなたが指輪を御與へになつたのは私なんですよ、此んなに重ね重ねに打ち勝つたのですから、今こそは私の夫になつて下さるでせう。」「若しあの晩私が話した婦人がお前であつた事を明らかになし得るなら、私はお前を永久に深く愛しよう。」とバートラムは答へた。此の事を證する爲にヘレナと一緒に來てをつたダイアナは母には、それは容易な仕事であつた。王は心から感謝してをる自分の命拾ひの恩人にダイアナが友達として援助を與へた事を非常に喜んだ。そしてダイアナにも高貴な夫を與へようと約束した。ヘレナの事から王は、立派な功績をした美しい婦人には、立派な貴公子を與へるのが王らしい贈物だと言ふ事を思ひ附いたからであつた。

斯くしてヘレナは父の遺産が本當に天の最幸の星に淨められてゐた事を知つた。その御蔭で今は愛するバートラムの愛妻となり、氣高い夫人の娘となり、自らルウジロンの伯爵夫人となつた。

ぢやく馬馴らし

ぢやく馬のカサリンは、バデユアの市の富豪バプチスタの姉妹であつた。さうにもかうにも手のつけられぬ氣象と猛け猛けしい氣質で、いつも大きな聲でガミ／＼言つてゐるので、バデユアの町ではぢやく馬のカサリンと言ふ名で通つてゐた。此の女と結婚しようと思つた程の紳士を見出す事は非常に困難で、實際不可能であるときへ思はれてゐた。それでバプチスタは、温和しい妹のビヤンカには澤山の立派な結婚の申込みがあるのを姉妹が自分の手からすつかり離れてしまふまで、妹のビヤンカに結婚を申込む自由を與へないと言つて、ビヤンカの求婚者達を一時、斷つたから彼は非常に非難を受けた。

然し其の時丁度バデユアにペトルキオと言ふ紳士が嫁を探しにやつて來た。此の男はカサリンの性質の噂を色々聞いても少しも驚かず、金持で美しくいと言ふ事を聞くに、此の名高いぢやく馬娘と結婚して、優しい従順な妻に馴らしてやらうと決心した。實際ペトルキオ程此の大事業に適

した男はなかつた。彼はカサリンと同様に元氣があり、そして頓智のある氣樂な滑稽家であり、同時に賢くて、その上ぎんな時にも正しい判断力を持つてゐた。それで自分の氣持が穩かである時にも、適當だと思へばいつでも烈しい亂暴な振舞をして、心ではその亂暴を愉快さうに笑つてゐる事さへ出來た。それは彼の性質が氣樂で屈託がなかつたからである。ペトルキオがカサリンの夫になつた時見せかけてやる暴々しい様子も、單に遊戯にすぎなかつた。或はもつと適切に言へば、烈しいカサリンを征服する事は、只同じ様に感情的な方法でやるより外に策がないと判断して居た。

そこでペトルキオはぢやく馬のカサリンの所へ結婚の申込みに出掛けた。先づ最初に父親のバプチスタに會つて優しい娘さんのカサリン——ペトルキオはさう言つた——に結婚を申込み許しを願つた。わざとカサリンの優やかな温しさや、優さしい行ひ等を聞いたので、その愛を得ようとしてベロナから態々やつて來たのであると言つた。父親は、娘の結婚する事を望んではゐたが、カサリンはそんな立派な性質ではないと告白せなければならなかつた。間もなく娘が何んな風に優しいかと言ふ事が明らかになつた。と言ふのは娘の音樂の先生が室に飛び込んで來て、優しいカサリンが、その曲の間違つてゐる所を注意されたのを怒つて、琵琶で先生の頭をなぐつて傷をさせたと言を言つた。それを聞いてペトルキオは言つた。

「仲々勇敢な娘さんです。私は急にその人が好きになりました。會つて話をして見度くてなりません。」そして老人に早く確答をして貰いたと望んで言つた。

「私は事を急いでゐるのです、バプチスタさん。私は毎日戀を求めに來る事は出來ません。御承知のやうに私の親父は死にました。そして私に土地や財産をすつかり相續する様に残して置きました。そこでですが、若しあなたの娘さんの愛を得る事が出來ましたら、何を持參金に下さいますか。」

バプチスタは此の男の戀人としては態度が少し不作法だと思つたが、カサリンに結婚すると言ふのを喜んで、持參金として貳萬クラウンを與へ、自分の死後は領地の半分を與へるに答へた。そこで此の面白い求婚はすぐに許されてバプチスタはぢやく馬娘に戀人の言葉を告げ、ペトルキオの求婚を聞かせる爲に呼びに行つた。

待つてゐる間にペトルキオは色々と求婚の方法を考へ續けてゐた。「あの女がやつて來たら元氣よく説いてやらう。悪口を始めたとする。おれは平氣で、アイチンゲルの轉る聲の様だと言つてやらう。怖い顔をしたとする。まるで朝露を帶んだ薔薇の花の様に靜かに美しくいと言つてやらう。黙り込んで何も言はないとする。何といふ氣持の佳い辨舌だと褒めてやらう。直ぐに出て行けと言つたらば一週間も泊れとすゝめた様に丁寧な禮を言つてやらう。」その時威張つたカサリンが這入つて來た。

ペトルキオは先に口を切つた。

「今日は、ケートさん。と言ふのがあなたの名だと聞いたよ。」カサリンは此んな露骨な挨拶を好かなかつたので横柄に言つた。

「私を呼びかける程のものはカサリン様ミ呼びます。」

「嘘をお言ひなさい。だれでもあなたの事を淡白なケートだの、快活なケートだの、さうかするごぢや〜馬ケートだの言ひますよ。然しケートさん、あなたは基督教國第一等の美しいケートです。だからケートさん、私は到る處の都市であなたの温順な事を褒めるのを聞いて、妻にもらほうと思つてやつて来たのです。」

兩人の求婚振は全く奇妙なものであつた。娘は、ぢや〜馬と言ふあだ名を得たのも尤もだと思はれる程大聲に悪口を言つたが、ペトルキオはそれを美しくい愛想の良い言葉だと褒めた。遂に父親が這入つて來るのを聞いて、(結婚を出来る限り早くしようと思んで)言つた。

「カサリンさん、餘計なお喋舌しゃべりはよしませう。あなたを妻にする事はもう既にお父さんの承諾を得てゐるんです。嫁入資産の事までも約束済です。であなたが好かうと好くまいと、僕はあなたを娶るんです。」

そしてバプチスタが這入つて來た時、ペトルキオは父に娘が非常に親切に受容れて呉れ、次の日曜には結婚すると約束までしたと言つた。カサリンは此の事を否定して、日曜日には寧ろ此の男が絞殺されておるのを見る言ひ、父に對して此のペトルキオの様な半狂ひの悪黨と結婚させ様にしておるのは以ての外だと言ひ、ペトルキオは父に娘の怒罵にはかまわないで置く様にご希望した二人は父の前では彼女が嫌がつてゐる様な風をする事に決めたので、二人きりでゐる時には非常に優しくて可愛いんですと言ひ、

「美しいケートさん、お手を頂戴。私はこれからベニスへ行つて私達の結婚式の立派な衣服を買つて來ます。お父さん御馳走の用意をして、お客様を呼んで置いて下さい。私はきつと指輪や、晴着や、高價な着物等を買つて來て私のカサリンを立派に着飾させます、さあケート、キッスをしておくれ、日曜には二人が結婚するのだから。」

日曜日に婚禮のお客は皆集まつた。然し、ペトルキオは待つても〜歸つて來なかつた。カサリンはペトルキオが唯の戯談であんな事を言つたのではないかと心配して泣いてゐた。然しとう〜やつて來たが、カサリンに約束して置いた晴着も持つてゐなければ、自分も花婚の様な風もせず、奇妙な不作法な服を着て、大切な儀式を茶化してしまふ爲に來た様であつた。その上つれてゐる從

者も乗つて来た馬さへも、賤しく風變りな様子をしてゐた。

ペトルキオはいくら説き附けても着物を變へようとはせず、カサリンは自分と結婚するので自分の着物を結婚するのではないと言ひ張つた。いくら議論しても駄目だと言ふ事が判つたので仕方なしに皆は教會へ行つた。所が教會へ行つてからも彼は狂ひじみた行ひをやめず、牧師がペトルキオにカサリンを妻にするか尋ねた時に、途方もない大きな聲で「致します」と誓つたので、皆の者は驚いたし、牧師は手に持つてゐた本を落してしまつた。そして牧師がそれを拾はうと思つて屈んだ時、此の狂じみた花婚は平手であつた。いたものだから堪らない、牧師は倒されて又本を落してしまつた。結婚式の最中に彼は足踏みをしたり誓つたりし續けてゐたので、流石のカサリンも怖れの爲に震へてゐた。式が終つて後、まだ一同が教會から出ない前に、酒を持つて來させて大きな聲で一同の健康の爲に祝杯を舉げ、杯の底に溜つてゐた汁を残らず坊さんの顔にかけた。別に理由はないが、唯その坊さんの髭が如何にも薄くて、飢るさうで、彼が酒を呑んでゐるのを羨ましさうにしてゐたからだと言ふのである。決して今迄にこんな狂的な結婚はなかつたらう。然しペトルキオは此のぢやく馬妻君を温和しくさせる爲に立てた計畫を成功させる爲に、猶々亂暴を續けた。

バプチスタは立派な婚禮祝の御馳走を用意して置いた。が、ペトルキオは教會から歸つて來ると

カサリンをつれて、今直ぐに自分の家へつれて歸ると言ひ出した。父親が何ぞ諫めても、カサリンが躍起になつて怒つても、夫の意志を變へる譯には行かなかつた。そして夫の權利として妻は自分の好きな様に出来るのだと主張し、カサリンをつれて急いで去つて行つた。ペトルキオは非常に大膽に且つ手強く見えたので、誰も止めようとはしなかつた。

ペトルキオは自分の妻を、わざ／＼此の目的のために撰んで來た、瘡せたヒヨロ／＼の馬に乗せ自分や従者も同じ様な馬に乗つた。三人は険しい泥路を旅行して、カサリンの馬が躓く度毎にひどく打つて罵り立てた。その馬がまた、人間にしたならどんなに怒りつほい奴になつたか判らない様な馬で、人が乗ると何うしても進まないのであつた。

遂に苦しい旅行を終つて——その旅行中カサリンはペトルキオが馬と従者と共に荒々しく怒鳴り立てる聲の外何一つ聞かなかつた——夫の家に着いた。ペトルキオは親切に妻を家に迎へたが、其の晩は妻に休息も食事をも取らせないで置かうと決心した。食事の用意が出来ていざ食事といふ時になつたが、ペトルキオは持つて來る皿毎に一々わざと難癖をつけて、肉を床に放り投げ、召使達にそれを捨てさせてしまつた。そして言ふのに、自分がこんな事するのはカサリンに甘く料理した肉を食はせたいといふ、妻に對する愛からであると言つた。そしてカサリンが疲れた上に食事もせ

ず寢ようとした時、ペトルキオは又寢床にも同じ様に難くせを見付けて、枕や敷布を室中に投げつけた。その爲めカサリンは椅子に腰かけて寢なければならなかつた。そして少しでもうつら／＼眠りかけようとする、すぐに夫が召使達に、花嫁の寢床を良くして置かなかつた事を怒鳴る聲に眼を醒された。

次の日もペトルキオは同じ事を繰返した。同じ様に親切に言ひながらも、妻が食事を食べようとする、妻の前に置いてある皿を片端から難くせつけて、夕食の時と同様に朝飯をも床へ投げつけてしまつた。そこでカサリンは、流石の高慢なカサリンも、召使にこつそり／＼食事を一口でもいゝから持つて来て呉れよと頼んだ。然し召使達はペトルキオから言ひ聞かされてゐたので、主人に知らせずには何一つあける事は出来ないで答へた。カサリンは言つた。

「嗚呼！私を飢死にさす爲にあの人は結婚したのだらうか。わたしの父の家の前へ来る乞食でさへすぐと何か貰ふのだ。それなのに、わたしは今迄に一度も物を願つたりした事さへ知らないのに何も食べないから、飢死にさうだし、ちつとも眠らないから目が舞ひさうだ。夜は怒鳴られ通しで起され通しだし、三度の食事の代りに、家中の者をがみ／＼と叱り通し、一番いやなのは私が少しでも眠つたり食べたりすれば、私が直ぐにでも死ぬかのようにして、少しでも寢たり食べたりさせな

い事が私を愛するが爲であるかの様に恩をきせられる事だ。」こんなに獨語を言つてゐた時、ペトルキオが這入つて来た。夫は全く妻を飢死させ様等とは思つて居らなかつたので、少しばかりの肉片を持つて来て妻に言つた。

「おい美しいケートちゃん。何うしたんだい、それ御覽私は何と戀に熱心だらう。此通りお前に自分で肉を料理して持つて来たんだよ。此の位親切にすれば禮を言つてくれても佳いだらう。おや返辭しないね、それぢやお前は肉が嫌ひなんだね。そして私が骨折つたのもすつかり無駄だつたんだね。」

夫はそこで召使に皿を持つて行けと命じた。無暗に腹が減つた爲カサリンの高慢も段々減つて遂に、心の中では非常に怒つてゐたけれ共次の様に言つた。

「さうぞ、そのまゝにしめて下さい。」

然しペトルキオはカサリンに今少し言はせたい事があつたので答へた。

「ごんな粗末な御馳走でも禮を言つて食ふのが定りだ、僕の料理だつて食ふ前には禮が言つて貰ひ度いね。」

そこで嫌々ながらカサリンは「ありがたうございます。」と言つた。少しばかりの食事を食べさせ

て置いてペトルキオは

「ケートちゃん、ずんく澤山食べた方が佳いだらう。——ねね、ケートちゃん、これからお父さんの所へ、権門豪族よろしくいふすばらしい行装（ぎやうさう)をしてやつて行つて、底抜け騒ぎをやらさう。絹（うわす)の上衣（うわす)だの帽子だの、金の指輪だの、襷襟（たすき)だの肩巾（かたかき)だの、何のかのと華美なものを飾り立て、ね。」

そして此の様な立派なものを皆妻に本當に買つてやらうと思つてゐると、信ぜしめるために、仕立屋（しだてや)と小間物屋とを呼び入れ、前に注文して置いた新しい着物を見ると、まだカサリンのお腹が碌々ふくれてもゐないのに、召使に命じて皿を下けさせてしまつて、もう食つてしまつたのかい。」と言つた。

小間物屋は帽子を見せて、「これが旦那様の御注文になりました帽子で御座います。」といふと、又ペトルキオは荒々しくなり、これは井か何かを型にして作つたので、帆立具（かほだぐみ)か胡桃位（くるみ)の大きさがかない、こんなものは持つていつてしまつて、もつと大きなものを持つて来い（きこ)と怒鳴つた。カサリンはこらへかねて言つた。

「私そんなのが欲しいわ、上品な夫人達はみんなさういふのを冠りますもの。」ペトルキオは答

へた。

「上品な奥さんになつてからお冠り、今はまだいけない。」

カサリンは肉を食べたので沈んでゐた元氣をや、回復して言ひ出した。「もし、あなた、一言いふのを許していただきませう。是非はせていただきませう。わたくしは子供ぢやありません、赤ん坊ぢやありません。あなたより自分の上の人でも、わたくしには思ふ存分の事を言はせて呉れました。若し聴くに堪へないと思ひですなら、耳をふさいでいらつしやい。」

ペトルキオは此の怒つた言葉をさへ聞かうとせず、やかましい議論を續けてゐるよりもつと都合の佳い、妻を禦する方法を見付けたので、答へた。

「成程。こりやお前の言ふ通りだ。全く取るに足らん帽子だよ。これを好かないと言ふに至つて願る僕の妻たるに適するね。」

「あなたが私を愛しようが愛しよまいが、私はその帽子が好きです。この帽子を着ますがその他のはありません。」

「上被（うわぎ)が欲しいと言つてたぢやないか。」

とペトルキオは尙話を聞き違へてゐる様な風を装ひながら言つた。仕立屋が前へ進み出て注文の

立派な上被を見せた。元よりペトルオキには妻に帽子も衣服も買つてやらうと言ふ様な意志は毛頭ないのだから、今度も前と同じ様に瑕を探し出して、

「おや一體どうだ！これは！何だこれは、袖の心算かい、林檎饅頭よろしく言ふ風に縦横に切りきざんだ十六世紀式大砲の筒口の様だ。」

「今の流行向きに具合よく仕立てろといふお吩咐で御座いましたんで。」

と仕立屋は言ふに、カサリンは横からそんな立派な流行向の上被は見つた事がないと言つた。ペトルオキはこれ位で充分だと思つたので、私に商人達に仕拂ひ自分が彼等にした表面上は随分亂暴な取扱ひの憤ひをする言ひ含めて、仕立屋も小間物屋をも、激しい言葉と狂はしい身振りをして室から追ひ出してしまつた。そしてカサリンの方に向いて、

「さ、さ、ケートさん、お父さんの所へ、今着ているこの粗末な服のまゝで行かう。」と言ひ、馬を命じ、まだ七時頃だから、充分晝食迄にはバプチスタの家に着けるだらうと保證した。所がこれを言ひ出したのは朝所かお晝なのであつた。で、カサリンは勇を鼓して、然し夫の激烈な様子に壓倒されてしよかに言つた。「あなた、もう大丈夫二時頃です。あそこへ行く迄に夕食時になりませう。」然しペトルオキは、自分の妻を父の所へつれて行く迄に、自分の言ふ事ならば何でも用意す

る程、絶対に服従させようと願つてゐた。それで、太陽をさへ従はせ、時間にも命令する事が出来るかの様に、自分が出發する迄に自分が望むまゝの時間にならなげりや承知しないと云つて、

「さかくお前は僕の言ふ事、する事、しようと思ふことに反對ばかりする。おれはもう今日は往かない。往く時には、おれがさうだといふ時間でなげりや承知しない。」

或日カサリンは新らしく知つた従順の練習をさせられた。此の世の中に反駁と言ふ言葉があつた事等を忘れてしまふまで完全に妻の高慢を従順にさせるまでは、ペトルオキはカサリンを里歸に連れて行かなかつた。然もやつと出發したその途上で、又引歸さねばならぬ様な事になつてしまつたと言ふのは唯ペトルオキが口中に月が輝いてゐる言ひ確言したのを、妻が太陽だと言ひ注意した事から起つたのである。

「いや、俺のお母さんは息子に誓つて、(それは俺だが)あれは月だ。さうか星だ。さうでない迄も、お父さんの家へ行き着くまでは、是非ともおれがさうだと言ふ物でなくちやならん。」

さう言つて引き返しさうにしたのであつたが、カサリンは、もうぢやく馬のカサリンではなく従順な妻になつてゐるので、

「折角こゝまで來たんですから、さ、参りませよう。月でも、太陽でも、何でもようござんす。蘭の

蠟燭だと言いたければそれでもようござんす。わたくしも誓つてこれからさういひませう。」と言つた。ペトルキオはこれをもつと確かめようと決心して言つた。

「あれはたしかに月だよ。」

「いかにも月です。」とカサリンは答へる。

「なにお前は嘘を吐くんだ。有難い太陽だよ。」

「では、成程、有難い太陽なんです。けれども若しあなたがさうぢやないとおつしやれば、太陽ぢやないのです。あなたが呼びなさらうと思し召す通りに變るんです。さうして其通りになればカサリンもその通りに呼びます。」

そこで旅行を續ける事にしたが、この従順な氣質が永續するか何うかを試すために、ペトルキオは途で出會つた老人にまるで若い婦人であるかの様に話し掛けた。「や、今日は、お嬢さん。」と言ひ、カサリンに此んな美しい娘さんを見た事があるか尋ね、老人の頬の色の赤や白を褒め、眼は天上に輝く二つの星の様だなき言ひながら又も老人に言つた。「美しいお嬢さん、もう一度改めて御挨拶いたします。」と言ひ、カサリンに向つて、「美しいケート、あんまり可愛らしい方だから抱いておあげ。」と言つた。今はもう全く従順になつたカサリンは、すぐ様夫の意見に従つて、

同じ様に老人に言ひ掛けた。

「若い蕾の小娘さん。何さいふ美しい、麗かな、御上品なのでせう。さちらへ御出ですか、お宅は何處です。こんな美しくいお子をお持ちの御両親はさぞお幸福でせう。」

「おや、どうしたのだ、ケート。氣が狂つたのぢやないか。こりや男だよ、皺くちやの、やせつこけたお爺さんだよ。お前が言ふ様な娘なんかぢやないよ。」

「お年寄さん、御免なさい。太陽の光線で目が眩んでるたもんですから、何もかも皆草色に見えたりして、見違へたのです。やつこ今お年寄さんだこいふ事が判りました。御免なさいまし、みんなない見ちがひをいたしました。」

「免してやつて下さい、御老人。時にさちらへ御旅行です。同じ方角へ御出でなら是非御伴したものです。」

「旦那、並びに面白い奥さん。實はあんまり思ひがけない御挨拶を承はつたので、非常に驚いたわけで御座いましたが、手前はピンセンシオ申すもので、只今バデュアに居ります俸の所へ參る所です。」と老紳士が答へるに、ペトルキオはこの老人がバプチスタの妹娘ビアンカと結婚しようとしてゐるルーセンシオの父である事を知つたので、老人に息子が非常な金持と結婚しようとして

るる事を告げて喜ばせた。そして皆は愉快な旅行を續けて終にバプチスタの家に着いた。所が家では今ビヤンカとルーセンシオとの結婚の式を舉げる爲めに多くの人々が集つてゐた。バプチスタは約束通りカサリンが居なくなつたのでビヤンカとの結婚を許す事にしたのであつた。

一行が家に這入るこバプチスタは喜んで結婚の饗應に二人を迎へた。其の場には他に一組の新婚の夫婦も列席してゐた。

ビヤンカの夫、ルーセンシオと、新婚のホーランシオはベトルキオの妻のお轉婆な性質を揶揄ふ様な皮肉を言はずには居れなかつた。そして又此の花婚等は自分が撰んだ妻の温順な性質を誇りベトルキオの不幸な嫁撰びを嘲笑した。ベトルキオは食事が終つて婦人達が退いて行くまで、二人の皮肉等には耳も藉さなかつたが、バプチスタまでが一緒になつて彼を嘲笑するので、ベトルキオが自分の妻は誰のよりも従順だこ斷言した。するこカサリンの父は

「いや、戯談でなく、眞面目に言ふが、婚殿ベトルキオ、お前さんはお氣の毒だ。無類の我儘者を妻にして。」

「いゝね、決して、そんな事はない。ですからその證明のために、めいゝが改めて新婚を呼び寄せる事にしませう。さうして、迎ひにやるや否や、眞先にやつて来るのを最も従順な妻こ見做し

て、今こゝで、我々が賭けたものを取るといふ事にしたら何うです。」

こベトルキオは言つた。他の二人の夫達も喜んでこれに賛成し、自分達の優しい妻があゝの意地張りのカサリンより従順であると言ふ深い自信を持つてゐたので、二十クラウンの賭をするこ言ひ出した。ベトルキオは嬉しさうに、それッばかりなら鷹や犬にだつて賭ける。妻になら其二十倍を賭けようこ言つた。ルーセンシオとホーテンシオは百クラウンを賭け、先づルーセンシオが召使にビヤンカを呼びにやつた。然し召使は歸つて來て告げた。

「奥さんがおつしやいますには、今は忙しいから行かれませぬ。」

「え、忙しいから往かれなかつて。それが妻としての返事かい。」

こベトルキオは言ふこ、皆は笑つてカサリンがそれ以上良い返事をよこせば佳いがこ言つた。次にホーテンシオが妻を呼びにやる番であるので召使に、

「わたしの妻に、すぐこゝへ來るやうに頼んで下さい。」こ命じるとベトルキオは

「お、ほ！歎願なさいよ。さうすりやきつとやつて來なくちやならまい。」

こ言へばホーテンシオも負けずに言つた。

「こころが、君のこ來ちや、いくら君が歎願したつて、やつて來やしないだらう。」

併し間もなく召使が妻をつれずに歸つて來た時は、此の禮儀正しい夫も少し顔色を蒼くして言つた。

「おや、妻は何處におるの。」

「奥さんがおつしやいますには、何かふざけてからかはうこいふんでせう。こちらからは行きませんから、そちらからやつていらつしやい、とおつしやいました。」

召使が言ふこ

「ますくゝ悪いや！」

ミペルキオは笑つて、召使に吩咐けた。

「おいくゝ、奥さんの所へ往つて、おれが此處へ來いご命じたこいつて來い。」

皆はカサリンが此の命令に應じないだらうと考へてゐる間もなく、驚いた事には、バプチスタが呼んだ。

「おやくゝ、大變な事になつた。カサリンが來たよ。」

カサリンは這入つて來て、

「何の御用です、お呼びになりましたのは、」

と優しくペトルキオに尋ねた。

「お前の妹は何をしてゐる。そしてホーテンシオの奥さんは何處にゐる。」

「奥の座敷の爐の側で、話をしてゐなさいます。」

「二人共つれてこい。」

とペトルキオが言ふと、カサリンは一言も答へずに夫の命令通りに出て行つた。

「これアどうも不思議だ。こんな不思議な事はない。」

ミルーセンチオは言ひ、

「全くだ。何の前兆だらう。」

とホーテンシオも驚いた。

「何の事はない！平和の前兆さ、愛の前兆さ、家庭圓滿の前兆さ。そして正しい主權の前兆さ。要するに、うつくしくて楽しい、ありまあらゆるものゝ前兆さ。」

ミペトルキオは答へた。カサリンの父は自分の娘の性質がこんなになつた事を知つて、

「さ、仕合せが向いて來た！ペトルキオさん、賭はお前さんの勝ちだ。わたしからも二萬クラウンを娘の他の持參金としてあげよう。まるで別人のやうに娘がよくなつたから。」

「いや、賭にもつゝ勝てるのだが、兎に角あれが何んなに柔順になり、どんなに真淑な婦人ご生れ變つたかを御覽に入れませう。」

ミペトルキオが言つておるこそこへカサリンが二人の婦人をつれて這入つて來た。

「あ、あそこへ諸君の我儘な妻君たちを、うまく説得して、捕虜にしてつれて來ましたよ。カサリン、お前の其帽子は似合はないよ、そんな玩具のやうなものは抛り出して、踏みにじつておしまひ。」

ミ言ふミカサリンは、直ぐに命令通りそれを取つて抛り出した。ホーテンシオの妻は、

「ほんといふ、こんな馬鹿らしい事つたら、ありやしないわね！」

ミ言へば、ビヤンカも口を揃へて、

「ごうしたミ言ふんです。こんな事を！、馬鹿らしい。」

これを聞いて、ビヤンカの夫は妻に、

「もつと馬鹿らしくしてゐて呉れるとよかつたのだ。ビヤンカさん、あんたがそんなに恰愼がるもんだから、晝餐から今までの間に、賭をして百クラウンも損しちまつた。」

「ま、わたしを引合に賭なんかなさるなんて、何ごいふ馬鹿らしい人だらう、あなたは。」

「カサリン、わたしが命令するが、この剛情張りの婦人連に、女ごいふ者は、夫たり主人たる人

に對して、どういふ義務を負つてゐるものであるかを話しておやり。」

ミペトルキオは言つたので、優しうなつたぢやく馬婦人は、滔々こ、自分が不言不語の内にベトルオキの意志に服従する様になつた經驗から、妻ごしての服従の義務を説いて、一座の者を驚かした。そしてカサリンは再びバデユアの町で有名になつた。今度はぢやく馬のカサリンはなくして、バデユアの最も従順な良妻ごしてであつた。

間違の喜劇

シラキユース國ミエフエシユース國とは仲違ひをしてゐたので、エフエシユース國では、若しシラキユース國の商人が自國內にゐる所を見付ければ誰でも千マルクの身代金を支拂はなければ、殺してしまへミ言ふ、残酷な法律を定めてゐた。

イージョンミ言ふ、シラキユースの老商人が、エフエシユースの町にゐる所を見つけられて、公爵の前に引かれて行き、重い料金を支拂ふか、さもなければ死刑の宣告を受けるかごいふ事になつた。イージョンには料金を支拂ふだけの金が無かつた。が公爵は老人に死刑の宣告を下す前に、老人から身の上話を聞き、シラキユースの商人が來れば誰でも殺されると決つてゐるエフエシユースの

町へ来る言ふ様な冒険を冒したのは、何う言ふ理由があるかを話す様にと望んだ。

イージョンは、悲歎の餘り生きてゐるのが厭はしくなつた故、死ぬ事は少しも怖れないが、自分の不幸な生涯の出来事を物語らねばならぬと言ふ程辛い仕事は、今までに受けた事がないと言ひ、さて次の様に自分の身の上話を始めた。

「私はシラキユースの生れで、商賣人になる様に育て上げられました。私は一人の婦人と結婚しまして、幸福に暮してゐました。所が私が何うしてもエビダムナムへ行かねばならぬ事となり、仕事の都合で六ヶ月ばかり逗留してゐましたが、未だしばらく留まらねばならぬので妻を呼び寄せました。妻は到着したかと思ふミ床に就いて二人の男の子を生みました。所が不思議な事には、此二人が全く良く似てゐるので、何方と言つて區別を付ける事が出来ませんでした。私の妻がこの二人の子を産んだ時、やはり妻と同じ宿屋に泊つてゐました貧乏な婦人が二人の子を生んだのです。所がこの二人が又私の子供等と同じ様に良く似てゐたのです。この子供達の両親は大層貧しかつたので、私はこの二人の男の子を買ひ取つて、私の子供達の召使ひにしようと思つて育てました。」

「私の息子達は非常に立派な子供でしたので、妻もこんな息子を二人まで持つた事を少なからず誇りこしてゐました。妻は毎日の様に家に歸り度いと言ひますので、私も不承不承に承諾しまして

悪い時に船に乗つてしまひました。我々がエビダムナムから一海里と行かない内に大變な嵐が起つたのです。嵐は益々猛り狂ひましたので、船員等は船を救ふ見込が立たないものですから、自分達の命を救ふために鈴なりになつてボートに乗つて逃げました。我々だけは船に残され、今にも狂暴な嵐に打滅されてしまふかと心配してゐました。」

「私の妻は泣き續けます、それに可愛い、子供までが、何が怖いかも知らずに、母が泣くのを見て眞似をして哀れな聲で泣叫びますので、私自身は死ぬのを怖れては居ませんでした。妻や子供達の爲に私の胸は恐怖で満されました。私は妻子の安全ばかりを一生懸命に工夫しました。私は先づ、海員達が嵐を避ける時にする様に、弟の方を小さな細い橋ボートの端に縛り付け、他の端には二子の召使の弟の方を縛り付けました。妻にも他の子供達を他の橋に縛る様に差圖しました。妻は兄二人の世話を終り、私も弟達の世話がすましたので、私達は離れ離れに子供達と同じ橋に自分を縛りました。此の工夫をしなかつたなら私達は皆死んでしまつたでせう。船は大きな岩の上に打上けられて粉微塵に碎かれてしまひましたから。處が私達はその細い橋によぢ上りましたのでやつミ水の上にある事が出来ました。私は一人の子供の面倒を見なければならず、妻を助ける事が出来ませんでしたので、妻は間もなく他の二人の子供と一緒に私と離れ離れになつてしまひました。然しま

だ妻達が私の見える所にゐました時、コリンスから来た（さうだらうと思つたのです）漁夫の船に助けられました。妻や子供が助けられたのを見ましたので、私はもう他の心配はなくなり、唯可愛い、子供を召使を守るために、荒波を戦ひ続けました。遂に私達にも運が向いて、或る船に助け上げられ、その船員達が私を知つてゐましたので、親切に迎へ色々助力して、安全にシラキュースへ上陸させて呉れました。併しその時以來私には妻と長男が何うなつたか少しも判らなくなつたのです。」

「今は唯一人の頼みとする二男も、十八歳になりましたが、母や兄の事を色々と穿鑿し始め、しばらく私に同じ様に兄を失つた弟の召使をつれて、母や兄を探しにやつて呉れようさくせがみしましたので、とうとう不承不承に許しました。私の妻や長男の消息を知りたいのは山々でありましたが、探しに行つた弟までが又判らなくなつてしまふ事を怖れてゐたのです。その弟が出て行つてからもう七年になります。私も亦足掛け五年の間世界中を二男を探すために歩き廻つてゐました。遠くギリシャまで行き、アジアの國境を越えて海岸づたひに歸つて参りましたのですが、一ヶ所でも探さずに置く氣になれませんので、此のエフェシユースへ上陸した譯で御座います。然し私の身の上話も今日でお終いですが、死にがけにでも息子達が生きてゐる言ふ事さへ判つたなら何んなに幸福だらうと思ひます。」

不幸なイージョンの悲惨な話は終つた。公爵は、自分の失くした息子を愛するばかりに、此の災難を親ら招いた不幸な老人を憐み、若し自分の誓ひや成儀でも何うとも變更する事の出来ない法律にさへ觸れてゐなかつたのなら、直ぐにも許してやるのと言ひ、尙法律の嚴格な條文通りに、直ぐに死刑を言ひ渡す代りに、一日の餘裕を與へるから、金を貰ふなり借るなりして、科料を支拂ふやうにせよと言つた。

此の一日の猶豫もイージョンにとつては大して有難い事では無かつた。エフェシユースには誰一人知つた人とても無いから。全く知らない人が千マルクの大金を貸したり又は呉れると言ふ様な事は殆んど無いと思切つてゐた。助かる方法も望もなく、老人は公爵の前から退つて看手に監禁される事となつた。

イージョンはエフェシユースには誰も知つた人はゐないと思つてゐたが、命を失ふ言ふ最後の時になつて結細に調べると、探ねてゐた二男ばかりでなく、長男も共にエフェシユースの町にゐる事が判つた。

イージョンの息子達は顔や形が瓜二つであつたばかりでなく、二人共同名でアンテイクオラス

と呼んでゐた。二子の召使達も同じくドロミオと呼んでゐた。イージオンが探しにやつて来た弟のシラキユースのアンティフォラスは、召使のドロミオをつれて、父と同じ日にエフエシユースに到着した。この若者も亦同様にシラキユースの商人であつたので、父と同じ様な危険に陥らねばならなかつたのであるが、幸な事には途中で知人に出會つて、シラキユースの老商人が危険に陥つた事を聞き、エビダムナムの商人に偽る様にと奨められた。アンティフォラスはこれに賛成し、自分の國の人がそんな危険にある事を氣の毒に思つたが、その老商人が自分の父だとは夢にも思つてゐなかつた。

イージオンの長男（弟のシラキユースのアンティフォラスと區別する爲めにエフエシユースのアンティフォラスと呼ばなければならぬ）は二十年間もエフエシユースに住み、金持になつてゐたので、父の命を救ふ身代金を易々と拂ふ事が出来たのであるが、彼は父の事は何も知らなかつた。その譯は海中から漁夫に母と共に助けられた時にはほんの無心の嬰兒であつたので、さうして助けられたと言ふ事の外は、父の事も母の事も少しも記憶してゐなかつた。此のアンティフォラスと母を召使のドロミオを助けた漁夫は、子供達二人を奴隷に賣るために母の側からつれ去つた。（不幸な婦人は非常に歎いた。）

アンティフォラスとドロミオは漁夫達から、エフエシユースの公爵の伯父に當るメナフォン公爵と言ふ有名な武士に賣られ、メナフォンは自分の甥を訪問する時、この子供達をつれて行つた。

エフエシユースの公爵はこのアンティフォラスを寵愛して、成長するに従つて軍隊の士官に採用した。所が戦争の時非常な勇敢な働きに依つて武功を立て、自分の保護者である公爵の命を救つたので、その褒美としてアドリアナと言ふ、エフエシユースの金持の婦人と結婚する事となり、父がその國へ来た時には妻と共に（奴隷のドロミオはやはり仕へてゐた）暮してゐた。

シラキユースのアンティフォラスは、エビダムナムから来たと言つて置く様に忠告して呉れた友達に別れると、奴隷のドロミオに晝食をしようと思ふ宿屋へ幾らかの金を持たせてやり、しばらくの間町を散歩して、人々の風俗を見ようと思つた。

ドロミオは愉快な男で、アンティフォラスが氣をふさいで幽鬱な顔をする時には、滑稽な戯談や愉快な洒落を言つて氣を晴らさせるのが常であつた。だからドロミオは、普通の主人と召使との間よりもずつと、親しい言葉を使ふ事を許されてゐた。

シラキユースのアンティフォラスが、ドロミオを宿屋へ遣はした時、しばらく立留つて、母や兄を探ね廻り、上陸した所では何處でも何の消息をも聞く事のできなかつた淋しい放浪の旅を想ひ廻

らしながら悲しげに獨語した。

「自分は大海の中で、兄弟の一滴を探し求めながら、自ら廣い海の中に消えてしまふ一滴の様なものだ。不幸にも、母や兄を探す爲めに、自ら迷つてしまつた。」

此んな風に、今迄の無益だつた旅行の辛苦を回想してゐた時に、ドロミオ（だこ思つたのである）が歸つて來た。アンティフォラスは餘り早く歸つて來たので不審に思つて、金を何處に置いて來たのかと尋ねた。所がこの召使は自分のドロミオではなくて、エフエシユースのアンティフォラスに仕へてゐた双兒の兄であつたのだ。二人のドロミオも二人のアンティフォラスも、イージオンが子供の時分に似てゐたと言つたと同じ様に、大きくなつてからも似てゐた。だからアンティフォラスが自分の召使が歸つて來たのだと思つて、何故そんなに早く歸つたのかと尋ねたのも別に不思議はない。ドロミオは答へた。

「奥様があなた様に食事を叫らせて來いとおつしやりました。早くお歸りになりませんが、雞が焦けますし、豚が銀串（かたし）から落ちてしまひ、肉は冷たくなつてしまひますとおつしやりました。」

「もうそんな洒落は流行らないよ。一體お前は何處へ金を置いて來たんだい。」

ドロミオは尙も奥様がアンティフォラスを食事に呼んで來いと命じられましたと繰返し言つた。

「奥様々々とは一體誰だい。」

「え、あなた様の奥様で御座います。」

アンティフォラスには妻が無かつたので、ドロミオを叱りつけて言つた。

「時々親しくお喋りをするものだから、調子に乗つて此んな無禮な戯談を言ひ出すとは怪しからぬ奴じや、わしは今そんな戯談なんぞ言つてをる氣になれないんだ。金を何處へ置いて來たんだい、我々は此の國を少しも知らないのに、そんな大金をよく信用してお前自身の監督から他人に預けて來たものだ。」

ドロミオは、主人が此の國を少しも知らない等と言ひ出したのを聞いて、アンティフォラスが戯談を言つてるのだと想像して陽氣に答へた。

「どうぞお願ひです。御戯談はお食事の時にしていただきませう。私にはあなたをおつれ申して奥様やお妹様と御一緒にお食事をなさるより他に義務は御座いません。」

アンティフォテスは辛抱がしきれなくなつて、ドロミオをなぐりつけたので、飛んで家へ歸り女主人に、主人は食事に歸る事を拒絶し、妻なんぞないと言はれたと告げた。

エフエシユースのアンティフォラスの妻であるアドリアナは、嫉妬深い性質だつたので、自分の

夫が妻なんぞ無いと言つたと言ふ事を聞き、夫が自分よりも外の女を愛してゐるのだと思ひ込んで非常に怒り、夫に對して嫉妬と非難の亂暴な言葉を怒鳴り飛ばした。そして一緒に住んでゐたルシアナが、此の根も葉もない疑ひを説き明かせようとしたけれ共、皆無駄であつた。

シラキユースのアンティフォラスは宿屋へ行くに、そこにドロミオが金を安全に持つてゐるのを見た。そこで自分のドロミオにさつきの無禮な戯談の小言を言はうとした時、アドリアナがやつて来て、自分の夫であるに信じ切つてゐたので、妙な顔をして自分を見るのを（それもその筈、斯んな婦人を一度も見た事さへなかつたのだから）責めた。そして、結婚した時はあんなに自分を愛して置きながら、今になつて外の女を愛するのと言つた。

「あなた、一體何うしたのです。まあ、さうして妾があなたの愛を失ふ様な事になつたのですか。」
「美しい御婦人、あなたは私に歎願されるのですか。」

ミアンティフォラスが愕いて言つた。アンティフォラスが、自分は夫でもなければ、エフエシユースへ来てから未だ二時間にしかならないといくら説いても聞かなかつた。婦人はあくまでも自分と一緒に家に歸れと言ひ張つたので、アンティフォラスは何うしても言ひ脱れる事が出来ないうで、婦人と一緒に兄の家へ行き、アドリアナとその妹から、夫と呼ばれ兄と呼ばれながら、一緒に食

卓に就いた。そして餘りの驚きから、夢のうちにこの婦人と結婚したのでは無いか、それとも今夢を見てゐるのではないかと思つた。一緒について来たドロミオも同じ様に驚いた。料理婦である兄の妻が彼を自分の夫だと言ひ出したからである。

シラキユースのアンティフォラスが、兄の妻達と食事をしてゐた時兄である本當の夫が奴隸のドロミオをつれて食事に歸つて来た。然し召使達は女主人が誰をも通してはいけなさと命じて置いたので戸を開けようと思はず、外で二人がつづけ様に戸をたいて、アンティフォラスとドロミオだと言つた時、下女は嘲笑して、アンティフォラスは今奥様と食事をしてゐるし、ドロミオは臺所にあると言つた。二人は戸も破れんばかりに叩いたけれ遂に中に入る事が出来なかつたので、アンティフォラスは非常に怒つて家を去つた。そして男が妻と共に家で食事をしてゐるのを聞いて不審でたまらなかつた。

シラキユースのアンティフォラスは、婦人が尙も自分の夫だと言ひ張るので非常に困惑し、又ドロミオも同じ様に料理婦から夫だと言はれてゐるのを聞いて、出来るだけ早く何かの口實を作つて家を脱出さうと思つた。アンティフォラスは妹のルシアナのみは非常に氣に入つたが、嫉妬深いアドリアナの性質を心から嫌つてゐたし、ドロミオも亦臺所の美しい妻君には全然満足してゐな

つたので、主人も召使も出来るだけ早く新らしい妻君から脱れたいと望んだ。

シラキユースのアンティフォラスが家を出た時、一人の金細工屋に出會つたが、その男も又アドリアナと同じ様に、エフェシユースのアンティフォラスと間違へて、その名で呼びながら、金の鎖を與へた。アンティフォラスがそれは自分のぢやないと言つて鎖を返さうとするに、金細工屋はあなただの命令でこさへたのだと言つて、金鎖をアンティフォラスの手に残したまゝ行つてしまつた。それでアンティフォラスは、まるで自分が魔法にでもかけられてゐる様に、變な事にばかり出會ふので氣味が悪くなり、此んな土地にはもう少しも留まるまいと思つて、召使のドロミオに持物を船へ運ばせた。

人違ひのアンティフォラスに鎖を與へた金細工屋は、直ぐそのあとで借金のために逮捕された。金細工屋がその人に鎖を渡したのだと思つてゐた、結婚した兄のアンティフォラスは、金細工屋を巡査が逮捕してゐるその場を通りかゝつた。金細工屋はアンティフォラスを見るや否や、今さつき渡した金鎖の代價を支拂つて呉れと願つた。その代價は自分が逮捕された借金とほゞ同額だつたらである。處がアンティフォラスは鎖を受け取らなかつたと言ひ、金細工屋は數分間前に確かに渡したと言ひ張つた。二人は長い間、お互に自分が正しいと考へながら、此の事に就て議論した。

アンティフォラスは金細工屋が鎖を渡した事等を少しも知らなかつたからである。二人の兄弟はそんなによく似てゐたので金細工屋は巡査に引かれて、借金の罪で監獄へつれて行かれる時まで、此の人に鎖を渡したのに違ひないと思つてゐたから、役人に言つてアンティフォラスをも代金を拂はない罪で逮捕する様にと願つた。それで結局アンティフォラスも商人も共に監獄へ連れて行かれた。アンティフォラスが監獄へ行く途中に、シラキユースの弟の奴隸ドロミオに出會つて、彼を自分の奴隸と間違へて、召使に、自分の妻のアドリアナの所へ行つて、自分がそのために逮捕せられた代金をすぐ送る様に言ひ付けた。ドロミオは主人に船の仕度が出来た事を知らせる爲めに來たのであつたが、主人がさつきあれ程急いで脱け出して來た、あの食事をした奇妙な家へ自分を送り返さうとするのに愕いて、一言も返事する事が出来なかつた。アンティフォラスが戯談を言つてゐるのだとも思へなかつたからである。それで、又アドリアナの家に歸らねばならぬ事をぶつ／＼言ひながら、歩いて行つた。

「ドウザベルが俺を夫だなんて言ひやがつた所へ行つて？然し行かなけりやならぬ。召使たるものは主人の命令に従はねばならぬから。」

アドリアナはドロミオに金を與へた。そしてそれを持つて行つた歸り路で、シラキユースのアン

ティフォラスに出會つた。所がこの主人も飛んでもない出来事に出會つたので全くびつくりしてゐた。と言ふのは兄はエエフシユースの町では良く知られてゐたので、街で出會ふ人出會ふ人殆んま皆が、古い友達の様に挨拶した。或者は借りてゐた言ふ金を返したり、或者はお遊びにゐらつしやいゝ招待したり、又或者は自分がしたといふ親切に對して禮を言つたりして、皆が彼を見と間違へてゐたのである。一人の仕立屋は持つて來た絹を見せて、洋服にするから言つて寸法を取らせて呉れと言つたりした。

アンティフォラスは、きつゝ魔法使か妖姿の國へ來たのだと思つた。その上ドロミオさへ、自分を監獄へつれて行つた巡查の手から何うして脱れたのかとか、アドリアナが負債を拂ふために送つた金の財布を自分に渡すとか、辻褄の合はぬ事ばかり言ふので、主人の頭は益々混亂するばかりであつた。此のドロミオの逮捕だとか、監獄だとか、アドリアナから持つて來た財布だとか言ふ様な話は、全くアンティフォラスを困惑させた。そして自分の考へが混亂してゐるのに全く驚いて叫んで言つた。

「此のドロミオは可愛想に氣が狂つたのだ。此處は全く幻影の國なんだらうか。何うか神様我々を此の奇妙な國からお救ひ下さい。」

此時他の見知らぬ婦人がやつて來て、又アンティフォラスの名前を呼んで、今日自分と一緒に食事をした事を話し、やると約束して置いた金鎖を呉れよとせがむ。アンティフォラスは到々辛抱がし切れなくなつて、お前は女魔法使だらうと言ひながら、鎖をやるゝ約束した事もなければ、一緒に飯を食つた事もなく、これまで一度だつて顔を見た事さへ無いと告げた。然し婦人はあく迄も男が否定し續けてゐるのにかゝはらず、一緒に食事をなし、鎖をやるゝ約束したと言ひ、その上、自分が高價な指輪をあけたのだから、若し鎖を呉れないのならば、あの指輪を返して呉れと言ひ張つた。これを聞いてアンティフォラスは全く狂暴になつて、又も婦人を女魔術使だとか妖婆だと罵り、女もその指輪の事も知らないと言ふなり、彼の言葉や荒々しい顔色を見て愕く女を残したまゝ、駆け行つた。然し婦人の方では、此の男と一緒に食事をなし、金鎖を贈つてもらふ約束をして指輪を與へた事程、確かな事は無いと思つてゐたからである。此の婦人も亦他の人達と同じ様に間違へて兄だと思つたので、兄の妻君であるアンティフォラスがした事を、すっかり彼に仕向けたのであつた。

妻君のあるアンティフォラスは、自分の家の中へ入る事を拒まれた時、(中の者達はもう中にゐるのだと思つてゐたが)いつもよくやる例の妻の嫉妬の氣まぐれだと信じて、非常に怒つて立去つた。そしていつも妻が自分が他の婦人を訪ねる等々邪推して咎める事を想ひ出して、自分を家から閉め

出した復讐として、此の婦人の所へ行つて一緒に食事をしようと決心した。此婦人が非常に町重に迎へて呉れたのこ、妻があんなに怒つた矢先なので、アンティフォラスは妻にやらうと思つてゐた金鎖を贈るこ約束した。金細工屋が間違へて弟の方に渡したのは此の鎖である。婦人は金鎖を貰へるこ言ふ事が非常に嬉しかつたので、妻のあるアンティフォラスに指輪を與へてしまつた。所が（兄と弟を間違へて）アンティフォラスから否定され、顔も知らないこさへ言はれ、荒々しく駈けて行つたのを見て、きつこ氣が狂つたのだと思つた。そこですぐにアドリアナの所へ行つて夫が狂になつたこ告げようと決心した。此の事をアドリアナに告げてゐる時、アンティフォラスが監守につれられて（借金を拂ふ金を家に取りに歸る事を許されて）歸つて來た。先にアドリアナが持たせてやつた財布は他のアンティフォラスに渡したのだつた。

アドリアナは此婦人が自分の夫が狂になつたと話したのを本當だと信じた。その上彼を家から閉め出した事を夫が責め、又先には食事の最中、自分は夫でないとか、今日迄エフェシユスに來た事はない等こ言つた事を思ひ出して、狂になつたに違いないこ思つた。それで監守に金を拂つて放免されるこ、アドリアナは召使達に命じて夫を繩で縛らせて、暗い室に運ばせ、醫者に來て貰つてその病氣を癒してもらふ様にと呼びにやつた。アンティフォラスはその間弟と餘り良く似て居る事

から起つた此の行違ひを、熱心に説明したが、怒つて言へば言ふ程妻達の眞に狂氣になつたと言ふ考へを確める様になつた。ドロミオも又同じ事を言ひ張るので縛られて、一緒に運ばれて行つた。

アドリアナが夫を監禁するかせないかに、一人の召使が歸つて來て、アンティフォラスとドロミオとが次の通りで自由に歩いてゐるのを見たから、きつこ縛を解いて逃げたに相違ないと言つた。之を聞くこアドリアナは夫を監禁するために、家に連もぎらうと召使共をつれて、走つて行つた。妹も亦一緒に行つた。近所にある修道院の門の所へ來た時、又々双兒の餘り良く似てゐるのにだまされて、アンティフォラスとドロミオがゐるのだと思つた。

シラキユースのアンティフォラスは、未だ餘り良く似てゐる事から起つた間違に惑はされてゐた。アンティフォラスは金細工屋から貰つた金鎖を首に掛けてゐたので、金細工屋は彼がそれを受取らなかつたこか、又金を拂はなかつた事を咎か立て、をり、アンティフォラスは今朝金細工屋が勝手に自分に呉れたので、それ以來一度も彼と會はなかつたこ抗辯してゐた。

其處へアドリアナが來て、監禁から脱出した狂の夫だと云ひ、つれて來た召使共はアンティフォラスとドロミオに掴みかゝらうこしたので、二人は修道院の中へ逃げ込み、尼院長にかくまつて呉れこ願つた。

そこで尼院長は自分で出て来て此の事件を尋問しようとした。此の尼は厳格な尊い婦人で、物事を賢く判する事が出来たので、一度たよつて来た男は容易に見捨てなかつた。それでアドリアナに色々夫の氣が狂つた話を問ひ正してから言つた。

「あなたの夫が急に氣が狂つたと言ふ原因は何ですか。海で彼の富でもなくしたのですか。それとも親しいお友達か誰かが死んだため氣が變になつたのですか。」

アドリアナはそんな事は何も起らなかつたと言つた。

「それでは多分、あなたの夫が、誰か他の女を愛したため、こんな事になつたのでせう。」

アドリアナは随分前からよく家を空けるのは、外に女があるからだらうと思つてゐたと言へた。然しアンティフォラスがよく家を空けるのは、他に女がある譯ではなく、妻が嫉妬を起していちめりからであつた。尼は、(この事をアドリアナの激しい様子から想像した。)この事が判つたので言つた。

「あなたがこの事で御主人を責めれば良かつたのです。」

「ね、責めましたとも。」

「然し、多分充分でなかつたでせう。」

アドリアナは、此の事に就てアンティフォラスに充分に言つたと言ふ事を、尼に知らせたいと思つて言つた。

「私達は絶えずその事ばかりを話してゐました。寢床の中でもその事ばかり話して夫を眠らせず食事の時にはその事を言ひ續けて食べさせませんでした。二人ぎりである時には私は外の事は一言も言はず、皆の前ではその事に就て皮肉を言つたりして、いつもいつも私は私以外の女を愛する事が如何に悪く恥づ可き事であるかを語つてゐました。」

尼院長は、嫉妬深いアドリアナからこんな告白をさせて置いてから言つた。

「あゝ、それだからあなたの夫は氣が狂つたのです。嫉妬深い女の毒舌は狂犬の齒よりも怖ろしい力を持つてゐます。あなたの小言の爲に眠られなかつたならば、頭が變になるのも尤もです。あなたの叱責で味をつけた食事を食べたのです。やかましい食事は消化がよくありません。だからこんな病氣になつたのです。あなたは口論で以て夫の楽しみを妨げたのでせう。社交や娯樂の楽しみを奪はれたならば、暗い陰鬱と不愉快な絶望が續く事は當然です。その結果あなたの嫉妬が夫を氣狂にしてみました。」

ルシアナは姉を救はうと思つて、姉はいつも靜かに夫を責めてゐたと言ひ、姉に向つて言つた。

「なぜ姉さんは此んな非難を黙つて聞いてられるのです。」

然しテドリアナは尼院長から自分の缺點を餘り明らかに示されたので、只斯う答へた。

「あの尼ひとは裏切つて私を責め出したんだもの。」

アドリアナは自分の行ひに對して恥ぢてゐたけれど、夫を引渡す様に言ひ張つた。が尼院長は僧院の中へこれ以上誰まも入れる事を許さず、又この嫉妬深い妻君に不幸な夫を引渡す事をも欲せなかつたので、温和な法で夫を回復させ様と決心して、自らは再び僧院の中へはいつて、二人を外において戸を閉める様に命じた。

双兒の兄弟が餘り良く似てゐる爲に、大變な間違が起つたこの事件の多かつた日の間に、老イージョンの恵まれた最後の日が過ぎて行つた。もう時刻は日没に近く、若し日没迄に金を拂はなければ死刑に處せられる事になつてゐた。

死刑の場所はこの僧院の近所にあつたので、尼院長が入つて間もなく老人がその前を通つた。公爵は、若し誰かが金を拂ふと言へば直ぐにも許してやるつもりで、親ら老人について來たのであつた。

アドリアナはこの陰氣な行列を止めて、尼院長が自分の氣狂になつた夫を渡さない事を告げて、

裁きを求めた。そんな事を語つてゐる處へ、逃げ出して來た本當の夫を召使のドロミオこが來て、公爵の前で、自分の妻が狂にもなつてゐないのに監禁した事や、縛を解いて監視の眼を盗んで逃げ出して來た苦心を話して、裁きを求めた。アドリアナは、夫が僧院の中にゐる事だと思つてゐたので、それを見て非常に驚いた。

イージョンは息子を見て、兄や母を探しに出て行つた二男だと思ひ込んで、此の子供が自分の身代金を拂つて呉れるだらうと非常に喜んだ。そこでアンティフォラスに父らしい愛の言葉で、今にも許される事を喜びながら話しかけた。所がイージョンが非常に驚いた事は、息子は少しも知らないと言つたのである。それもその筈、此のアンティフォラスは子供の時分嵐の中で別れたきり會つた事がなかつたからである。哀れなイージョン老人が、悲しみや心配のために、自分の息子が父親をさへ忘れる様になつてしまつたのか、それとも、こんな哀れな有様になつた父親を知つてゐると言ふのを恥ぢてでもゐるのかと思ひながらも、熱心に父だと言ふ事を認めさせようと努めてゐた。その混亂の眞最中に、尼院長と弟のアンティフォラスとドロミオとがが出て來たので、アドリアナは自分の前に夫がドロミオと二人立つてゐるのを見て打驚いた

さて今迄の皆を惑はせた間違は、盡く明かになつた。公爵はこのお互に全く良く似た二人のアン

ティフォラスと二人のドロミオを見た時、見た所非常に不思議ではあつたが、今朝イージョンが話した事を覚えてゐたので、すぐに正しく推量する事が出来た。それでこれはイージョンの二人の息子と二子の奴隷とに相違ないと言つた。

實際思ひも寄らない喜びがイージョンの生涯の終りを飾る事となつた。朝には歎きながら死刑の宣告の下に語つた話が、夕、赤々し沈む太陽の下に幸福な終りを告げた。此の尊い尼院長は、自分こそ長い間離れてゐたイージョンの妻であり、二人のアンティフォラスの母である事を語つたからである。

漁夫達が兄のアンティフォラスとドロミオをつれ去つた後、イージョンの妻は僧院へ這入り、賢く徳高い行ひに依つて、遂に此の僧院の院長となつたのであつた。そして不幸な旅人をよく待遇した事で、はからずも自分の息子を保護したのであつた。

長い間離れ離れになつてゐた親子四人は、喜ばしい祝賀や、愛の籠つた挨拶をする爲に、しばらくは父が未だ死刑の宣告の下にある事さへ忘れてゐたが、漸くして氣が落付くと、エフェシユースのアンティフォラスが父親の身代金を公爵に差出した。然し公爵は自由に許して金を受取らうとせず、尼院長や新に見付かつた父子と共に僧院に入り、不遇な運命が喜ばしい終りを告げた幸福な家

族の話しをゆつくり聞いた。又二人のドロミオの寂しい喜びも忘れてはならぬ。二人も亦祝賀や挨拶を交し、お互に兄を見弟を見れば（鏡を見る様に）自分の顔の美しさが判つたので、お互に立派な顔をしてゐる事を褒め合つた。

アドリアナは夫の母親からの意見を聞いたので非常に心に悔いて、それ以後不當な疑を抱いたり夫に對して嫉妬を起したりなごせぬ様になつた。

シラキユースのアンティフォラスは兄嫁の妹である美しいルシアナと結婚し、老人イージョンは妻や子供達と共に長くエフェシユースの街に住んだ。それ以後は全く間違ひいふ間違をやり續けて、何うしても解けなかつたあんな出来事はなかつたが、時々、昔の冒険を思ひ出すやうな、アンティフォラスやドロミオが他の兄弟と間違へられて、滑稽な間違が生ずる事があり、愉快な氣輕な間違の喜劇が演ぜられる事もあつた。

以尺報尺

昔非常に優しい温厚な性質の公爵が維納の市を治めてゐた。公爵は少しも臣民達の罪を法律で罰せなかつた。そして此の市に唯一の特別な法律があつたけれ共、公爵が治めてゐた間一度も適用し

なかつたので、その存在すら殆んど忘れられてゐた。その法律と言ふのは誰でも自分の妻でない女と一緒に暮してゐる男は死刑に處するといふのであつた。併し公爵が寛大なので、この法律は全く無視せられ、神聖な結婚制度も蔑ろになつたから、毎日々々公爵の所へ維納の市の若い娘を持つ親達が出来て、娘が誘惑されて親の許を去り、未婚の男の伴役として同棲してゐることで不平を申し立てた。

善良な公爵は臣民の中に悪がはびこりつゝあるのを見て悲しんだが、公爵は今迄あんなに放任して於いたのを、急に此の悪弊を一掃するために嚴重な法律を行へば、臣民達が（今迄公爵を愛してゐたのであるが）公爵を憎まだと思ふやうになるだらうと考へた。そこで公爵はしばらく自分の公國を去つて、代理の者に此の不徳な戀人達を嚴重に處罰する全權を與へて、自分がそんなに嚴格にしたと言ふ誹謗を避けようと決心した。

公爵は此の重大な任務を果たす適任者として、嚴格、剛直な生活をしておつて、維納の聖人とさへ呼ばれてゐるアンジエロを撰んだ。そして此の計畫を顧問官長、エスカラス卿に打明けた時、エスカラスは言つた。

「若し維納にそんな重大な恩恵と名譽を受くるに足る人があると致しますれば、アンジエロ卿

より外には御座いますまい。」

さて、公爵はポーランドに旅行をする爲め維納の市を去り、その留守中アンジエロを公爵代理とするに布告した。所がそれは口實で、實は公爵は、聖人の様なアンジエロがこんなに行ふかを人知れず見たいものだと思つて、托鉢僧の姿をして私かに維納に歸つてゐた。

丁度アンジエロが新らしい權力を與へられた時分に、クラウディオと呼ぶ一紳士が、若い娘を兩親の許から感した。その罪のために、新らしい公爵代理の命令に依つて彼は監獄に投ぜられ、長い間閑却されてゐた法律を適要してクラウディオは斬首を宣告された。多くの人々の同情が集つて若いクラウディオを許す様にと願ひ、老貴族のエスカラスさへ若者の爲に仲裁を申出た。

「私が救つていたゞき度いし申すこの紳士には立派な父親が御座います。その父親の名に免じて何うぞこの青年の罪をお許し下さい。」

然しアンジエロは答へた。

「法律を案山子同様の物にしてはなりません。鳥を嚇すために樹てた案山子も慣れると恐ろしくないものだと思つて、遂にはそれを止り木にして恐れないようになります。青年は何うあつても殺さねばなりません。」

クラウディオの友達ルミオが監獄へ訪ねて行くに、クラディオは言つた。

「ルミオ、さうぞ私の爲に、この任務を果して下さい。けふ妹のイサベルが、セント・クレームの尼寺へ這入る筈になつてゐるんだが、どうぞあれに、危険がわしの身にせまつてゐる事を知らせて、あの峻厳な名代理に歎願して呉れる様に、是非アンジェロの所へ行けと頼んで下さい。大丈夫成功すると信じております。妹は談判に妙を得ておるから、説きつける事ができます、その上若い女の悲しみは、口をきかないでも男の心を動かす魅力があります。」

クラウディオの妹イサベルは、兄が言つた様にその日尼寺に見習として這入つた。そして見習としての試練を終つた後、尼寺の規則に従つて尼にならうと望んでゐた。ルシオが尼寺に這入つて行つて、

「もしく、此家の内に平安あれ、」と言つた時

「あなたか呼んでゐます。」ミイサベルが言ふと、

「男子の聲です、イサベルさん、戸を開けて用向を聴いて下さい。わたしには出来ない、貴女なら出来る。誓ひをしてしまふに、庵主様の前でなくちや、男子の口をきいちなりません。其時でも、口をきく時には顔を見せてはならず、顔を出してゐれば口をきいてはならないのですよ。」

「もう其他には、あなた方尼御さんに、何にも特権はありませんのですか。」

「それだけで澤山ぢやありませんかね。」

「はい澤山です。もつと欲しいといふのではありません。聖クレームにお仕へする尼としては、寧ろもつと厳格な御制限があつた方が望ましいと存じますのです。」

その時又ルシオが呼ぶのを聞いて尼が言つた。

「又呼んでゐます。どうぞ返辭をして下さい。」

イサベルはルシオの所へ出て行つて、挨拶に答へて言つた。

「願はくば平和と繁榮を！あなたです。お呼びになつたのは。」

「や、これは、娘御さん、でせうね多分。頬邊が薔薇色なんだから！何うかね、案内して、今度尼さんの見習になつたイサベルで娘に逢はせて下さい。不幸なクラウディオの妹さんです。」

「は、不仕合せな兄！何うしたんです。實は私がいサベルです。クラウディオの妹です。」

「美しいお嬢さん、お兄さんからくれぐれもお言傳です。手短に言ひますが、お兄さんは監獄にお在です。」

「は、ッ！何の科で？」

クラウディオが若い娘を誘き出した科で監獄に入れられた事をルシオが話すと、イサベラは尋ねた。

「あゝ、従姉妹のジュリエットぢやありませんか。」

ジュリエットとイサベルとは親類ではなかつたが、學校時代の友情を記憶するためにお互に従姉妹と呼び合つてゐた。そしてイサベルはジュリエットがクラウディオを戀してゐたのを知つてゐたので、ジュリエットの兄に對する愛が、こんな罰に陥れたのだと思つて心配した。

「其方ですよ。」ルシオは答へた。

「おゝ、ぢやなぜ兄さんが結婚せないのです。」

ルシオはクラウディオは喜んでジュリエットと結婚し度いのだが、公爵代理が此の罪の爲に死刑の宣告をしたのであると答へた。

「美しい貴女の歎願で、うまくアンジェロの心を和らげない限りは駄目なのです。貴女とお兄さんとの間のわたしの用と言ふのはそれなんです。」

「おゝ、かなしや、何うしよう。助けようとしたつて私にはそれだけの力がありやしないし、アンジェロを動かす力があるとも思へません。」

「不安は反逆者です。やつて見ようと言ふ勇氣がないから、手に入る筈の利益まで失つてしまふのです。アンジェロ卿の所へお行きなさい。男は、處女が跪いて泣いて請願すれば、まるで神様の様に物を與へるものです。」

「それぢや、兎に角出来るだけやつて見ませう。院母様に此の事をお知らせすれば、すぐにアンジェロ様の所へ参ります。兄へよろしくおつしやつて下さい。今夜すぐに成功の知らせをしてあげませう。」

イサベルは宮殿へ急いだ。そしてアンジェロの前に跪いて身を投げんばかりにして言つた。

「私は閣下に悲しいお願があつて参りました。さうぞお聞き下さいまし。」

「ふん。その願ひと言ふのは。」ミアンジェロは言つた。

イサベルは、最も感動させる言葉で、兄の命乞を請願した。然しアンジェロは言つた。

「娘さん、何うする事もできないよ、兄さんは宣告を受けておるから、何うしても殺されねばならん。」

「おゝ、嚴正な法律です。ぢや兄はもうだめです。お職務をお大切に。」
さう言つて歸らうとした時、一緒に來てゐたルシオが言つた。

「そんなこつちやいけない。もう一度引返して、うんご頼みなさい。その前に突伏して、あの上衣に絡み付きなさい。貴女は冷淡だからいけません。針一本貰ふんだつて、今の様な生ぬるい口上ぢや駄目ですよ。」

そこでイサベルは再び跪いて請願したが、

「もう遅い、既に宣告を下してしまつたあとだから。」ミアンジェロは答へた。

「もう遅い！いえ／＼。私は是非御取消し下さるやうに御願ひに上つたのです。さうぞ、閣下！偉人についてゐる種々の名聲や稱號も、儀式も、王様の冠りでも、お名代の御劔でも、元帥の^{トランシヨン}飾でも、裁判官の制服でも、お慈悲さ言ふ事程お身分にふさはしいものはありません。」

「さうか歸つて行つてくれ。」とアンジェロは言つたが、尙イサベルは願ひ續けた。

「若し兄が閣下であり、閣下が兄であつたら、閣下は兄と同じ心得違ひをなさるかも知れませんが、兄は決して閣下のやうに、さう苛酷ではありません。あゝ、若し私に閣下の権力があつたなら、さうして若し閣下がこのイサベルであつたら、よもやこんな風にはなりません。いゝね、きつこ私は裁判官さは何う言ふもの、罪人さは何う言ふものであるさ。いふ事を知らせてあげます。」

「まあ／＼、氣を鎮めなさいお嬢さん！お前の兄さんを死刑に處するのは、法律がするので、わ

しがするのでは無い。例へわしの親戚であらうと、兄弟であらうと、倅であらうと、法律を犯したものは皆同じ様に處分されねばならぬ。是非とも明日は死刑にせねばならぬ。」

「え、明日？お、そりやあんまり早すぎです。命だけを助けて下さい。命だけを助けて下さい。兄は未だ死ぬ覺悟が出来て居りません。料理に使ふ鶏だつても季節を見計らつて殺します。神様へ獻上するものを、自分等の食物よりも粗末に取扱つてよござんすか？さうぞ、さうぞ閣下、考へて見て下さいまし。兄と同じ罪科で死刑になつた者が今までに一人だつてありますか？犯したものは數限りなくありましたけれども。それではあなたはその宣告を始めてなさるんですか、さうして兄が其最初の犠牲者ですか。御自分の胸によく尋ねて御覽なさいまし、閣下、兄と同じ不量見をば閣下の御心が持つてゐないかと叩いて下さい。萬に一つ、お胸の底に、さう言ふ天性のわるい御心がお有りの様なら、さうぞ兄の命を取るなんぞとおつしやらないで下さい。」

イサベルの此の最後の言葉が今迄に言つた何の言葉よりも強くアンジェロの心を動かした。イサベルの美容を見て、アンジェロも悪い心を起し、クラウディオが犯したと同じ様な不徳な戀をしようとさへ考へ出したからである。此んな葛藤が心の中に起つたのでアンジェロはイサベルの側から去らうとしたが、イサベルは尙も引留めて、

「もしく、閣下、お待ちなすつて下さい。一寸、私は賄賂を差上げます。是非御引き返し下さい。閣下。」

「何、賄賂をするつて？」と言つて、アンジエロは彼女が賄賂等を使はうとしてゐるのかと思つて驚いた。

「はい、神様だつても、喜んで御一緒にお受遊ばしなさる贈物を献上するのです。人間の出来心で價格が殖えたり減つたりする金銀だまか寶石等を差上げるものではありません。日出前に天へ届くお祈りを、誠心を籠めた處女の祈りを差上げるのです。精進潔齋して、一心に神にお仕へする清淨無垢な處女の祈りを差上げるのです。」

「む。明日お出でなさい。」とアンジエロは言つた。

兄の命がしばらく猶豫せられたのと、又明日面談する事を許されたのとで、イサベルは斯くまで峻厳な心をさへ遂に、説き伏せ得るだらうと言ふ喜ばしい希望を抱いて宮殿を去つた。そして出て行く時

「天が閣下をお守り下さいます様に、お變りなう在せられませ。」

それを聞いたアンジエロは心の内に言つた。「アーメン、私はむしろあなたから守られたい、あな

たの徳に依つて。」そして自分の悪い考へに驚いて言つた。

「おや、こりやさうしたのだ、一體さうしたのだ。エッ、予は娘に懸想したのか？もう一度彼女に會ひたいと思つたり、彼女の目を見度いと思つたりするのは、ま、おれは何を空想してゐるのだお、おのれ、老獪な人類の悪魔め、聖者を陥れるためには、聖者を釣の餌に附けるのだな。淫婦などは決して此心を動かし得なんだのに、あの貞淑な處女の美には逆も克つ事が出来ん。つい今日迄は色慾に溺れる奴等を見る度に、冷笑して不思議がつてゐたのに。」

アンジエロは其晩、自分があんなに嚴罰に處した罪人よりも、もつと苦しい穢はしい胸中の苦闘を経験した。監獄にゐたクラウディオの所へは、托鉢僧の姿をした公爵が訪ねて来て、若者に悔悟と平和の言葉を説いて、天國に行く道を教へた。所がアンジエロは、時にはイサベルを無垢と清淨の路より誘き出さうと思ひ、時には未だ行つても居ない罪の後悔と恐怖とに苦しめられつゝ、色々とまだ行つてゐない罪を思ひ惑ふてあらゆる苦痛を嘗めた。併し遂に悪心が勝を占めて、つい先程賄賂を申し出たのをあんなに驚きながら、今は此の娘が、自分の兄の生命と言ふ尊い贈物を受けてさへ、拒まねばならない程の大變な賄賂を以て誘惑しようと思つた。

翌朝イサベルが来た時、アンジエロは娘を唯一人で自分の室へ通す様にと命じ、其處へ來ると、

若しお前が處女の誇りを私に任せ、ジュリエットがクラウディオに對してした様な罪を犯して呉れるならば、兄の生命を許さうと言つた。

「イサベル、私は貴女を戀してをる。」

「兄がジュリエットを戀しましたので、それで閣下は兄を死刑にするとおつしやるでは御座いませんか。」

「然し、若しお前が、ジュリエットがクラウディオの所へ行く爲に、父の家から夜々忍び出た様に、夜々私の家に忍んで訪問する事を承諾さへすれば、兄を死刑にはせない。」

イサベルは、アンジエロが自分の兄を死刑に處するを宣告した、その同じ罪を犯させようと誘うのを聞いて愕いた。

「たごひ兄のためだつて私は決してそんな事は出来ません。わたくしが死刑を宣告されてをり厳しい答の傷痕が紅玉のやうに連つて居ても、従容として、待焦れてゐた寢床へ行くように死に、行きますとも、私は決してこの耻辱に身を委ねません。」

「言ひ、わざと自分を試すためにそんな事を言つたのだらうと言つたが、アンジエロは、
「いゝね、信じて下さい。私の名譽に掛けて、眞實の事を言つてゐるのだ。」

イサベルは、アンジエロが、そんな汚らしい目的を名譽といふ言葉で言つてをるのを聞いて、怒り心頭に發して言つた。

「えッ！そんな最も汚らしい要求を持つて居る者に何の名譽があらう。わたしは此通りを世間へ言ひ觸らませう。お氣を付けなさい。待つておいでなさい。さ、兄を直に赦すを署名しなさい。さうでないわたくしは、大きな聲をしてあなたの人格を世間に吹聴します。」

「誰がそれを本當だとするものか。イサベル、嘗て汚されない予の名前、厳格な予の生活、予の證言はお前の言葉を説破してお前の批難を直に打ち消してしまふ。予に身を委せば兄の命は許してやる。さもなけりや明日は死刑だ。お前はお前で勝手に何なりと言ひ觸らすがいゝ。眞實の事を言つたつて、虚言でひつくり返して見せる。明日までに返辭をせよ。」

「ああ、誰に訴へたら可いだらう。此の事を話したつて誰も本當にはしないだらう。」

「言ひながらイサベルは、兄の監禁されてゐる怖ろしい監獄の方へ行つた。其の時兄は公爵を敬虔な話をしてゐた。公爵は、やはり同じ托鉢僧の姿でジュリエットをも訪れ、罪を犯した戀人達を二人共に、自分達の罪を悟らせた。不幸なジュリエットは涙を流して心から後悔し、自分がクラウディオを不徳な誘惑に喜んで引き入れたのであるから、罪は自分の方が重いのであると白狀した。」

イサベルはクラウディオの禁錮せられてゐる室に這入りかけて言つた。

「こゝに平和と幸福と、善き集つどひあれ。」

「ごなた？おはいりなさい。其好意の祈りに對して、歓迎せねばなるまい。」と變装した公爵が言つた。

「用といふのは、唯一言二言クラウディオにしたい事があるのです。」ミイサベルが言つた。

公爵は二人を残して去り、監獄を取締つてゐる典獄に頼んで、二人の話が聞ゆる様な物蔭にかくしてもらつた。

「さて妹、何か吉い知らせがあるか。」

妹は兄に、明日死刑を受ける覺悟をしなければならぬと語ると。

「外に仕様はないのか。」

「あります。兄様、有るには有るのですが、それに服従なされば、あなたは名譽を剥ぎ取られてしまつて、まるで裸にされるのです。」

「一體それはどんな事か。」

「おゝ、クラウディオ、わたしや心配です。そして私は戰慄します。あなたは若しや生きてゐた

いのぢやなくツて？永遠の名譽よりも六年か七年の命が欲しいのぢやないの？え、死ぬ氣になれない？死ぬのは想像してゐる間が怖いのです。わたし共が踏みにじるあの可愛相な甲蟲だつて、死ぬ時の苦痛は巨人の死ぬのと些少も變りはないのです。」

「お前は何故わたしを然う辱めるのだ。女なんかには言はれてから決心するわたしだと思つてゐるのか？是非死なゝきやならんと思や、わたしは迷途に行くのを花嫁に會ふやうに思つて、両手で以て抱きしめもするよ。」

「それでこそ見さんです。それが、取りも直さず、お墓の中のお父さんの御言葉です。兄さん、さうしても死んで下さい。わ、クラウディオ、あなた解つて。あの外面だけは聖人顔をしてゐるお名代は、わたしの處女の誇りを許さへすればあなたを赦すといふのです。おゝ、命だけで濟むものなら、わたしは針一本棄てる様に、あなたの命乞の爲に命を棄てますのに。」

「イサベル、ありがとう。」

「明日死ぬといふ覺悟をして下さい。」

「死は怖ろしい事だ。」

「だつて、恥辱を受けながら生きてゐる事は唾棄すべきです。」

然し、死といふ觀念はクラウディオの氣を顛倒し、罪人が死に面した時にのみ知る恐怖に襲はれて、叫び出した。

「妹よ、どうぞ私を生かして呉れ！兄の命を助けるためにした事なら、どんな罪惡であつても、自然がそれを緩和して美德にする。」

「お、人非人！卑怯者！なんごいふ情ない、破廉恥漢です。あなたは妹に汚れた事をさせて置いて命を助からうと思ふのですか、まあ、何といふけ、け、けがららしい。わたしは兄様。あなたが、例へ二十の首を持つてゐても、私にそんな不徳をさせる位なら二十の首を残らず切れておしひになる程の、立派な心を持つておいでになるのだとばかり思つてゐましたのに。」

「まあ、さうござう言はないで、聞いて呉れ。」

然しクラウディオが、徳の高い妹の不名譽に依つて命を救はれたいと願つた弱點を、辯護しようとしてゐた時、公爵がはゐつて來て遮つた。

クラウディオ、お前んと妹さんとの問答は彼方で聞いてゐたが、何の、アンジェロさんに、妹御を墮落させようなんて目論見があらう筈はない。唯その節操の有無を見別けるために、一寸妹さんの氣を引いて見られたのに相違ない。ところが妹御は、女の道を本當に心得てござるので、立派に

拒絶なすつた。それは先方でもきつと喜んでをられるに相違ない。併しあの方があなたを赦される望はないのだから、祈りに時を費して、死ぬ覺悟をなさい。」

クラウディオは自分の弱かつた事を詫びて言つた。

「妹よ許して呉れ、わたしはもう此の世に愛想が盡きたから、早く此の世を離れたいと願つておる。」

そしてクラウディオは自分の罪に對する恥と歎きとに満ちて退いた。

公爵はイサベルと唯二人になつたので、その徳の高い決心を褒めて言つた。

「あなたを美人にお造りなされた大能の御手が、あなたを善人にもお造りなされた。」

「お、ほんとに公爵さまは、すつかりアンジェロに騙されておいでなさるのです。公爵さまがお歸りになつた時お目に掛かれるものなら、わたしは彼の施政をすつかり申し上げる積りです。」

ミイサベルは、自分が今公爵に言つておるとも知らずに語るに公爵は答へた。

「なるほど、それもよからう。併今のまゝでは、そんな覺えはないと言ひ抜けるに違ひない。だから、わしの忠告に耳をおかさない。一つの良策が心に浮んだ。それはある一人の虐待された婦人も助かり、お兄さんも狂暴な法律からまぬがれ、あなたも大切な操を汚さないで濟み、そして不

在中の公爵が、偶然國務をとりて歸られておき、になれば必ず御喜びになるに信じてをります。」

イサベルは悪い事できなければどんな事でもすると答へた。

「淑徳は勇敢です、決して怖るゝ事はない。」

ご公爵は言つてから海で溺死した有名な武士フレデリックの妹である、マリアナを知つてゐるか尋ねた。

「はい、聞いた事があります、評判の良いお方でした。」

「あの婦人がアンジェロの妻君です。然しあの方の持参金は、兄様が難船せられたあの船に乗つてゐたので沈んでしまつたのです。これがお氣の毒な婦人の大した不幸の原因となつたのです。婦人は、それが爲に、常に大層親切にして呉れた、あの氣高い有名な兄を失つたばかりでなく、自分の財産をもなくしたためにあの賢人らしい夫アンジェロの愛までも失つてしまつたのです。所がアンジェロは（本當は持参金が無くなつたのが原因だのに）此の淑徳の婦人に不名譽な難癖をつけて、あの婦人を泣き通させ、その涙を哀れとも何とも思はんです。それほど没義道な事をされ、ば、戀も情も冷めさうなものだが、譬へば堰かれた流れの激する様に、マリアナは未だあの残酷な夫を初戀の時と少しも變らずに愛してゐるのです。」

公爵はそれから、もつと詳しくその計畫を説明した、それは、イサベルがアンジェロの所へ行つて、彼が望んでゐる通り真夜中に行くと言ふ承諾を與へて置いて、約束の通り兄の命の赦しを得て置き、マリアナをそつとアンジェロの所へ行かせ、暗にまぎれてイサベルだと思はせると言ふのであつた。

「だから娘さん、この事をするのを少しも怖れる必要はありません。アンジェロはあの婦人の夫です、だから二人を一緒にするのは罪ではありません。」

イサベルは此の計畫に賛成して言はれた通りをする爲に出て行つたし、公爵も亦マリアナの所へ此の事を告げに行つた。公爵はこれより先に、假裝して此の不幸な婦人を訪ね、神の道を説き親切に慰めてやつた時に、この婦人の口から此の悲しい話を聞いたのであつた。マリアナはすぐにその計畫通りに従はうと承諾した。

イサベルがアンジェロとの會見を終つて、公爵と出會はうと約束して置いた、マリアナの家に来た時、公爵は言つた。

「ちようご好い具合に逢ひました。お名代との交渉はどんなでした。」

イサベルは事件の経過をすつかり物語つた。

「アンジェロのお庭は、練瓦塀で取巻かれてをって、其西側は葡萄畑になつてゐます。そしてそこに木戸がありますの。」と言つて、アンジェロが渡した二つの鍵をマリアナと公爵に示し、「其木戸は此大きな鍵で開きます。それから此小さいので、其葡萄畑からお庭へ出る道の木戸が開きます。わたしは其お庭で、人の寢静まる丑滿つ頃にお會ひするといふ約束をしました。そして兄の命の保證を得て参りました、其道筋もよく注意して覺て來ました。聞えない位の聲で、おぎ／＼と氣がねしながら、彼は二度までも道筋を教へて呉れました。」

「マリアナが知つて置かなければならぬ様な、何か特に約束なすつた證據になるやうなことはありませんか。」

「何もありません。唯暗くなつてから行けばいいんです。それからわたしは唯一寸の間しかゐられないと言つて置きました。召使の者が一緒に來て、兄の事で伺つたのだと思つて、侍つてますからつて。」

公爵はイサベルの思慮あるやり方を褒めた。そしてイサベルはマリアナに向つて言つた。

「お別れなさる時に、唯一寸小さい聲で、アンジェロにおつしやればい、のです。『私の兄の事をお忘れ下さるな！』」

マリアナは其晩イサベルの約束して置いた場所へ行つた。イサベルは想像通りに、此計略に依つて兄の命をも自分の名譽をも救ふ事が出來たのを喜んだ。所が兄の命の安全かぎうかを公爵は全く安心してゐなかつたので、眞夜中に又刑務所を訪れた。此の訪問はクラウディオに大變な幸であつた。若し公爵が訪ねなかつたなら、クラウディオは其晩に首を斬られてゐたらう。公爵が刑務所へはゐつて間もなく、殘酷な名代からクラウディオの首を斬つて明朝五時までに持つて來いと言ふ命令が來た。然し公爵は典獄にクラウディオの死刑を延期させ、アンジェロを偽るために、其の朝刑務所で死んだ者の首を送る事にせよと説いた。公爵は、尙自分を只の托鉢僧ださしか考へてゐない典獄に、此の事を説いて賛成させるため、公爵が親ら書き、署した手紙を見せた。それを見て典獄はこの托鉢僧は旅行中の公爵から何か秘密の命令を受けてゐるのだと思つて、クラウディオを赦す事にし、死人の首を斬つてアンジェロの所へ持たせてやつた。

公爵は本名でアンジェロの所へ手紙を書いて、或る出來事のために旅行を中止する事となつて、明朝維納に着くから迎へに街の入口まで來て、其處で政權を引渡す様にと命じ、その上臣民は誰でも、不正義に對して救濟を望むものがあれば、自分が市に入る街上で請願書を出すやうに布令を出せよ命令した。

朝早くイサベルは監獄へやつて来た。内證の譯があつてイサベルにクラウディオが殺されたことを告げた方が佳いと思つて公爵は娘の來るのを待つてゐた。そしてイサベルが、アンジエロから兄の赦免狀が来たか尋ねた時に斯う答へた。

「アンジエロから兄様を此世から放免せよと言ふ命が下つたので、もう首を斬つて、御名代の所へ送りました。」

悲しみの餘り妹は叫んで言つた。

「おゝ不幸な兄さん、悲嘆に沈むイサベル、むごい意地悪の世間、憎い、あのアンジエロ奴！」

此の變装した托鉢僧は娘を慰めて、少し平靜に返つた時、直ぐに公爵が歸つて來る事を告げ、公爵の前へ如何にして進み出て、アンジエロの事を訴へるかを語り、暫くの間は不利なやうに見えても怖れるに及ばないと語つた。イサベルに充分に意を含めて置いて、其處を去つた公爵は、次にマリアナにも何うすれば良いかと言ふ忠言を與へにマリアナの所へ行つた。

さて公爵は托鉢僧の衣を脱ぎ捨て、元の王衣を着て、王を迎へに集つた忠義な臣民達の觀呼の裡に維納の市に入つた。其處にアンジエロが待つてゐて、正式に政權を返還した。其の時イサベルは救濟を求め直訴者として現れた。

「さうぞ正しい御裁判を願ひます。お慈悲深い公爵さま、わたくしはクロウディオに申す者の妹でございます。兄は若い娘を誘惑したと言ふ罪で、斬罪の宣告を受けました。私はアンジエロ卿に兄の命をひを致しました。さう私が祈願し腰を折つて頼んだか、又どうあの人が拒み、又どう私が答へましたかは餘り長い事なのですから省きます。只はつかしい、悲しい終局だけを唯今申し上げます。アンジエロは私があの人汚らはしい戀に身を任さなければ、兄の命を赦さないと言つたのです。色々と心の内で思ひ惑ひました末、兄を思ふ情けが遂に私の節操を壓しつけて遂に私は身を委せました。所が次の朝になりますと、アンジエロは約束を裏切つて、とうとう兄を斬罪にしてしまつたので御座います。」

公爵は娘の言葉を信ぜない様な風を装ひ、アンジエロは又、適法に従つて兄を殺したため、悲しみの餘り氣が變になつたのだらうと言つた。其の時又他の直訴者がやつて來た。それはマリアナであつた。彼女は言つた。

「氣高い公爵さま、光は天より來り、眞實は息より出で、眞實には意義があり、義徳には眞實がありませんれば、私はあの人妻でございます。公爵さま、イサベルの言葉は確かに偽りで御座います。イサベルがアンジエロと共に一夜を過したと申しますその夜は私はあの人と一所に亭に居

りました。これは全くの事實で御座いますから、お咎はないものと信じます。さうでなければ大理石像の様に、かうして膝をついてゐるのが當然で御座いますけれども。」

そこでイサベルはこれが本當だと言ふ事は托鉢僧のロド井ツクに聽いて下さいと訴へた。その名は公爵が變装してゐた時の名である。イサベルもマリアナも共に、イサベルの潔白を維納の公衆の前で公式に知らせたいと思つてゐた公爵の命じた通りを言つた譯である。所がアンジエロは、そんな計略があつて二人の話が符合せないのだこは夢にも知らず、此んなに全く反對の事實のために、イサベルの訴へに對して自分の無實が證明出来るものと思つて、無實の罪のやうな顔をして言つた。

「唯今迄は一笑に附しておりましたが、御前、もはや打捨てにはなりません。この氣の錯亂した二人の女共は、もつと上手の何者かに教唆されて、手先になつてゐるのに外ならんぞ存じます。御前、この悪計を探索いたしますところをお許し下さいませ。」

「お、無論差支ない。存分に懲らすがよい。……エスカラス卿、お前もアンジエロ卿も同席して、共に力を合せて此讒誣の出所を糾問するがよい。彼等を教唆した一人の僧があるさういふ。其者をも呼び出して来たならば、十分に名譽の損傷を償ふに足るやうに懲罰をするがよい。予は暫時此場を退くことにする。併しアンジエロ卿、充分この事を熟考した後でないに輕舉はいけません。」

斯う言つて公爵は出て行つた。アンジエロは自分の事件を自分が代理裁判官となつて裁く事が出来るので喜んだが公爵が去つてゐたのは少しの間であつて、公爵の服を脱いで僧服を着て又もこの變装をして、再びアンジエロとエスカラスの前に現れた。老エスカラス卿は、アンジエロが讒言せられてゐるのだと思つて托鉢僧にたづねた。

「進みなさい、其方が此女達を教唆して、アンジエロ卿を讒訴させたのですか。」

「公爵は何處にお在です。私は是非とも公爵に申し上げたいと存じます。」

「公爵の命令を吾々が承つてを。われ／＼に申せばよろしい。眞直に申しなさい。」
「少くも無遠慮に申します。」

と托鉢僧は言つて、先づ公爵がイサベルの事件を娘が訴へた當人のアンジエロの手に托した不當を攻め自分は維納に偶然來合せた者であると言ひながら、自分が目撃した綱紀紊亂の數々を無遠慮に申し立てたので、エスカラスは當政府の悪口を言つた罰とし、又公爵の行動を彼これ言つた科に依り、監獄へ引き立てると嚇した。其の時、托鉢僧だと思つてゐた男が變装を脱ぎ棄て公爵となつたので、皆の愕ろきと、アンジエロの狼狽とは、例へるに物もない程であつた。

公爵は先づイサベルに言つた。

「イサベル、こゝへ來なさい。お前の托鉢僧が今ではお前の領主だ。お前のために指導をしたり心を盡したりしてゐた予は、服装を變へても、心は變らないでお前のために盡力してやるぞ。」

「おゝまあ、お免し下さいませ。お殿さまとは存じませんが、御家來のわたくしがお使ひ立てしたり、お骨折を掛けました。」

公爵は、イサベルの善良な事をも少し試さうと思つて、兄の生きてゐる事をもうしばらく語らずに置かうと考へたので、兄の命を救ける事が出来なかつた事を大變斷つた。アンジエロは、公爵が留守中の自分の悪行を皆側から見えてゐた事を知つた。

「おゝ御前、恐れ入りまして御座ります。御前自身が恰かも神明の如く、私の一切の行動を御照覽あつたに承りながら、尙包みおほされると致しますならば、罪科の上に罪科を重ねまする道理で御座ります。此上は只御前、どうか此の自白を以て私の破廉恥罪の御審問にお代へ下さい。そしてすぐさま御宣告下されて、死刑に處せられまするのを、無上の慈悲としてお願い申します。」

「アンジエロ、其方の罪過は、既に明白である以上、クラウディオを死刑に處した其同じ斷頭臺へ、彼と同様寸刻の猶豫をも許さず、その方を引立てるやうに宣告する。その方の財産は、マリアナ、本來は國家へ沒收すべきだが、もつとよい夫を得させるため、寡婦たる其方に與へて相續させる。」

「おゝ、お慈悲深いお殿さま、他の夫は欲しくありません。此人で澤山で御座います。」

とマリアナは言つて跪き、此の親切な妻は、イサベルがクラウディオの命乞をした時と同じ様に不實な夫アンジエロの命を乞ふた。

「おゝ、お殿さま、……美しいイサベルさん、味方になつて下さい。一緒に膝を曲けて願つて下さい。さうすれば私死ぬ迄もあなたの爲に命を棄て、盡しますから！」

「それは無理無體な頼みご言ふものだ。若しイサベルが斯う言ふ罪惡に同情して歎願するやうなら、彼女の兄の亡靈が、墓を發いて出て來て、怒り怒つて彼女を地獄へ引立て、行くであらう。」

「イサベルさん、もしイサベルさん、でも唯わたしの側に膝を突いて、何も言はなくて、手を舉げてゐて下さい。願ふ事はわたしが言ひます。みんな善人でも過失から造られたのです。そして大抵は少し悪いのであるから、後にだんく、善くなるのです。わたくしの夫ごともさうで御座りませう。おゝイサベルさん、ごうか膝を貸して下さい。」

「アンジエロは、クラウディオを殺した罪で死なねばならぬ。」

公爵は言ひ切つた。然し公爵は、優しく、氣高い行をすと思つてゐたイサベルが、公爵の前に跪いて願ひ出た時に非常に喜んだ。

「お慈悲深い御領主様、どうぞ此の方が、假にまだ兄は生きてゐるのに罪せられるとおほしめして下さい。私はこうも考へます。此の方のなすつた事は、わたくしがお目に掛つた迄は、お職務に充分忠實であつたのです。死刑だけはお赦し下さいませ。兄は死罪を犯しましたのですから、あつたのは正當で御座います。」

公爵は、自分の敵の爲にさへ命乞をする氣高い娘の願に最も適はしい答へをしようと思つて、監獄で自分の運命が何うなる事が心配してゐたクラウディオを呼びに人を遣り、悲しんでゐた兄の生きてゐるのを贈物にしようと思つた。そしてイサベルに言つた。

「イサベル、さ、手を頂戴、お前を愛する餘り私はクラウディオを許さう。さうしてわしのものにならうとお言ひ、そうすれば彼は予のためにも兄弟である。」

此の時アンジエロ卿は自分の命が救けられたの知り、公爵は彼の眼が少し輝いて來たのを見て言つた。

「さあ、アンジエロ、お前の妻を可愛がつておやり、彼女の御蔭でお前は救はれたのだ。マリアナ、うれしいだらう。アンジエロ、随分可愛がつてやれ。わしは彼女の懺悔を聞いて、その淑徳をよく知つてゐる。」アンジエロは、少しばかりの間政權を握つてゐた事を思ひ出して、自分がどんな

に残酷であつたかを知り、慈悲が如何に有難いかを知つた。

公爵はクラウディオにジュリエットと結婚する様に命じ、再びイサベルに自分との結婚を申込んだ。公爵は娘の徳高い立派な行動に心を動かされたのであつた。イサベルはまだ尼になつてゐなかつたので結婚する事は自由であつた。その上公爵が貧しい一托鉢僧に姿をかへてゐる時に、自分の爲にして呉れた親切を思ひ出して、非常な喜びを以て公爵の申込んだ此の名譽を受けた。イサベルが維納の公爵夫人になつてからは、徳高いイサベルの立派な手本にならつて、維納市の若い娘達は皆改善して、その時以後今では後悔してゐるクラウディオの妻、ジュリエットの犯した様な罪を誰一人として犯すものがなくなつた。そして慈悲深い公爵は最愛のイサベルと共に最も幸福な夫として、又公爵として、維納の市を治めた。

十 二 夜

セバスチャンとその妹ヴァイオラはメッサリーンの若者と娘とであつて譬兒であつた。(非常に珍らしい事には二人は生れた時から大層よく似てゐて、服装が違つてゐなければ、全く何方が何方とも見別けが付かない程であつた。二人は同じ時に生れて、又同じ時に死ぬ様な危険に出會つた。

二人が一緒に航海してゐた時に、イリリヤの海岸で船が難破したからである。二人が乗つてゐた船は大嵐にあつて暗礁に乗り上げ、船員の僅かが命からがら逃れた。船長は助かつた僅かの船員達と共に小さなボートで陸に上がった。その人達と共にヴァイオラも無事に上陸する事が出来たが、此の哀れな娘は、自分の助かつた事を喜ばないで、兄のなくなつた事ばかりを悲しんだ。然し船長は船が難破した時兄は自ら丈夫なマスト樁に結びつけてゐたのを見たし、また遠くに來て殆んど見なくなりなるまで、浪の上に身を支へてゐたのを見たと言つて慰めた。ヴァイオラは此の話を聞いて希望を得て大變慰められた。然し故郷から遠く離れた見知らぬ他國で、自分の身の振り方を何うしたものかと考へて、船長にイリリヤの風土を知つてゐるか尋ねた。

「え、よく知つてゐますよ。わたしは此處から三時間で行かれる所で生れて育つたのです。」
「さういふ方が御領主です。」ミヴァイオラが尋ねた。

船長は威徳兼備の公爵オアシノがイリリヤ國を治めてゐる事を告げるに、ヴァイオラは父からオアシノの事に就て聞いた事があると言ひ、その時は未だ結婚してなかつたと言ふ事をも話した。

「今でもです、ミニかく、つい此間までは確かです、わたしは一月前に此處を出發したのです。

其際（とかく高貴のなされることは下の者共がいろ／＼噂をするものですが）昨今公爵は徳の高い令

嬢、美しくいオリヴィヤ姫さといふ方へ結婚のお申込みをなすつたとか何ぞか噂をしてゐました。この姫君の父、伯爵は、一年ばかり前にオリヴィヤ姫を兄様に托されて亡くなられたのですが、その兄様もまたその後間もなくお亡くなられたのです。それで姫は、兄様に對する愛から、男子との交際はおろか、顔を合はせることさへなさないと言ふ噂でした。」

ヴァイオラは、自分も兄を失つて、大層胸を痛めてゐたので、そんなに優しい心で兄の喪に服してゐると言ふ婦人に仕へたいものだと思つた。そこで船長に自分はその婦人に喜んで仕へたいからオリヴィヤ姫に紹介して呉れる事は出来ないか尋ねたが、船長は、オリヴィヤ姫は兄の死後、自分の家へは誰一人——公爵さへも——入る事を許さないのだから、非常にむづかしいと答へたので、ヴァイオラはそこで他の計畫を案出した。男装して小姓となつてオアシノ公爵に仕へようと思つたのである。若い娘が男装して男に化けやうと思ふ事は一寸變な様ではあるが、ヴァイオラの様にならなくて大層美しい娘が、唯一人、寄る邊もなく、保護する人もない異境にゐた事を思へば、誰でもそれを尤もだと思ふであらう。

— 307 —
ヴァイオラは船長の立派な行動や、自分の身に就て親しく色々心配して呉れた事等から信用して、自分の計畫を打明けた所が、船長はすぐに力を借さうと賛成した。ヴァイオラは船長に金を渡

して、適當な着物を買ひにつれて行つて貰ひ、着物は兄のセバスチャンが常に着てゐたのと同じ色で同じ型に作る様に命じた。そして男の服を着た時には、兄にそっくり似てゐたので、互に間違へられて變な間違いが生じたのも無理でなかつた。その事は追々後に判るが、實はセバスチャンも無事に助かつてゐたからである。

ヴァイオラの親友である船長は、此の美しい娘を男に仕立てるに、宮廷と少し關係があつたのを幸ひ、セサリオの名を變へてオアシノ公爵の所へつれて行つた。公爵はこの美しい青年の言葉や、優雅な態度が非常に氣に入つて、ヴァイオラがなりたいた願つてゐた小姓の一人に、セサリオを取立てる事にした。所がセサリオは自分の新らしい役目を非常によく果たし、絶えず萬事によく氣を配り、忠實に公爵に仕へてゐたので、間もなく公爵の最も寵愛する侍臣となつた。公爵はセサリオに、自分のオリヴィヤに對する戀の一伍一什を物語つた。公爵は長い間求婚をしたが不成功であつた事や、その女が自分の長い間の好意をも拒絶し、自分の人格を輕蔑し、女に面會する事をさへ許さないで、公爵は自分をかくまで酷遇する女の事を色々と思ひ惱んで、今まであれ程好きであつた狩や、其他あらゆる男らしい運動を廢止し、柔かな音楽や、靜かな曲や、熱烈な變歌の女々しい音に聞き入つて、卑しむ可き懶惰の裡に日を送り、常に交際してゐた賢い學問のある貴族等と

の會合を廢し、今では終日この若いセサリオとばかり話をし續けてゐた。宮廷の嚴格な役人達は、嘗ては氣高い主君、オアシノ大公爵のお相手として、セサリオが不似合であるを考へてゐた事は勿論であつた。

若い娘が若くて美しい公爵の親友になると言ふ事は危険である。ヴァイオラもすぐその事に氣が付いて悲しんだ。公爵がヴァイオラに話すオリヴィヤに對する片戀を苦しんでをる物語はやがてヴァイオラが公爵に戀してゐる苦しみと同じであつた。誰もが大なる賞讃の辭なしには見る事の出來ぬ程、比稀れな公爵に對して何うしてオリビヤがこんななまでに冷淡にして居られるのかとヴァイオラは非常に不思議に思つた。それで勇氣を鼓してその事をオアシノに暗示する爲に公爵の様な立派な性質を見別ける事が出來ぬ様な婦人を愛すると言ふ事は實に氣の毒な事だと言ひ、

「若し或る婦人がそれは随分ありさうな事で御座いますが公爵、あなたを、丁度あなたがおリヴィヤ様を思つておいで遊ばす程に慕つて居るとしまして、若しあなたがその婦人をお好きなきいませんで、いやだとおつしやいましたなら、その婦人はこの返辭を満足して受けられるでせうか。」

然しオアシノは此の理屈をさへ受入れず、こんな女だつて自分が愛するに同じ様に愛して呉れる事は出來ないと言つて否定した。そして公爵は、何んな女だつて自分のオリヴィヤに對する愛程大

きな愛を心に抱く事は出来ないのだから、何の女の愛も自分のそれとは比較にならないと言つた。併しヴァイオラは公爵の意見には全く敬服してゐたけれども、此の説は全く眞實であるを考へる譯には行かなかつた。オアシノが持つていたと同じ程の大きな愛を自分も持つてゐるを考へてゐたからである。

「あゝ、公爵様、私が存じてをります。」

「お前が何を知つてゐるこいふんだ。セサリオ。」

「よく知り過ぎております。こんな戀を女は男に受けてをりますか。女とても、男に對する情愛に於ては何の異なる所もありません。私の父は娘を持つてをりました。そして彼女はある男を戀してをりました。若し私が女で御座いましたなら、ちやうどあんな風に御前様をお慕ひ申したで御座りませう。」

「其戀は、ごんな風だつたかね。」

「全くの初心でした。閣下。一言も口にはその戀を現はさないで、只蕾を食べる青虫のやうに、秘めごとが彼女の艶々した薔薇のやうに紅い頬を食べて行きました。彼女は物思ひに窶れ、蒼ざめて黄ばんだ沈鬱に耽りながら、「悲哀」を見つめて微笑んでをる「忍耐」の記念碑のやうに座つてを

ました。」

公爵はその妹が戀のために死んだのかを尋ねたが、ヴァイオラは言葉を濁した。多分彼女はオアシノを秘かに愛し、訴へられない胸の痛みを言ひ現はすために、作り話をしたからであつたらう。

二人が話し合つてゐた時に、公爵がオリビヤの所へ遣はした使者が歸つて來た。

「御前様に申し上げます。お姫さまにお目にかゝる事は出来ませんでした。お女中から承はりました御返事に依りますと、七年の年月が過ぎるまでは、大空にさへお顔をお見せなさるまいといふ御決心で、御外出の折は尼御さんの様にベエールをかけられ、又お居間は亡くなられたお兄様の悲しい思ひ出のために、涙を水のようにお流しになつております。」

これを聞いて公爵は叫んだ。

「おゝ、死んだ兄に對してさへそれ程情の深い、やさしい心を持つてゐる姫だ。彼女の心に黄金の箭が中つたら、何んなに自分を愛して呉れるだらう！」

と言つてからヴァイオラに言つた。

「セサリオ、わしはお前に何もかも胸の秘密を打明けた。だからオリビヤの家へ行つて呉れ、否應言はせず門口に突立つて、お目に掛かるまではかうして此處に足を生立つかせて一步も動かない

「言ひな。」

「で若しお目にかゝれましたら、何う致しませう。」

「お、其時には、どんなにわしの戀が熱烈であるかを語り、わしの切つない真心の一伍一什を打ち開けよ。わしの戀の代理を勤めるには、お前は適任だ。むつかしい顔付きの者よりはお前の方が姫の氣にすつこ入りさうだから。」

ヴァイオラは出て行つたけれど、此の求婚の役目を果たす事を嬉しいとは思はなかつた。自分が結婚し度いと思つてゐる人の妻になつて呉れと頼みに行くのであつたからである。然し一旦引受けた以上は、その役目を忠實に果たした。間もなくオリビヤは玄關に一人の青年が来て、自分に面會を強要してゐるの聞いた。召使はこう報告した。

「お嬢様は御病氣だと申しますと、その事は良く知つてゐますから御面談に來たのですと申します。お嬢様は寢ておいでだと申しますと、その事も前から知つてゐるから御面談に來たのだと申します。お許しが出やうが出まいがそんな事を關はないで這入つて來るかも知れませんが何う致したもので御座りませう。」

オリビヤはこの強情な使者が何んな男だか見たいと思つたので、通す様にと命じた。そして自分

の顔に覆面をかぶり、公爵が例の強請を言はすために遣はしたのに異ひないと思つてゐたので、又オアシノの傳言を聞かねばならぬのかと歎息した。ヴァイオラは出来る限り男らしい風を装ふて這入るとすぐ、高貴の人の小姓らしい立派な宮廷語を使つて、覆面の婦人に言つた。

「こよなうも麗はしく、いみじく、光り耀き給ふ美の君、さうかあなたが此家のお姫さまでいらつしやるかどうかをお告げ下さい。他人にお口上を述べたくありませんから、非常にうまく書かれた口上であつて、その上それを暗誦するのに随分苦しんだものですから。」

「何處から來たのです。」

「稽古して來たお口上以外の事は困ります。さう言ふ御質問は私の役目以外の事です。」

「お前さんは喜劇役者なの？」

「い、え、さうぢやありません。けれごも、唯今勤めてゐます役目通りの者でもありません。」

と言つて暗に自分が女であつて、男の風を装ふてゐるのである事を告げ、再びオリビヤに此家の主人であるかと尋ねると、オリビヤは然うだと答へた。ヴァイオラは主人の命令を急いで言ひ出すよりも、もつと自分の競争者の顔を見たいと思つたので言つた。

「お姫さま、お顔をお見せ下さい。」

此の勇敢な願ひに應ずる事をオリビヤはさ程嫌だとは思はなかつた。此の悪戯好きな美人は、オアシノ公爵があれ程長く愛していたのに報ひなかつたに、此の變装した小姓の賤しいセサリオを一目見た時から愛情を抱いたからである。

グアイオラが姫の顔を見たいと願つた時、オリヴィヤは言つた。

「わたしの顔と談判をせよと言ふ吩咐を主人から受けて來ましたか？」

「そう言ふと七年間顔を見せないと言ふ決心をも忘れて、自分のベールを取りのけながら言つた。

「では、幕をあけて繪を見せませう。よく出來てゐないでしよう。」

「全くよく調和のされた美しくしさです。頬の上の紅白は自然の手でなくてさう言ふ色彩は出來ません。若しこんな美しくいとお姿を、唯一つの寫しも世界にお遣し遊ばさんで、お墓へお納めになつてしまふ様です。あなたはこの上もない残酷なお方で御座いませうぞ。」

「お、どうして、あなた、私は決してそんな酷いことは致しません。私の美容目録を世界に残しませう。例へば、一つ、相應に赤い唇二箇、一つ、鼠色の眼二箇、但し眼蓋付き、一つ、頸一箇、一つ、頤一箇、其他いろいろ、と言ふ風にね。併し、お前さんはわたしを讃めるために使に來たのですか？」

「あ、わかりました。あなたはあんまり見え坊です。けれども、お美しい。私の主人の殿様はあなたを戀ひ焦れて居られます。お、あんな戀はあなたが美の女王の王冠をお冠りになつてをるにしても、報償し切れない位のもです。オアシノは拜まないばかりにあこがれて、涙は雨、唸き聲は雷、溜息は火の様です。」

「あなたの御主人は私の心をよく知られてをる筈です。わたしは何うしてもあの方を愛することには出來ません。併し徳のすぐれた、立派な、御所領も大きい、若々しい、缺點のないお方だと思つてゐます。世間の人は皆、寛大で、學問があり、勇氣があるを申します。けれども私はどうしても愛する事が出來ません。それはもうさうに御存じてありさうな筈です。」

「若し私が、主人のやうにあなたを戀してゐますなら、柳の枝で以て御門前に假小舎をこしらへまして、あなたの名を呼び立てます。オリビヤ様を歌ふ戀の切ない悲しみを小唄に作つて、眞夜中に歌ひ出します。四方の丘に向つてお名を反響させる様に呼んで、おしやべりの空氣を震動させて『オリビヤ』とわめかせます。お、此天地の間にお休みになる所がない様にします、可愛さうだと思つて下さらない限りは。」

「それぢや私負けさうになるわ。——お前さんは何う言ふ素姓の人？」

「今の自分よりは以上の者です。けれど今も今も結構です。紳士ですから。」
オリビヤは残り惜しげにヴァイオラを送り出しながら言った。

「御主人の所へ歸つて、あの方を愛する事は出来ませんが、もうお使は無用です。お言ひなさい。もつとも、此の返事をさうお受けになつたかを知らすために、お前さんが来るのなら格別ですが。ヴァイオラは、「美しい酷い」お方と呼んで挨拶をして去つた。ヴァイオラが行つてしまふと、オリビヤは小姓の言つた『今の身分よりは以上の者です。けれども今も今も結構です。紳士ですから』と言ふ言葉を繰返してから大聲で言つた。

「さうです勿論紳士です。口上さういひ、顔立ちさういひ、手足さういひ、立居振舞さういひ、氣立さういひ、さうしたつて立派な紳士です。」

そして、セサリオが公爵であれば、のにと望み、小姓が全く自分の愛憎を握つてしまつた事に氣付いて、自分の氣まぐれな戀を考へて我が身を責めた。然し人々が自分の過失に下す穩かな非難は大して深い根を持つてはならないものである。貴婦人のオリビヤも間もなく自分の財産さあの小姓の身代さの相違などを忘れてしまつたばかりでなく、婦人の性質の最も大切な飾りさもいふべき、娘らしい慎しみをもち忘れ、若いセサリオの愛を得ようさ決心した。召使に丁度オアシノから

の贈物を小姓が忘れて行つた様に見せかけて、セサリオの所へダイヤモンドの指輪を持たせてやつた。オリビヤはこんな風に巧く仕組んで指輪を與へる事によつて、自分の心を男に通じようさ願つたのである。そして實際ヴァイオラは指輪などを呉れた事を變に思つた。オアシノが指輪を贈つたのでない事はよく知つてゐたから。そこで色々さオリビヤが自分を褒める様な様子をしたり目付をした事などを思ひ出して、これはきつと主人の戀人が自分を見て戀に落ちたのださ思つて、言つた。

「まあ、お氣の毒なお嬢さん、夢を愛した方が餘程ましだわ。變装なぞしてゐるから悪いのだ。だからオリビヤ様が、私がオアシノ様に對してする様に、無駄な溜息をなさらなければならんだ。」

ヴァイオラはオアシノの宮殿に歸つて、公爵がもう二度さ自分を苦しめない様に言ふ、オリビヤの命令を繰返して、自分の交渉の失敗した事を告げた。所が公爵は未だ優しいセサリオならば、何時かは娘の同情を引き起す事が出来るだらうさ言ふ望を固持してゐて、次の日又も娘の所へ行く様にさ命じた。待つてゐる間の恐ろしく退屈な時間を消すために、自分の好みの歌を歌へさ命じた。

「おい、セサリオ、昨夕あの歌を聞いた時には、自分の感情が幾分かまぎらされた様に感じた。おいセサリオ聞いてろ、古い平凡な歌だ。日向ほつこをして、絲を紡いだり編物をしたりする者や骨の針で物を編んだりする若い田舎娘の歌ふ歌だ。たわいもないが、予は好きだ。昔の無邪氣な戀

の眞實を歌つてあるから。」

歌。

來をれ、最期よ、來をるなら來をれ、
 杉の柩ひつぎに埋めてくりやれ。
 絶えよ、此息、絶えるなら絶えろ、
 凄美ウツクシいあの子に殺されまする。
 縫うてたもれよ白かたびらを、
 縫ひ日くくに水松みづまつを挿して。
 又さあるまいこの思おもひ死じ！

花を撒くなよ、うつくし花を、
 わしの柩にや只黒布を。
 だれも死骸に物いうてくれな、

骨を埋める其きわこても。

やくに立たない溜息吐息、

させぬ其ため、眞の戀人の

知らぬ處へ埋めてたもれ！

ヴァイオラは、此の眞に卒直に報はれない戀の苦惱を言ひ表はした、古い歌の文句を聞き流しにする事は出来なかつた。そして歌に讀まれてゐる感情をそのまゝ、顔に表はしてゐた。オアシノは小姓の悲しげな顔付を見て言つた。

「自分の生命はこれに共鳴してをる。セサリオ、お前は未だ若いけれど、きつこ、誰か可愛いと
 思つた人があつたらんだらう？」

「はい、少しございます。」

「ごんな風の女だ、そして齡は幾つだ。」

「御前と同じ位の年で、顔も御前によく似て居ります。」

公爵は此の美しくしい若者が自分の様な年上の女を愛し、男の様に色の黒い女を愛してゐるを聞い

て、變に思つて笑つた。然しヴァイオラは暗にオアシノの事を意味してゐたので、公爵に似た女の事を言つてゐるのではなかつた。

ヴァイオラが二度目にオリビヤを訪問した時には、面會するのに大した面倒はいらなかつた。召使は主人が此の美しくして若い使者と話すのを喜んでゐる事を知つてゐたので、ヴァイオラが到着するさうすぐ門は大きく開かれて、公爵の小姓は非常に丁寧にオリビヤの居間へと通された。ヴァイオラがまた公爵の代理として歎願するために來た事を告げた時、姫は言つた。

「わたしはもうあの方の事なぞ聞き度くはありません。けれども他の人のために言ふのならば、わたし天體の音楽を聞く以上に喜んで聴きませう。」

この言葉でも既に随分あからさまであるのに、オリビヤは間もなくもつと露骨に言つて、自分の戀を打明けた。そしてヴァイオラの顔に困つた様な不愉快な色が現れたのを見て言つた。

「戀人がいふのだよ嘲弄も美しく見え、輕蔑して怒つた唇も可愛らしく見える。セサリオさん春の薔薇の花よ、處女の操よ、眞實さを掛けて、私はあなたが好きです。あなたの高慢は知りぬいてゐても、智慧も分別も私の感情をよう隠しきりません。」

然し姫がいくらかきくさいでも駄目であつた。ヴァイオラは、もう二度オアシノの戀を訴へに

來ないで嚇しながら急いで姫の前を立ち去つた。そして、オリビヤの切ない願ひに對する唯一つの答は、自分は「決して女を戀せない」と言ふ決心を宣言しただけであつた。

ヴァイオラが姫の家を出るや否や、その勇氣を試す大變な事が起つた。オリビヤにはねつけられた戀人の一人が、公爵の小姓が非常に姫から寵愛されてゐる事を知つて、決闘を申込んだのである。哀れなヴァイオラは、男の風はしてゐるが、本當の女の優しい心を持つてゐたので、自分の劍を見てさへ怖ろしいと思ふ程であつた。そんなヴァイオラがこんな事をなし得やう。

ヴァイオラは怖ろしい競争者が劍を抜いて向つて來るのを見た時、自分が女である事を白狀してしまはうかとも考へ始めたが、然し怖れはすぐに消え去つて、そんな白狀をする恥をも逃れる事が出來た。通りがりの一人の見知らぬ男が、ヴァイオラを長い間知つていて、親しい友達でもある様に、二人の仲裁にはゐつて、敵手の者に言つた。

「若し此若い紳士が何か不都合をしたのですなら、その罪はわたしが引受けます。或は又あなたが不都合をしたのなら、わたしが彼れに代つてあなたを立合ひませう。」

ヴァイオラが彼の保護を感謝したり、又こんな親切な仲裁をして呉れる理由を尋ねるひまも無く此の新らしい友達は一人の敵に出會つた。その場合、勇氣を以て争ふ事も出來なかつた。丁度その

時巡査がやつて来て、數年前に犯した罪に依つて公爵の命令で捕縛に來たからであつた。それでその男はヴァイオラに、

「あなたを探しに出た爲にこんな事になつた。」と言ひながら財布を下さいと頼んだ。

「こゝういふ窮迫の際だから先刻上げた私の財布を返して下さい。あなたの爲に盡すことが出来なくなつたのを身に災厄の降りかゝつた事よりもつゞ情なく思つてをります。ひどく驚いておいで

のやうですがさうぞ御心配なさいますな。」

彼の言葉は實際ヴァイオラを非常に驚かした。そして今迄に見た事もなければ、又財布など貰つた覺悟もないと言つたが、今自分に親切を盡して呉れたお禮として、自分の持つてゐた少しばかりではあるが殆んど全部の金額を與へた。所が此の見知らぬ男は、恩知らずだとか不親切だとか言つて、ヴァイオラを罵り出した。

「こゝにゐる此若者をわしが死の爪から助けた上に、この男のためにわざ／＼イリリヤ國へ來てこんな災難に出會つたのです。」

然し巡査達は罪人のそんな口實に少しも耳を傾けようとはせず、「そんな事はこつちの知つた事ぢやない」と言つて急いでつれて行かうとした。所が引かれて行く時見知らぬ男はヴァイオラをセ

バスチャンといふ名で呼んで、セバスチャンが友達を裏切つた事を、聲が聞える間責め續けてゐた。ヴァイオラは自分をセバスチャンと呼ぶのを聞いた時、あまり急に、見知らぬ人がつれて行かれてしまつたのでその説明を聞く事は出来なかつたけれど、此の外見上不思議な事は、自分が兄と間違へられた事から起つたのだと推測した。そしてあの男が命を救つてやつたと言つたのは自分の兄だらうといふ希望を抱き初めた。そして實際その通りであつた。此の見知らぬ男はアントニオといふ船長であつた。その船長がセバスチャンが嵐の中で自分を縛りつけたマスト檣に乗つたまゝ、疲れのために殆んど失心して浪間に漂よふてゐた時、自分の船に助け上げた。アントニオはセバスチャンに對して深い友情を持つて、何處へでも一緒に行つてやらうと決心した。それでセバスチャンがオアシノの宮殿を訪れたいと言ふ好奇心を現はした時にも、アントニオは、一度海戦に於てオアシノ公爵の従弟に大變な傷を負はせた事があつたので、若し自分が此の國に居る事が判れば命が危いと言ふ事をよく知つてはゐるが、セバスチャンと別れるのを好まないでイリリヤ國へ來たのであつた。此の料で船長は遂に捕はれたのである。

アントニオはセバスチャンとはアントニオがヴァイオラに出會つた僅か一時間ばかり前に上陸したのであつた。アントニオはセバスチャンに何か買ひ度いものがあつたならお買ひなさいと言つ

て、財布を渡し、セバスチャンが街を見物してゐる間宿屋に待つてゐるに告げて置いた。所がセバスチャンは約束の時間に歸つて來なかつたので、アントニオは亂棒にも、セバスチャンを探しに出たのであつたが、ヴァイオラが兄と同じ風をして居り、顔も非常によく似てゐたので、自分が助けた若者だと思つてそれを援助するために劍をさへ抜いたのであつた。所がそのセバスチャンは（彼はさう思つてゐた）アントニオの財布の事など知らないと言つたので、船長が思知らずだと罵つたのも無理のない事である。

ヴァイオラはアントニオが行つてしまつた後、また決闘を促される事を怖れて、出来る限り早く家へ逃げて歸つた。ヴァイオラが逃げて行つた間もなく、敵手の男はヴァイオラがまた歸つて來たと思つた。然しそれは丁度その場所へ來合せた兄のセバスチャンであつた。がその敵手は、

「うぬれ、また來おつたな、これをやるぞ！」

と言つて横面をはつた。セバスチャンは元より臆病者でないから二つ三つ利子をつけて横面を張り返して劍を抜いた。

其時家から出て來たオリビヤが二人の決闘を止めた、姫も亦セバスチャンをセサリオと間違へて大變な亂棒な男に出會つた事を色々と同情をして、家へ來る様に誘つた。セバスチャンは顔を見

た事もない敵にあつたと同じやうに、此の婦人の厚い深切にも驚いたが、喜んで家に這入つた。オリビヤも、セサリオ（だと思つてゐた）が前よりも自分の愛情に對して注意深くなつたのを見て喜んだ。顔には全く變りはなかつたが、前にセサリオに戀を打明けた時の様な輕蔑や怒りは少しも顔に現れてはゐなかつた。

セバスチャンは婦人が自分に浴せかける寵愛を少しも拒絶せなかつたのみならず、それを快よく受けてゐる様に見えたけれど、何が何だか不思議でならず、オリビヤは正氣でやつてゐるのかさうかを考へ勝ちであつた。然し見掛けた所立派な家の主婦であり、自分の用事等を言ひ付けてゐる所を見れば此の家を思慮深く支配してゐるらしく、自分に對する急激な戀を除けば立派に理性も具はつてゐるやうだと思はれたので、セバスチャンはこの求婚を非常に満足に思つた。オリビヤの方ではまたセサリオがこんな上機嫌でゐるのを見て、氣が變つたりしては大變だと思ひ、自分の家に牧師が居るのを幸、直ぐに結婚して呉れる様に申出た。セバスチャンもこれに賛成した。二人の結婚式が済んで後セバスチャンは自分の友達に自分が出會つたこの幸福を告げるために、しばし婦人を殘して出て行つた。其處へ間もなくオアシノがオリビヤを訪問にやつて來た。そして丁度オリビヤの家の前へ來た時、巡查達が罪人のアントニオを公爵の前へつれて來た。ヴァイオラは主人であ

る公爵の側に待つてゐた。アントニオがヴァイオラを見た時、まだセバスチャンだと思ひ込んでゐたので、公爵に自分が此の若者を海で死にかゝつてゐるのを救つた時の有様から、その後自分がセバスチャンに對して盡した親切な姿を凡て詳しく物語つてから、三ヶ月の間、日も夜も此の恩知らずの若者と一緒にあつたのだと不平を言つた。然し其の時オリビヤが家から出て來たので、公爵はも早やアントニオの言葉を聞いてゐる事は出来なくなつて言つた。

「あゝ、姫さんが見えた。あゝ、天女が天降つたんだ！ いや、お前のいふことは狂人同様の。此少年はわしに三ヶ月も仕へておつた。」

そしてアントニオを脇へ連れて行けし命じた。然しオアシノの天上の姫は、オアシノをして、アントニオがしたと同じ様に、セサリオの恩知らずを罵らねばならぬ様にさせてしまつた。オリビヤの言ふ言葉は凡てセサリオに對する親切の言葉であつたからである。公爵は自分の小姓がオリビヤからこんなに厚い寵愛を受けてゐる事を知つて、その復讐してあらゆる怖ろしい罰をしようと思ひ付けた。宮殿へ歸らうとした時にヴァイオラについて來いし命じた。

「おい、少年一緒にこい、予はいゝ悪戯を思ひついた。」

それは勿論嫉妬の狂暴さの餘りヴァイオラを即座に死刑に處さうと思つたのであつたが、ヴァイ

オラの愛はその心を勇敢にした。そして主人に安心を與へるためには喜んで死をさへ受けようと言つた。然しオリビヤはそんな事で自分の夫を逃がさなかつた。

「私のセサリオさん、何處へ行きます。」

「私の命よりもつゝ戀しい方について行きます。」

けれどもオリビヤは、大聲でセサリオは自分の夫ださわめき立て、二人が去らうとするのを引き留めて、牧師を呼びにやつた、その牧師は此の若者と姫との結婚式を行つてから二時間と経たないで公言した。ヴァイオラが如何に姫との結婚を否定しても無駄であつた。姫と牧師との證據によつてオアシノも、自分の小姓が命よりも大切な寶を盗み取つたのだと信じた。然し過ぎ去つた事は仕方がないので、公爵は眞實のない戀人に別れを告げ、その夫と言ふ「若い白らばつくれ」に二度と自分の眼の前に現はれるなと嚇して去らうとした時、一つの奇蹟が（皆にはさうだと思はれた）現れた。今一人のセサリオがやつて來てオリビヤを自分の妻として呼びかけた。此の新らしいセサリオこそオリビヤの本當の夫であるセバスチャンであつた。同じ顔と同じ聲と同じ着物と盡く揃つた人間を同時に二人見ると言ふ驚きからやつと皆が平靜に復した時、兄と妹とはお互の事を色々尋ね始めた。ヴァイオラは自分の兄が未だ生きてゐるとは仲々信じなかつたし、セバスチャンも亦溺

れたものと思つてゐた妹が男の風をして生きてゐるやうさは夢にも思はなかつたからである。然しヴァイオラは直ぐに、自分は妹の本當のヴァイオラで、今は變装をしてゐるのだと白狀した。

此の双子の兄妹があまりに良く似てゐる所から起つた凡ての間違ひがすつかり判つた時、皆はオリビヤが女に戀に落ちたと言ふ愉快な間違ひに腹をかへて笑つたが、オリビヤは自分が妹でなく兄に結婚をした事を知つても、此の間違ひを少しも嫌だとは思はなかつた。オリビヤが結婚してしまつたので、オアシノの希望は永久に失はれた。そしてその希望と共に、無駄であつた公爵の戀も消え去つた様に思はれた。併し公爵の考へは自分の愛してゐた若いセサリオが美しい婦人に變つたと言ふ事等に集まつた。公爵は今更らにヴァイオラを非常な注意を以て見た。そして今迄もセサリオを大層美しくと思つてゐた事を思ひ出して、女の服をつけたら何んなに美しいだらうと思つた。その上またセサリオは常に「自分を愛する」と言つてゐた事をも思ひ出した。その時は只の忠實な小姓としての義務からだと思つてゐたが、今になつて見ると何かもつと意味がありさうに思はれた。其他今迄は謎の様にしか思はれなかつた美しい言葉なごも、思ひ當る所があつた。公爵はこんな事に氣が付くこゝ、立ち處にヴァイオラを自分の妻にしようと思つた。そして言つた。
(公爵はまだセサリオを少年とか呼ぶ事を急にはやめられなかつた。)

「おい、少年お前は幾たびもくわしに向つて、わしをどんな女よりもなつかしく思ふと言つたね。お前が今迄其やさしい柔和な育ちにも似合はぬ程忠實に勤めて呉れた其報ひとして、又長い間主人として仕へてくれた功によつて、今からは主人の戀人となり、オアシノの本當の公爵夫人になるのだ。」

オリビヤは自分があんなに冷淡にはねつけたオアシノ公爵が、ヴァイオラの心を得たのを見て、自分の家に這入りなさいと誘ひ、今朝セバスチャンと結婚させて呉れた良い牧師の助けに依つて、今日の夕方に同じ様に、オアシノとヴァイオラの結婚式を擧げる事にした。それで双兒の兄妹はまた同じ日に結婚式を擧げる事になつた。二人を離れ離れにしてしまつた嵐に難船ミが、二人に立派な大きな幸運をもたらす事になつた。かくしてヴァイオラはイリリアの公爵オアシノの妻となりセバスチャンは金持で高貴な伯爵令嬢オリビヤの夫となつたのである。

アゼンスのタイモン

アゼンスの大守タイモンは、王侯らしい物好きから、他人に物を惠與する事を非常に好んで、その止む所を知らなかつた。殆んど無盡藏とも言ふ可き財産はさう容易には無くならなかつたが、公

爵は色々な種類の人々や色々な階級の人々に無暗矢鱈に自分の財寶を與へた。貧しい者共がその恩恵に浴したばかりでなく、偉い貴族達も公爵の食客となり従者に列するのを不名譽とは思はなかつた。食卓にはあらゆる贅澤な御馳走が常に具へられ、その家はアゼンスの町を往來するあらゆる人々に自由に開放されてゐた。公爵の豊富な財産とその自由な贅澤な性質が合して、凡ての人々をして公爵の愛に従はしめた。様々な心や様々な性質の人々がタイモン公爵のために盡し、自分の顔へ丁度鏡の様に公爵の氣分を次々と寫し出す、ガラスの様な顔をした詔者も來れば、人間の性質と言ふものを輕蔑し、俗世の物事に無關心である様な風を装ふてゐる、粗暴で頑固な皮肉屋も、タイモン公爵の仁慈なる態度と寛祐な心で反抗する事が出來ず、遂に（自分の本質に抗つて）公爵の饗宴に列し、若しタイモン公爵から禮の一つ、挨拶の一つも受けたならば非常な名譽と思つて歸つて行つた。

若し詩人が詩を作つてそれに世間に對して推薦の序文でも必要な時には、唯その詩をタイモン公に獻書すればよかつたので、さうすればその詩は賣れるばかりでなく、公爵からは金を無理に贈られ日々公爵邸に出入して食事にあづかる事が出來た。若し畫家が賣りたい繪があつた時には、唯タイモン公の所へ持つて行つて都合の良い様に自分の趣味を説けば、此の心の廣い公爵に繪を買はす

のは何でもなかつた。若し寶石屋が、價が高すぎて賣れない寶石とか貴重な小間物なきがある時には、タイモン公の家は常に開かれてゐる市場の様なもので、そこへさへ持つて行けば何んなに高價でも、寶石と言はず小間物と言はず皆買つて貰へたものである。其上人の良い公爵は商人達がそんなに貴重な品物を自分に得させるために盡力して呉れたかの様に、安く賣つて呉れたと禮を言ふのが常であつた。此んな譯であるから公爵の家は、ぎごちない見得を張る傲奢な物や unnecessary 品物や無駄な買物で満たされ、公爵自身ものらくら者の訪問客や、嘘つきの詩人や、畫家や、騙り者の商人や、貴族や、貴婦人達や、貧しい廷臣達や、期待者達に取まかれて困惑してゐた。これ等の訪問者は絶へず控室に集まつてゐて、公爵を神様か何ぞの様に自分の身を捧げる追従を言ひ、公爵が馬に乗るその鐙をさへ神聖視し、自由勝手に吸へる空氣をさへ公爵の許しと慈けとに依つて吸へるかの様に、公爵の耳に嘘八百の詔ひを雨の様に降り囁いた。

公爵の家に常に食客になつてゐる者達の中には貴い生れの若者もゐた。彼等は（身分不相應な贅澤をするため借金をして）債權者から監獄に投ぜられたのであるが、タイモン公から救ひ出してもらつたのである。こゝにいふ若い放蕩者達は、その後公爵にすがり付いて離れず、公爵も亦此等の懶惰者や浪費者を同じ様な同情からさうしても養つてやらねばならぬかの様に見えた。こゝにいふ若者

達は、自分の財産では公爵の様な真似は出来ないで、佳い氣になつて自分のものでない金で放蕩や浪費の真似をしてゐた。こんなうるさい人間の蠅共の一人に、ベンチダイヤモンドいふ不義に契約した金が拂へないで、最近タイモンから五タレントの金を拂つて貰つた男がゐた。

然し此の會衆、この大洪水のような訪問者達の中で、特に衆目を惹くのは贈物したり進物をする人々であつた。で、若し自分の犬だとか、馬だとか、または安物の飾身具だとか何でも自分の持物が、タイモンの御氣に召したとあれば身に餘る幸福であるとしてをつた。公爵から褒められさへすれば何んなものでも、次の日にはきつと、献上する程の物でないと云ふ申譯の様なお世辭をして、タイモン公に献上するに決つてゐた。そして此の犬か馬とかその贈物が何んな物であつても、タイモン公から返禮を受けないと言ふ事はなく、それも贈物より以下である事はない。恐らくは犬の二十四分や、馬の二十頭分とか、或は贈物よりもつと價値の多い物を返禮に貰ふのであつた。この事を良く知つてゐる悪賢い者達は、下らない贈物をして元金は元より、手つとり早い利子をも取出さうとした者さへあつた。こんな譯で最近ルシアス卿は、何時かは公爵の讃辭を賜るだらうと言ふ腹で、銀の馬具をつけた四頭の純白の馬をタイモンに贈つた。又他の貴族ルキュラスも同じ様な辨つた方法で、公爵が恰好がよくてよく走ると褒めたと言ふ鼠色の獵犬の一對を贈り物にした。人

の良い公爵は寄贈者の魂膽のある事などは少しも疑はないでそれを受け、そしてその禮として大變高價なダイヤモンドとか、或は寶石の様な、彼等の不正直な慾得づくの贈物の二十倍も價値のある品物を贈つた。

時には此の臣達はもつと露骨な方法で、下品なそして見えすいた策略でやる事があつたが、信じ易いタイモンはそれをも見破る事が出来なかつた。それで臣達はタイモンが持つてゐる物さか、安く買つた物さか、最近買入れた物とかを、常に褒めそやすのである。するに、温厚な氣の優しい公爵はその褒めた物を直ぐやるのであつた。それに相當する事をしたのではないが、唯少しばかり馬鹿々々しい見えすいた詔ひをしたといふだけのために。此んな方法でつい近頃、一人の賤しい貴族が公爵の常用の栗毛の馬を貰つた事があつた。その貴族はその姿が美しく、よく走ると稱讚したからである。公爵は持ちたいと願ふ程の物は、きつと唯かが口を極めて褒めるのであると考へてをつた。タイモン公は家臣達の愛情を自分の好き嫌ひによつて定めたばかりでなく、物を與へる事を大變好んでゐたので、自分の王國をさへ此等の偽友達に、何の惜し氣もなく分ち與へる事さへ出来たであらう。

タイモンのあらゆる財産がかゝる心によこしまな追従者を富ますために浪費されなかつたならば

何んなにか尊い賞讃すべき事蹟をしたであらう。嘗て召使であつた男は金持のアゼンス人の娘を戀した事があつた時も、娘の富や地位が男よりもすつと高かつたので結婚する望がなかつたのを公爵が聞いて、即座にその娘の父親が娘の夫となる可き男に要求する持參金として、召使に三タレンツをやつた事があつた。然し大部分は横着者や食客が公爵の財産を掌握してゐたが、公爵は皆が自分の廻りに集つて來るのを見て、自分を愛せずには居られないのだらうと考へて、臣達がそんな邪な心を持つてゐる事を少しも知らなかつたし、又自分に微笑を送り諂ひを言ふので、實際自分の行ひが皆から賢くて且つ佳いと思はれてゐるのだと思つてゐた。その上此等の追従者や偽りの友達の眞中に座つて御馳走を食つてゐる時も、自分の財産を食ひ盡し、又自分の健康を繁榮を祝して高價な酒の大盃を傾けて、自分の富を喰ひ盡されてゐる時にさへ、公爵の欺かれた眼には（贅澤を見なれて高慢になつてゐるので）友達と追従者との區別が付かないで、そんなに多くの者が兄弟の様にお互の幸福を祝し合ふのを見て、（皆その費用を自分で拂ふ事など忘れて）大層満足に思つた。そして皆の者は、公爵には、本當に楽しい友愛に満ちた會合であると見せかける爲に、楽しさうにはしやぐのが當であつた。

公爵がこんなに親切を通り越して、無暗に人に物を與へて、まるで黄金の神ブルータスが自分の家令でもあるかの様に振舞つてゐる間に、又何の心配も懸念もなしに少しも浪費を止めやうともせず、又そして財産を支持して行かうと云ふか、或は自分の亂蕩を止めようと思へ程、費用の事など無感覺である間に、公爵の財産は、勿論無盡藏と言ふ筈はないので、限りの無い亂蕩の前には自然となくなつて行くのは當然であつた。然し誰がその事を公爵に告げるだらう？ 追従者が？ いや彼等はそれを知らせない事のみを願つてゐた。正直な家令のフレビウスがその窮狀を知らせやうと思つて、勅定書を公爵の前に示し、懇願し、歎願し、外の場合ならば召使としては無禮に涉る様な程うるさく、涙を流して此の窮狀を省みる様に願つたのであるが凡ては無駄であつた。タイモンは甘く言ひ脱れて話頭を他の事に轉じた。金持から貧乏になつた者に諫言をする程無役な事はなく決して自分の逆境を信ぜようとしな、又自分の本當の状態を信用しないし、又仲々自分の運の逆轉した事を認めやうとしない。此の善良な家令、正直な男は、タイモンの廣大な家が、主人の費用で飲み騒ぐ人達で一ぱいに詰まつてをり、床は酒の飲みこほして濡れ、どの室もぎの室も華かな燈で輝き、音楽や饗宴の騒ぎで鳴り響いてゐる時、しばし自分獨り物靜かな場所に退いて、主人の狂ひじみた興宴を見るにつけ、又あらゆる階級の人々が公爵にそんなに諂うてゐる原因の財産がなくなれば、あんなに諂從を言つてゐる者の口からその言葉が何んなに早く消れてしまふだらうと云ふか、

お祭騒ぎで得た賞讃はそれがなくなれば直ぐに消ひてしまふだらうとか、或は冬の豪雨を降らす雲が一度やつて来ればこんな蠅共は一度に四散してしまふだらうなごと考へるにつけ、家令の流す悲歎の涙は、宴會に浪費される酒の溢れより繁かつた。

然し今やタイモンは最早や此の忠實な家令の提議に耳を閉ぢてゐる事が出来ない時が来た。金がさうしても入用になつて来たので、公爵はフレビウスに自分の領地の一部分を賣れと命じた。所がフレビウスは今迄に何度も何度も公爵に聞いて貰はうと思つて努力しても無駄であつたが、公爵の領地は殆んど賣られたり或は抵當にはゐつてゐて、今公爵の所有してゐる物全部でも、借金の半分も拂へないと告げた。此の事を聞いてタイモンはびつくりしながら急いで言つた。

「予の領地はアゼンスからラケデモンに廣がつてゐるぢやないか。」

「お前様、世界と言ひましても世界ですから、限りが御座います。それが盡くあなた様の物で御座いまして息をつぐ間に與へる事が出来るとしましても、まあ何と早く無くなつたんでせう！」

タイモンは自分は悪い施物をした事は決して無いし、若し自分が財産を浪費したにしても、自分の悪習を満足させる爲めに費つたのでなくて、友達を繁榮させるために費つたのであつたなど自ら慰めて、親切な心根の家令に（その時は泣いてゐた）自分は立派な友達が澤山ある内は決して

食ふに困る様な事はないからそれを信じて安心する様に命じた。そして此の氣拔けのした公爵は此んな窮乏の時であるから、人を使はして皆の（公爵の宴會によばれた事のある人々）の金を借り自分の財産と同様に自由になくなるまで、使はうと使者を出すより外には決心がなかつた。そこそこあたかもその試みに自信があるかの様に嬉しさうな顔をして、公爵は數人の使者をルシアス卿やキユラス卿やセンプロニウス卿等、これまでに無暗矢鱈に贈物を與へた人々の所へ急派した。その上最近借金を拂つて監獄から救ひ出してやつたが、今では父親が死んだために莫大な財産を相続したので、タイモンの恩顧に充分報償する事の出来るベンチデイウスの所へ、自分が前に拂つてやつた五タレンツの金を返して呉れる様に頼んでやつた。そしてこの立派な貴族達には各々五十タレンツの金を貸して呉れる様に頼んだのであるが、皆の者は公爵の恩を思つて（若し欲しいとさへ言へば）五十タレンツの五百倍の金でもすぐに貸して呉れるだらうと公爵は少しも疑つてはゐなかつた。

先づ最初に使者が訪れたのはルキュラスの家であつた。此の賤しい貴族は昨晚銀の盆と盃との夢を見てゐたので、タイモンから使者が来たと聞いて、此の慾深い心はこれはきつと夢が本當になつて、タイモンがそんな贈物を呉れるのではないかと思つてゐた。然し事件の真相を知り、タイモン

が金の入用なのを聞いた時、薄情な冷淡な友情の本性を表はして、使者に色々な口實を設けて、實はずつと前から公爵の窮乏される事は豫知してゐたので、幾度もその事を告げようと思つて正餐に列席し、又餘り浪費するなと諫めるために夕食にも出たのだが、何時行つても忠告も諫言も聞き入れなかつた譯である。常にそんな目的のために公爵邸に出入してゐたのは確かであるが、タイモンを諫めもし、非難もしようと言ふ良い意志で來てゐた等といふ事は眞赤な嘘であつた。その舌の根の乾かないうちに下賤にも使者に賄賂を使つて家に歸つたら主人に、ルキュラスは不在でしたと告げる様に頼んだ。

ルシアス卿の所へ遣された使者も同様に成功しなかつた。タイモンの御馳走を食ひ盡し、タイモンから貰つた高價な贈物のために殆んどはち切れさうな程富んでゐた。此の嘘つきの貴族は、風向きが變つて、あの様な恩惠の泉が急に止まつてしまつた事聞いた時、初めはそれを殆んど信ずる事が出来なかつた。然しそれが確かだと判るに、早速（そんな事は眞赤な嘘なんだが）不幸にも昨日莫大な買物をしたため、當分はどうしても公爵を助ける事が出来ない程になつたので、タイモン公に微力を盡す事の出来ないのを非常に遺憾に思ふ事出鱈目を言つた。その上自分で、自分があの様に温厚な友達を助ける事が出来ない様にしてしまつたとは獸にも劣るとか、斯くも尊敬すべき紳士

を樂にするだけの能力が自分に無い事を心から残念に思ふなと云つた。

同じ皿の物をつゝき合つたから云つて其の人をすぐに友達だとは何うして言へやう。追従者も皆この類である。誰でもタイモンが此のルシアスに父親の様に盡して自分の金で債務を拂つたりしてやつた事を記憶してゐた。タイモンの金が、召使の給料を拂つたり、ルシアスの高慢から何うしても建てなければならなかつた立派な家を建てるために、働いた労働者達に賃金をやつたりした爲め、なくなつてしまつて困つてゐるのに、お、思知らずの人間は何と言ふ獸の様な心になるのだらう！此のルシアスは自分がタイモンからうんと貰つて置きながら、タイモンに一文だつて貸さうとはせなかつた。どんな無慈悲な人でも一文位は乞食にさへ呉れてやるのに。

セムプロニウスを始めタイモンが援助を乞ふた、慾得づくの貴族達は、同じ様な言ひ遁れの挨拶や又は率直な斷りの返答をした。ベンチデイウス——、あの公爵の爲に救はれて、今は金持になつてゐるベンチデイウスさへも、自分が困却の節にはタイモンから借りたのでなく、寛大にも只、貰つたその五タレントを貸して公爵を救はうとさへせなかつた。

タイモンは今や、以前金持であつた時には詔ひや媚びる者共を避ける事が出来なかつたと同じ様に、身に振りかゝる貧乏を避ける事は出来なかつた。今迄公爵を寛大で公平で宏量だ等と大げさに

褒めそやしてゐた連中は、今はもう、その饗宴を愚行だと罵り、その寛大を餘計な事だと嘲ふ事を少しも恥とは思はなかつた。實際そんな下らない者共を集めて宴會をやつたと言ふ事は明かに愚かな行だと言はれても仕方がなかつた。今やタイモンの廣大な邸宅は淋れ、厭府となつて、前の様に凡ての通行人が止まつて公爵の酒をのみ乾盃を上げる所ではなく、皆が行き過ぎてしまふ所になつた。又以前の様に饗宴や騒々しい客が群がつて来る代りに、短氣な喧しい債權者、高利貸、強請者達が證文をつきつけたり、利息ミが抵當ミかを強請したりして、烈しいのつびきならぬ矢の様な請求をし、此の鐵の様な冷い心の者達は斷つても、延期せよと言つても少しも聞かない爲めに、公爵の家は全く監獄も同じ様なもので、そこから脱れる事も出来ねば、又出入する事さへも出来なかつた。或者は五十タレンツの負債を請求し、或者は五千クラウンの勘定書を持つて來た。で若し公爵が自分の血を一滴づつ、勘定して、それで拂つたとしても、自分の身體全體の血を以ても償ふ事は出来なかつたであらう。

公爵は此の絶望的な回復の見込なき性態（と思はれてゐた）に陥つてゐながら、落ちて行く太陽が新らしい信ぜられぬ様な光を發した様に、不意に人々を驚かした。タイモン公がもう一度宴會をやると言ひ出して、その宴會に以前の通りの客人や貴族や貴婦人達、又アゼンスで名のある一流の

人々を見て招待した。ルシアス卿、ルキユラス卿、ベンチデイウス、セムプロニウス其他も皆招かれた。此等の媚び諂ふ佞臣共が、タイモンの貧乏といふのが凡て作り事であつて（と思つてゐた）自分達の愛情を試すためにやつた作り事だぞ知つた時、あの時この計畫を見破る事が出来ず、公爵の恩義に對して薄い信用をししか得て置かなかつた事を此上もなく悲しんだ者は誰か。そして自分達ももう凋れたと思つてゐた高貴な宴樂の泉が、また新しく湧き出した事を知つた時の喜びも比べるものが無い程であつた。皆はしらを切つたり、言ひ譯をしたり、公爵が金を借りに來た時、不幸にも尊敬すべき友達に盡すだけの金が差當り無かつた等ミ、深酷な悲しみや恥辱を現はしたりなどした。然しタイモンはそんな些細な事に頭を煩はすなと言ひ自分はそんな事はすつかり忘れてゐたと言つた。そして此等の媚び諂らう貴族達は公爵が不運な時には金を與へる事を拒んで置きながら、又新しく盛んに返り出した時には、出席を拒むことをようしなかつた。こんな性質の者達が偉い人の幸運を逐ひ求めるのは、燕が夏を追ふよりも好きで、又少しでも逆境が見えて來ると、燕が冬を嫌ふよりも速かに去つて行つた。此等の男はまるで燕の様な夏鳥であつた。然し先づ音楽ミ儀式ミで宴會が始まり湯氣の立つ皿が皆の前に並べられた。そして客が破産したタイモンが、何處から此んな高價な立派な御馳走をする金を得たのであらうと少なからず驚き、或者は自分の眼をさへ疑つてこれ

は夢ではないかなどと思つてゐた時、合圖が與へられて皿の蓋ひが取られると、タイモンの越向が現はれた。皆が色々な山海の珍味が出るだらうと豫期してゐたのに反して、今迄美食を以て知られてゐたタイモンの食卓の上に置かれた皿の中に今現はれたのは、貧乏なタイモンには似合はしい御馳走で、唯の湯氣となまぬるい水とばかりであつた。斯んな湯氣の様な心といへばなまぬるくて、水の様に變り易い、口計りの友達の群に對しては佳い御馳走であつた。そしてタイモンはあつけに取られてゐる客に挨拶をして、

「犬共、小犬共、お上がり下さい。」

と言ふが早いか、皆が驚いて茫然としてゐる間に皆の顔に水を打つかけ、もつこ食はしてやらうとばかり、貴族や貴婦人達がとても狼狽して帽子をつかんだりして押合ながら逃げ出すあとから、皿や何かを放り投じた。タイモンは尙後を追つて悪口を浴びせかけた。

「穏かな笑顔をした食客共、禮儀の假面をかぶつた破壊者共、愛想のよい狼奴、温順な熊奴、金に目の眩んだ馬鹿共、蠅野郎共。」

皆は公爵から逃れるために這入つて來た時よりももつこ大急ぎで、或者は外套や帽子を忘れ、或者は餘り急いで寶石を落しながら、皆こんな氣の狂つた公爵の前から逃れ、此の馬鹿にした宴會の

嘲弄から逃れようとして込合ひながら出て行つた。

タイモンの宴會はこれが最後であつた。そしてその時にアゼンスとその社會の人々に別れを告げたのである。それが終ると公爵はこの嫌な町や、又凡ての人類に脊を向けて、森の中へ隠遁した。此の憎む可き城壁が沈んでしまひ、家屋は皆持主の頭の上に崩れ落ち、又人類を惱すあらゆる疫病や、戦争や、貧乏や、病氣等がその住民達の上にふりかゝる様に願ひ、又正しい神々が凡てのアゼンス人の老幼貴賤をこはす皆呪咀する様にと祈つてをつた。こんなに祈りながら森に這入つて、そんなに不親切な獸と言つても人間よりも幾層倍も親切な優しい獸と共に暮すのだと言つた。公爵は衣服を脱いで裸體になり人間の習慣を盡く捨て、しまひ、穴を掘つてその中に住み、獸の様な生活を唯一人で送つてゐた。木の根を食べ、水を飲み、人間の同類とは全く離れて、人間よりも無害な親しい野獸の群に加はつた。

金持のタイモン公、人類の喜びであるタイモン公から、裸かのタイモン、人間嫌ひのタイモンになつたとは何といふ變り方であらう！あの追従者達は今何處にゐるだらう。従者や供人は何處にゐるだらう。騒々しい従者である寒い風が公爵の侍従になつて、温かいシャツを着せて呉れるだらうか。鷲よりも長く、生き延びてゐる番木が、若くなつて公爵の輕快な小姓となり、命令に従つて用

事のために跳んで行く事が出来ようか、冬になつて氷が張つてゐる冷たい小川が、どうして昨晩から食ひ過ぎのため、病氣になつてゐる時なき、温かい肉汁や酒湯を與へて呉れる事が出来よう。又或は此んな荒れた森の中の獸達が、やつて来て公爵の手を舐めたり、媚び諂つたりする事であらうか？

或日の事であつた、公爵がまづしい食料である木の根を堀つてゐた時、鍬の先が何か堅い物に當つた。よく調べるさうつ高い多額の黄金であつた。多分何時か事變があつた時に誰か吝嗇坊があつて、また此處へ来て取り出さうと思つて埋めて置いたのが、その時機が來ない前に、誰にもその秘密を打明けないうで死んでしまつたのであらう。それは益もせなけりや害もせず、母である土地の内部に、タイモンの鍬が堀り出して再び日の光に取り出すまで、一度もそこから取出された事が無い様な風に埋まつてゐた。

それだけの財寶を以て、タイモンさへ昔の様な氣になるなら、前の友達や追従者たちを再び買ひ取る事は容易に出來た。然しタイモンは虚榮の俗世にあきくしてゐて、金を見てさへ眼の毒とまで思つたので、それを又土地に埋めて置かうと考へたが、然し金あるが爲に人類にその無限の不幸が起つてゐる事や、その幻惑が人間の間を竊盜とか、暴虐、不正、賄賂、無法、殺人等を起さして

ゐる事を考へて、自分が堀り出して見付けた此の多額の金貨から人類を惱ます様な悪戯がして見度い等と（タイモンは金貨をそれ程心から嫌つてゐた）空想して樂んだ。そして丁度その時幾人かの兵隊が森の中のタイモンの洞窟の近くを通つて行つた。その兵隊がアゼンスの大將アルキピアデスと言ふ、アゼンスの元老院議員達に對して嫌惡を抱いてゐた大將の（アゼンス人は常に感謝をせぬ恩知らずとして有名であつて、その將軍達にも良い友達にも憎惡の念を起させる様な事ばかりをしてゐた。）一隊である事を知つた。その大將は今まで自ら指揮してアゼンス人の敵と戦つて居て、その凱旋軍の先頭に立つて進軍してゐた。タイモンは彼等のした事を喜んでゐたので、兵士共に拂つてやる様に大將に金を與へ、その代りにアゼンスの町をその精銳な軍隊で滅亡させ、火を放ち、住民を残らず切り殺して呉れる様にと頼んだ。老人で白い髭をしてゐるからと言つても許してはならない、彼等は皆高利貸なんだから。又若い子供で罪のない笑顏をしてゐるからと言つても許してはいけない、生きて残つて、大きくなれば謀反人になるにきまつてゐる。物を見たり聞いたりして憐憫の情を起さない様に眼や耳を奪ひ取つてしまへ。又處女や赤ん坊や母親達の叫聲に氣を取られて、全市を殺戮するその手をゆるめないうで、皆を殺してしまへと言ひ、その殺戮が終れば神々がその征服者をも滅ぼしてしまはれる様に祈つた。それ程までにタイモンはアゼンスの町やアゼ

ンス人や又凡ての人類を憎んでゐたのである。

こんな人間とも思はれぬ様な野蠻な生活を續けて孤獨な暮しをしてゐたが、或日びつくりしたやうな風をして自分の洞窟の入口に不意に現れた人の姿を見て驚いた。それは正直な家令のフレビウスであつた。家令は自分の主人に對する愛と熱誠とから、こんな哀れな住居にまでさがしに来て、何か手助を仕様と思つたのである。嘗てはあれ程貴かつた主人のタイモンが、此の様に賤しく、生れたまゝの裸體で、獸の中の獸の様なみじめな生活をしてゐるのを初めて見た時、此の忠實な家令は自分自身の悲しい滅亡を見類敗の記念碑を見る様な氣がして、可愛想に人のいゝ家令は怖れに包まれ、當惑しながら、無言のまゝで立つてゐた。やつと物が言へる様になつてからも涙のために言葉が詰つて言へなかつたから、タイモンは彼が自分の家令である事を思ひ出し、又（以前人間についてもつてゐた經驗とは全く異つて）自分のために誰がこんな下手に來たのかを見判けるまでには仲々手間を取つたのであつた。そして人間の姿と様子をしてゐたので、タイモンは謀反人に違ひなく、涙も偽りなんだと疑つてゐたが、家令は色々な證據を見せて自分の忠實さを證明し、自分が此んな所まで探ねて來たのも、嘗てなつかしかつた主人に對する愛と熱誠の念からであるといつた。それでタイモンも遂に世の中に唯一人だけ正直な人がゐたと言ふ事を認めなければならなかつた。

た。然し尙タイモンは家令が人間の風采をしてゐるため、その「人間」の顔を見ては嫌惡を感ぜずに居られず、その「人間」の口から語られる言葉を聞いては憎惡を禁ずる事が出来なかつた。此の率直で正直な老人は唯人間だと言ふだけで、勿論普通の人間よりは優しい傑れみ深い心を持つてゐるけれ共、憎む可き人間の姿と外形とを具へてゐる言ふ點で、無理に歸らしてしまつた。

併し此の哀れな家令よりもつと大變な客が、孤獨なタイモンの、野蠻ではあるが平靜な生活を妨げようとしてゐた。アゼンスの忘恩の貴族達が、自分達が今迄尊いタイモンに對してした不義な心から悔いる時が遂に來た。アルキピアデスが激怒した野猪の様に、町の城壁を包圍して猛烈な攻撃をして美くしいアゼンスの町を塵芥に歸せようと嚇したからである。そこで今や此等の忘れつほい心にも以前のタイモン公の武勇と軍功とを思ひ出して來た。タイモン公は以前アゼンスの大將であり、勇悍練達の軍人であつたので、今包圍してゐる猛烈な軍隊と對戦し得る者は、即ちアルキピアデスの激烈な攻撃を撃退し得る者はアゼンス中にタイモンより外にないと思つたからである。

此の危急な場合にタイモンを訪問する元老院議員の代表者が選ばれた。そして彼等は、その人が最も困つてゐる時には少しも關ひつけなかつた人の所へ、自分達が困つてゐると言つて出て來た。丁度散々不義理な事をし、自分達の無禮な不人情な行からして、到々禮義の厚い公爵の權利をさへ

奪ひ取つて置きながらその事に對して、公爵から感謝をでも受ける様な風に。

扱彼等ば熱心にタイモンに願ひ、涙を流して懇願し、どうか以前に皆の忘恩のために公爵を逐ひ出したその町を救ふために歸つて呉れ頼んだ。そして又富や権力や地位や今迄の迫害に對する報償や市民全體の尊敬や愛を捧げる言ひ、若し来て自分達の命を救つて呉れるならば、自分達の身體も生命も財産も皆公爵の意のままに捧げる言つた。然し裸體のタイモン、人間嫌ひのタイモンはもう宴會すきの公爵、武勇の精、戦時の守護であり、平和の時の裝飾である以前のタイモン公ではなかつた。若しアルキビアデスが自國民を殺してしまつても、タイモンは少しも氣に掛けなかつた。若し美しいアゼンスが掠奪され老人や子供達が殺されても、タイモンは喜んだだらう。だから公爵は語つた。そして又アゼンスの最も尊い人の命よりも自分には、手におへない陣營のナイフ一つの方が大切だと言つた。

泣いて失望してゐる議員達にタイモンの與へた答へは、ただこれだけであつた。唯別れる時に自分の國の人々に宜敷くと傳へ、皆の歎しみと不安を幾分安めるために、アルキビアデスの憤り狂ふ激烈な攻撃を避ける法が唯一つ残つてゐるのを教へてやらうと言つた。タイモンと雖もまだ自分が死ぬ前に自國人に親切を盡さうとする位の愛情は残つてゐたのである。此の言葉を聞いて議員達は

タイモンの自分達の町に對する愛情が、復活して來つゝある望を得てや、胸をなで下した。そこでタイモンは自分の洞窟の側に一本の木があるが、自分は近い内にそれを切らなければならぬからアゼンスの市民達に地位の高下等は少しも關はないから、苦難を避けたい願ふ者はその木を切つてしまはないうちに木を樂しみに來る様にと語つた。その意味は皆が來てその木で首をつつて、苦難を脱れよと言ふのである。

此れが實にタイモンが人間になした多くの恩惠の中での最後のものであつた。そして又自國人がタイモンを見た最後の時であつた。數日を経て後一人の兵士が、タイモンが住んでゐた程遠からぬ海岸を通つてゐた時、波打端に一つの墓を見つけた。その墓石にはこれが人嫌ひのタイモンの墓であると言ふ意味の銘が書いてあつた。

「世に在る内は、凡ての生ける人間を憎み、尙凡ての卑劣なる人間共の疫病に依りて亡びん事を願ひつゝ、逝けり。」

タイモンは何か災難に依つて命を失つたものか、夫も壽命が來たのか、人間に對する嫌惡により死んだのかその點は明白ではなかつたが、誰も皆この碑銘の適はしさと、タイモンが生きてゐた時と同じ様に、人間を憎惡しながら死んで行つたのが適當してゐる事を感じた。又或者はタイ

モンが海岸を自分の墓地として選んだのには、偽善好きで嘘つきの人類のはかなさや輕薄を歎いてゐる様に、墓の側に絶えず廣い海が泣いてゐる言ふ意味だらうと考へる者もゐた。

ロミオとジュリエット。

ペロナの町で二軒の名門と言へば富豪のカプレット家とモンタグユー家とであつた。兩家の間には昔から確執があつて今ではそれが非常に高まり、相互の敵意は恐ろしい状態になり、縁遠い親類や、從者家來にまで及んでゐる。若しモンタグユー家の召使がカプレット家の召使に出會ふ様な事があつたり、或はカプレット家の者が偶然モンタグユー家の者に出會ふ様な場合は、きつと激しい嘲罵をしあつたり、時には血を見る様な事さへあつた。そしてそんな不意の會合から喧嘩が起つて、幸福なペロナの町の平和が亂れた事は度々であつた。

老カプレット卿は大晚餐會を催して、多くの美しい貴婦人や貴族達を招待した。ペロナ中のあらゆる評判の美人は皆その席に集まつてゐて、モンタグユー家の者でない限りは來る人は皆歡迎された。此のカプレットの宴會に、ロザリンの戀人である老モンタグユー卿の息子ロミオが來てゐたモンタグユー家の者が此の宴會に來る言ふ事は眞に怪訝な話ではあつたが、ロミオの友達のベン

ボリオが此の貴公子に、假面をかぶつて此の宴會に出れば、ロザリンを見る事が出来るし、又ペロナの有名な美人達と比べて見れば、白鳥の様に思つてゐたロザリンが鳥の様に見えるだらう言つて説きつけた。ロミオはベンボリオの言葉をあまり信用はしなかつたが然し、ロザリン戀しさに遂に行く事に決めた。ロミオは眞面目な熱情的な男であつたので、其思ひの爲めに夜も眠れず、人を避けては一人ロザリンの事ばかり考へてゐた。所がロザリンはロミオを輕蔑して、今迄一度だつて彼の愛に對して愛情を報ひないのみならず、禮儀をさへ示さなかつた。それでベンボリオは友達に婦人達や社交界の諸相を見せてその戀病を癒してやらうと思つたのである。そこで此のカプレット家の宴會へ貴公子ロミオとベンボリオそれからその友達の、マークチの三人は假面をつけて出席した。老カプレット卿は三人を歡迎し、足指に豆の出來ない婦人なら誰でもお踊りなさいと言つた。此の老人は陽氣で愉快な人だつたので、自分達も若い時分には假面をよくかけたもので美しくい婦人の耳に面白い話を囁いたものなど言つた。扱三人は舞踏を初めたのであるが、ロミオは不意に其處に踊つてゐた一人の非常に美しいのに驚かされた。その婦人の姿は、炬火の輝きをも奪ふばかりであり、その夜に現はれた美しくさは、黒奴くろんぼの着けてゐる高價な寶石の様でもあつた。勿體ない程美しく、此の世には尊すぎる程奇麗であつた。雪の様に白い鳩が鴉の中にまざつてゐる

る様に、その美しくさと完全さとはその仲間の人達の間が目立つて輝いてゐた。ロミオがそんな謙辭を呈してゐる時、カブレット卿の甥であるタイバルトに立聞きされて、その聲でロミオである事を見破られた。此のタイバルトは激しい熱情家であつたので、モンタグユー家の者が假面をつけて自分達の尊嚴（ミ彼は言つた）を愚弄輕蔑するのを何うしても放つて置く事は出来なかつた。そこで怖ろしく激昂して憤り出し貴公子ロミオをなぐり殺さんばかりであつたが、伯父の老カブレット卿は、客人の手前もあり、又ロミオは自分達と同じ様な紳士の身分で、ペロナの町の人々からも徳の高い立派な青年として褒められてゐたからそんなに亂暴はさせなかつた。がタイバルトは無理に自分の意志を曲げさゝれて思ひ止まつたけれど、何時かは此の賤しいモンタグユーの奴に此の闖入の仕返しをしてやらうと誓つた。

舞踏は終つた。ロミオはその婦人の立つてゐた場所を見守つてゐた。そして自分が假面をかぶつてゐるのを利用して、少し位の無禮は許されるだらうと考へて、非常に優かな様子をして婦人の所へ進んで手を取り、その手を社だと言ひ、自分がそれに觸れた事に依つて社を汚したけれ共、自分は罪を慙ぢて巡禮となり、接吻をしてその贖罪をしようと言つた。

「善良な巡禮様、あなたの信仰は餘りに懇熱過て、餘りに丁寧過ぎます。聖人も御手はあります

から巡禮が觸れてもよろしいが、接吻はしてはいけません。」

「聖人も唇は持つて居られませう。そして巡禮も亦持つてゐます。」

「はい、持つてゐます。けれどもその唇は祈禱の時に用ひるのです。」

「おゝ、それならば私の尊い聖人様、私のお祈りをお聞き下さい、そしてそれをお許し下さいませ、さもなければ私はもう絶望です。」

二人がこんな諷言や暗號なぎを語り合つてゐた時、婦人は母に招かれて行つてしまつた。ロミオは母の誰であるかを尋ねた。そしたら、ロミオを斯くまで感動させた比ひ稀な美しい婦人が、モンタグユー家の仇敵であるカブレット卿の娘であり嗣である若いジュリエットである事を知つた。そして彼は何も知らずに自分の敵ミ心を誓ひ合つた事に氣がついた。此の爲めにロミオは苦しんだ然し此の爲に戀を思ひ切る事は出来なかつた。又ジュリエットも自分が話をしてゐた紳士がロミオであり、モンタグユー家の者だミ知つた時には不安を感じざるを得なかつた。ジュリエットも亦同じ様に急に思慮もなくロミオを戀ふ身ミなつた。（その事はロミオにもよく判つてゐた）ので、此の激しい戀が生れた事はジュリエットには敵を愛さねばならぬ事ミなり、家族の點から考へれば何うしても憎まねばならぬ人に自分の愛情を捧げる様な事ミなつたのである。

眞夜中になつたので、ロミオは友達と共に宴會を辭したが、ロミオは間もなく見えなくなつてゐた。自分の魂を残して來たその家から何うしても離れる事が出来なかつたので、ロミオはジュリエットの家の後にある果樹園の壁を乗り越えて這入つたからである。ロミオが其處に立つて新しい戀人の事を思ひ廻らしてゐる間もなく、上の方の窓にジュリエットの姿が現れて、その窓を通して東の空に上る太陽の光の様に、その比ひ稀な美しくさが輝いて見え、ロミオには薄白く照らしてゐる月の光りも新しい太陽のすばらしい光に、比べれば弱々しく情なくさへ思はれた。そしてジュリエットが手の上に頬を乗せてゐるのを見ては、その手袋もなつてジュリエットの頬に觸れたいこまに感情的に願つた。此間ジュリエットは唯一人で考へながら、深い溜息をついて「嗚呼」ご叫んだ。ロミオはその言葉を聞いて狂喜して、靜かに聞かれない様に言つた。

「お、も一度お言ひ、美しい天使よ、お、あなたは私の頭上にて、人間が後ろへすざつて見されるあの羽のはえた天の御使のの様に見える。」

ジュリエットは聞かれてゐる事などは少しも知らずに、今晚の出來事から自分の胸に湧いて來た新しい情熱に満たされて、（ロミオがゐる事など知らう筈はないので）自分の戀人の名を叫んだ。

「お、ロミオ、ロミオ！、ロミオ！あなたは何處にお出でなのです。私のためにお父様を捨て

お名前をお捨て下さい。若しお捨て下さらねば、私に戀をお誓ひ下さい。さうすれば私はカプレット家を去りませう。」

ロミオはこんな激勵の言葉を聞いてもう今にも言葉を掛けようとしたが、もつと聞きたかつたので思ひ止めた。ジュリエットは尙も熱烈な獨語を續けた。ロミオがロミオでありモンタグユーである事を悲しみ、他の人であるか他の名前であればよかつたとか、又は名前はロミオの身體は別物なのだから此の嫌な名前を捨て、しまつて、その代りに自分を取つて呉れ、ば佳いなど言つた。此の愛らしい言葉を聞いて彼はもうじつと黙つてゐる事が出來ず、今のジュリエットの言葉が唯の空想でなく、ロミオ自身に語られたかの様に、その返事を獨語して、ジュリエットに自分を戀人と呼ぶか又は他の好きな名で呼んで呉れ、ロミオと言ふ名が嫌なら私はもうロミオではないのだからと言つた。ジュリエットは庭に男の聲がするのに驚いて、初めは、夜の暗にまぎれて自分の秘密を知るために忍んで來たのは誰であるかに氣が付かなかつた。が二度目に語つた時は、まだロミオの言葉を百語とは聞いてゐなかつたけれど、戀人の聲はそんなに好いものご見えて、すぐにそれが貴公子ロミオである事を知り、果樹園を登らうとして身を現はす危険を忠告した。若し誰か自分の家の者が居るのを見付けたなら、モンタグユーの者であるから殺されるにきまつてゐたからである。

「あゝ、二十人の敵の刀よりもつと怖ろしいものが、あなたの眼の中にあります。あなたさへ唯親切な眼で見てくださいますならば、私はあの人達の敵意も少しも怖くはありません。あなたの愛なしに嫌な世に生きのびるよりは、あの人達の憎悪のために命を失ふ方が本望です。」

「何うして此處までおいでになりました、誰の案内で。」

「戀が私を案内して呉れたのです。私は水先案内ではありませんが、然し、若しあなたが私から離れてあの限りない海が打寄せてゐる彼方の岸においてになつたとしても、此の様にやつて來たでせう。」

ジュリットは自分から願つてではなかつたけれど、計らずも自分のロミオに對する戀を見出されてしまつた事を思つて、眞紅に顔を染めたが、夜だつたのでロミオには見えなかつた。ジュリエットは前の言葉をも一度言はうと思つたが駄目であつた。又分別ある婦人が常にさうするやうに、形式張つてゐる戀人を餘り近寄せない様にし、澁面を作り強情を張つて、求婚者は最初は峻拒しようと思ひ、又自分が最も愛してゐる者に對しては、戀人達に餘りに軽く見られたり、容易く得られると思はせない様に、遠ざかつてゐたり、はにかみや無關心だなどと装はうと思つた。得る事が困難であればある程その物の價値は増すからである。然しジュリエットの場合には求婚の斷りも、延期

も、或は普通の言ひ抜けや引延ばしをするだけの餘裕がなかつた。ロミオは、ジュリエット自身の口から戀の告白を、自身が近くにあるとは夢にも思つてゐない内に、すつかり聞いてしまつてゐたからである。そこでジュリエットはこの事情のために、思ひ切つて正直に率直に、先づ自分が言つた事は皆本當であるを保證し、自分は「美しいモンタグユー」であると（戀の爲には嫌な名も良くなる）名乗り、自分がこんなに安々に戀を許したのは、自分の輕薄や不心得ではなく、こんなに偶然にも自分の秘密を知らしてしまふやうになつた夜の出來事に罪を負はず（若し罪があるとすれば）べきであると言ひ、又女としての謙讓から言へば自分がロミオに對する振舞は全くつゝましかかこは言へないかも知れぬが、優しさを装ふたり、巧みに貞淑を飾つてゐる様な多くの婦人よりは、すつと眞實があると、附け加へた。

ロミオはこんなに尊い婦人に不名譽の影をさへ負はず言ふ様な考へは決して自分に無いを、天に誓ひを掛けて言はうとしたが、ジュリエットはそれを止めて、誓つて呉れるのは嬉しいけれど、今晩の約束は餘りに急卒で、無分別で、餘りに不意だつたので好ましくないから、誓ふのは止めて呉れと願つた。然しロミオはその晩に切に戀の誓を取交したいと願つてゐるが、ジュリエットはもうロミオが望まない前に誓ひを言つてしまつたと答へた。それは自分の告白を立聞きされた事を言

つたのである。然しまたジュリエットはそれを二度言ふ楽しみのために、前の通りを繰返した。ジュリエットの仁慈は海の様限りなく、その愛は海の様深かつた。此の楽しい會談の最中に娘は乳母のために呼ばれた。娘と一緒に眠る事になつてゐた乳母はもう明方近くなつてゐたので、眠らなければならぬと考へたのであつた。然しあわて、戻つて来てロミオに二言三言言つた。若しロミオの愛が誠實であつて結婚する氣があるのなら、結婚の日を定めるために明日ロミオの所へ使を送ると言ひ、結婚後は自分の全財産を脚下に投出し、世界の何處へでも夫に従つて行くと言つた。こんな事を相談してゐる間にジュリエットは乳母から度々呼ばれて行きつ戻りつしてゐた。丁度少女が小鳥を少しでも自分の手から飛ばせたくないで、絹糸で又しても引き戻す様に、何うしてもロミオを返したくなかつたからである。ロミオも亦同様に別れを惜しんでゐた。戀人達にとつてはお互が話し合つてゐる程甘美な音楽はないからである。然し遂に二人は、お互に此の夜の残りを安らかに眠る様に祈りながら別れた。

二人が別かれた時はもう東の空は白み初めてゐた。ロミオは戀人の想ひや、幸福な會談の追憶が胸に満ちて、眠れることも思へなかつたので、家へは歸らずに路を變へて近所の僧院へ行き托鉢僧のローレンスに會つた。此の善良な僧は既に祈禱を始めてゐたが、若いロミオがそんなに朝早くやつ

て來たのを見て、その晩に眠れないで、何か若い者の戀の惱みの爲に起きてゐたのだと正しい推測をした。僧はロミオが戀のために苦しんでゐるのだと思つたのは當つてゐたが、ロザリンに對する戀のために眠れなかつたのだと考へたのは、その相手を想ひ違へてゐた譯である。然しロミオがジュリエットに對する新しい戀を打明け、その日に二人を結婚させて呉れと願つた時、僧は、今迄ロミオのロザリンに對する戀の秘密を聞かされ、女の輕蔑に對する不平等を聞かされてゐたので、ロミオの愛情が急に變つた事を驚いて手を上げ眼を見張つた。そして若い者の戀は本當の心からでなく、眼で見ただけなのだと言つた。ロミオは自分を愛して呉れなかつたロザリンに對しては屢不平を言つたけれども、ジュリエットは自分をも愛して呉れ又自分も愛しておるのだと答へた。僧は幾分か此の理由を認めもし、又ジュリエットとロミオの結婚を許したならば、カブレット家とモンタグユー家との長い間の争ひをうまく和解する方法にもならうか考へた。此の善良な僧は兩家に親交があつたので常に此の事を誰よりも深く考へてゐた。しばしば仲直りをさせようと考へて仲裁に立つたが駄目であつた。で半ばはこの攻略に動かされ半ばは自分が何物をも惜しまない程のロミオに對する愛着に動かされて、二人を結婚させてやらうと承諾した。

扱ロミオは實際最も幸福となつた。約束通りに遣はした使者からロミオの眞實を知つたジュリエ

ットは急いでロオレンスの庵室へやつて来た。そして其處で神聖な結婚の式が行はれた。僧は天がこの結婚を嘉し、此の若いモンタグユーと若いカプレットを結合させる事に依つて兩家の長い間の紛争や長い軋轢を埋めてしまふ事が出来る様にと祈つた。

式が終つてジュリエットは家へと急いで歸つたが、夜の來るのが待遠しくてならなかつた。ロミオが昨晚出會つたあの果樹園に來て、出會はうと約束したからであつた。その間の待遠しさは、小さな子供がお祭の前夜に明朝になれば新しい着物が着られるのを待つ様にジュリエットには感ぜられた。

その同じ日の正午頃、ロミオの友達であるベンボリオとマークチオとが、ベロナの町を歩いてゐた時、獐猛なタイバトを先頭にしたカプレット家の一隊に出會つた。これぞ昨夜カプレット卿の宴會でロミオを殺さうとこいきり立つたあのタイバルトであつたが、マークチオを見ると、不禮にもモンタグユーのロミオ等と交つてゐる事を罵倒した。マークチオもタイバルトと同様に熱もあり若い血が燃えてゐたので、此の罵言に對して鋭い言葉を返した。處がベンボリオが言葉を盡して二人の憤怒をなだめたけれども争は始まつた。その時丁度ロミオ自身がその路を通りかゝつたので、熱したタイバルトはマークチオからロミオの方に向き直つて、悪黨と言ふ惡名で罵つた。ロミオはタ

イバルトがジュリエットの親類であり、又ジュリエットから愛されておる事をもよく知つてゐたので、誰よりもタイバルトとの争は避けたいと思ひ、その上ロミオは生れ付き賢明で温和であつたため、家族の紛争の事等には全く係はらなかつたし、カプレットと言ふ名前も今では自分の愛する戀人の名であるから、争闘を始める合詞であると言ふよりもむしろ、怨恨などを和らけてしまふだけの魅力を持つてゐた。

そこでロミオはタイバルトに道理を語らうと思つて、穩かに「良いカプレット」の名で呼び掛けた。丁度自分はモンタグユーの者ではあるが、敵の名を言ふ事に喜びをでも感じてゐるかの様に。然し凡てのモンタグユーを蛇蝎の様に嫌つてゐたタイバルトは道理等聞かう筈はなく、直ぐに劍を抜いた。ロミオがタイバルトと争ひ度くない秘密な理由を知らなかつたマークチオは、自分との闘ひが中止されてゐるのを見て、不名譽な降服をするものと思はれる事を怖れ、様々な輕蔑の言葉を以てタイバルトに戦ひを挑んだのこ、ロミオやベンボリオが二人の格闘を分けようと思つたにも拘らず、二人は激戦して、遂にマークチオは致命傷を負ふて倒れた。マークチオが死んでしまつたのでロミオももう辛抱が出来なくなり、タイバルトが前に言つたと同じ様に惡徒と言ふ惡名で罵り返して、格闘を始めてタイバルトは遂にロミオの爲に殺された。

晝日中ペロナの町の真中でこんな大騒動が起つた事として、これを聞いて市民達は黒山の様になるにその場へ集つて来た。その中には老カブレット卿やモンタグユー卿がそれ／＼妻と一緒に來てゐた。その内間もなく國王自身もやつて來た。王はタイバルトのため殺されたマークチオの親戚でもあり、又自分の國內の平和がしば／＼モンタグユー家とカブレット家との喧嘩によつて亂されるので、法に違反した者は嚴罰に處さうと決心して來たのであつた。此の騒擾の目撃者であつたベンボリオは王の命に従つて事の起りを語る事となり、ロミオには不利にならぬやう、友達の仕た事は和らけて穏やかに、然し出來る限り有りの儘を物語つた。カブレット夫人は自分の甥を失つた爲非常に悲しんで復讐の念を抑へる事が出來ず、王に殺人者を嚴しく罰し、ベンボリオはロミオの友達で又モンタグユーだから不公平な事を言ふに違ひないから、その申立等には注意を拂はれたい様にと警告した。こんなにして夫人は自分の娘の婚を訴へてゐたのであるが、ロミオは自分の娘婚で、ジュリエットの夫だとは少しも知つてゐなかつたのである。又一方では、モンタグユー夫人が自分の息子の命のために、ロミオは既に、マークチオを殺して法律に觸れてゐたタイバルトを殺したのだから、罪を受けるには當らないと主張した。王は此婦人の感情的な叫聲なきには耳を藉さず、事實を慎重に調べて宣告を與へた。ロミオは此の宣告に依つてペロナから追放せられる事となつた。

ジュリエットにとつて何といふ悲しい報知だつたのだらう。花嫁になつてから數時間と経たぬのに、此の判決に依つて永久に離別された様なものである——。此の詳報がジュリエットに傳へられた時、最初は自分の親しい従兄を殺したロミオを罵つて、美くしいヴァンナ潛主だとか、天使の様な悪魔だとか亂暴な鳩、狼を持つ羊、蛇心をかかす花顔だとか其他矛盾した様な言葉を言つたのは、心の内にロミオに對する愛と怨との闘ひを示したものである。然し終に愛が勝利を得て、ロミオが自分の従兄を殺した悲みのために流した涙が、タイバルトに殺されたかも知れない。自分の夫が助かつた喜びの涙に變つた。そして流るゝ涙はロミオの追放を悲しむ新しい涙となつた。この追放はジュリエットにとつては數人のタイバルトの死よりも怖ろしい事であつた。

ロミオは騒擾の後すぐに、僧ロオレンスの庵に身を避けて、其處で初めて死よりもすつと怖ろしい王よりの宣告を聞いたのであつた。ロミオにまつてはペロナの町以外には世界がなく、ジュリエットを見ないで住む事ができなかつたからである。ジュリエットの住んでゐる所にのみ天國があり其他は凡て煉獄であり苛責であり、地獄であつた。良い老僧は哲理を説いて悲しみを慰めようとしたが、此の氣も狂はん計りの若者は少しもそれを聞かず、狂人の様に自分の毛をかきむしり、自分の墓場の寸法を取るのだと言つて自分の身を地に投げ出してゐた。斯んな變な事をやつてゐた時愛

するジュリエットから使者が来たので良心に立ち返り少し力づいた様に見えた。で僧はこの期に乗じて、ロミオの男らしくない仕草を諫めた。ロミオはタイバルトを殺した。が又自分をも殺さうとするのか？そして又自分の命にのみ頼つてゐる愛する妻をも殺さうとするのか？と僧は諫めた。尊い人間と言ふものは蠟の様なものだ、勇氣を要する時には確かりとさせて置かねばならぬ。法律は非常に冥大で他人を殺したにも拘らず、王の口から出た宣告は唯追放であつた。ロミオはタイバルトを殺したが、或はタイバルトに殺されたかも知れなかつたのだ。だからこゝに幸福がある譯である。ジュリエットは生きて居り、又（何よりも喜ばしい事には）自分の愛妻となつたのだから、考へて見れば最も幸福なのだ。斯の様に僧が色々慰めの言葉を言つてゐた間も、ロミオはまるで氣の弱い不作法な小娘の様に聞かなかつた。老僧はそんなに絶望してゐては惨死するばかりだと思ひ強く戒めた。ロミオが少し平靜に復した時、僧は今晚秘かにジュリエットの所へ行つて別れを告げ、それから直ぐにマントウアへ逃げ延びて其處に逗留し、自分が二人の結婚を公表する適當な時が来る迄待つてゐる様に勧め、そしてその結婚によつて喜ばしい兩家の仲直りが出来るだらうし、又王もそれに動かされて追放を許す事は疑ひない。さうすれば行く時の悲しみに引かへて二十倍もの喜びを抱いて歸つて來られると告げた。ロミオは老僧のこの賢い計畫に信服して、その夜は一婦人と

一緒に過ぎして、明朝一人でマントウアへ旅立つ心算で僧院を辭した。老僧は時々マントウアへ故郷の様子を知らせる手紙を書かうと言ふ約束をした。

其のロミオは、前夜ジュリエットの戀の告白を聞いたあの果樹園から、私かに女の寢室に入る許可を得て、愛する妻と共に一夜を過した。それは限りない喜びと喜悅の夜であつた。然しその夜の樂しみ—二人の戀人達の互に親しみ合つた喜び—は悲しくも別離の情に破られ、過ぎし日の奇しき出來事のために亂された。待たれざる夜明は餘り早く來る様に思はれた。ジュリエットは雲雀の朝の歌を聞いた時、それは夜歌ふ夜鶯の聲だと思ひ込まうと努めた、然しそれが雲雀の聲である事は餘りにも見えすいてゐた。その上その聲が調子外れで不愉快にさへジュリエットの耳に響いた程であつた。そして東天の曙光は確かに二人の戀人達の別離の時を示した。ロミオは重々しい心を以て愛する妻に別れを告げ、マントウアから毎時間に手紙を書かうと約束した。そして寢室の窓から下りて、妻よりすつと下の地上に立つた時、その心に悲しげな豫覺の滿ちてゐたジュリエットの眼には、夫の姿が墓場の底に横はつてゐる屍體の様に見えた。ロミオの心にもそれに似た様な氣持があつた。然し今はもう急いで去らなければならなかつた。夜明以後にペロナの町で見つかれば殺されねばならなかつたからである。

これは然しまだ二人の戀人達の悲劇の序幕に過ぎなかつた。ロミオが去つてまだ數日を経たぬのに、老カプレット卿はジュリエットに結婚の事を言ひ出した。父が既に結婚してゐる事とは夢にも知らないで、ジュリエットの夫として選んだのは、バリー伯爵と言ふ勇敢な、若い貴公子であつた。若しジュリエットがロミオを見なかつた前なら佳い配偶であつたらう。

哀れなジュリエットは父の申出を聞いて哀れな窮地に陥つた。ジュリエットは自分はまだ結婚するには若過ぎるとか、最近タイバルトが死んだため心が弱々しくなつてゐて、楽しさうな顔をして夫にま見へる事がむづかしいとか、又カプレット家が葬式がまだ済むか済まないのに結婚式を挙げると言ふ事は無情であるなごみ歎願し、其他種々な口實を以てこの結婚を斷つたが、本當の理由は既に結婚してゐたからである。然し老カプレット卿は娘の口實なきには少しも耳を貸さず、命令する様な調子で次の木曜日にはバリー伯と結婚せねばならぬから準備をする様にと言つた。そして夫となるべき人が、金持で、若くてその上高尚であるために、ベロナ中で一番高慢な娘でさへ喜んで承諾するだらうと思はれてゐたので、父親は娘が恥かしさを裝ふて自分の幸福に對して斷りを言ふのだらうと解釋してゐた。

こんなにつば詰つて來たので、ジュリエットは常に困つた時の相談相手であるあの親切な老僧に打明けた。僧はジュリエットに最後の手段をも取るだけの決心があるかと尋ねたのに對して、ジュリエットは自分の愛する夫が生きてゐるのに、バリー伯と結婚などするよりは生きたまゝ墓に埋められた方がましだと答へた。そこで僧は娘に家へ歸つて愉快さうな顔をして、父の命令通りにバリー伯と結婚すると言ふ承諾を與へて置いて、結婚の前夜である明日の晩に、僧がその時與へた瓶の中の藥を呑む様に言ひ付け、その藥を飲めば四十二時間のあひだ冷たくなつて死んだ様に見えるのであるから、それで朝になつて花嫁が花嫁を探しに來た時、娘の死んでゐるのに氣がつくだろう、それからこの國の風習に従つて、棺臺の上に蓋ひ物なしに乗せられて、一族の墓所であるおぼろに埋められる事を忍ばねばならない。若しジュリエットが女らしい恐怖心を棄て、この怖ろしい計畫に賛成するならば、この藥を飲んで四十二時間経るまでこの藥はさう言ふ確かな効力があつた。必ず夢からでも覺める様に目が醒めるだらう。そして目が醒める迄には自分が夫の所へこの計畫を知らせてやり、夜中にやつて來てマントウアへつれて行かせようと言つた。ジュリエットは愛をこしてバリー伯との怖ろしさから、この怖ろしい冒險をやらうといふ勇氣を出した。そして僧から瓶を買ひ吩咐通りにしようと言ふ約束した。

僧院から歸る途中でジュリエットはバリー伯に出會つたので、温順な風を裝ひながら花嫁になら

うご約束をした。この事はカプレット卿夫妻にまつても喜ばしい知らせであつた。老人は再び若返つた様にさへ見えた。今迄伯爵との結婚を拒んで父を非常に怒らせてゐたジュリエットも父の命令に従順にしたがつたので再び父の愛娘となつた。家中は急に近付いて来る結婚式の準備に雑沓を極めた。その準備のためには何ものも惜しまずに使ひ、ペロナに嘗て無かつたと思はれる程の楽しい宴會であらうと思はれた。

水曜日の夜ジュリエットは瓶の藥を飲んだ。ジュリエットは僧が自分をロミオに結婚させたと言ふ非難を受けるのを避けるためにこんな毒藥を與へるのではないかと言ふ疑惑を抱いた。然し僧は前から聖人として知られてゐた人である。又若し自分が醒める迄にロミオが來なかつたならば何うだらう、又カプレット家の代々の死骸に満ちた、そして血にまみれたタイバルトの死骸が屍衣の下に爛れて横はつてゐるその墓場に埋められると言ふその場所に対する怖れはジュリエットを狂亂させるに充分ではなかつたか。その上屍體の置いてある場所には幽霊が出るものだと言ふ様な今迄に聞いた話を思ひ出して見たりした。併しロミオに對する愛やバリー伯に對する嫌惡を想ひ廻らして棄鉢になつて藥を飲みそのまゝ、不覺に陥つた。

翌朝早くバリー伯が音樂を以て花嫁を起さうとやつて來た時、生きたジュリエットは居らず、

娘の寢臺には命のない屍體の怖ろしい光景があつた。伯爵の絶望は如何ばかりであつたらう。家中の困亂は如何ばかりであつたらう。可愛想なバリー伯は憎むべき死のためにとり攫はれた花嫁の爲に歎き、又そのために手を握り合ふ前に離婚されてしまつた事を悲しんだ。然し老カプレット卿夫妻の歎きを聞いてはより一層哀れを増した。喜ばされ慰められる天にも地にも唯一人の愛娘が、丁度この寵愛する兩親達の前へ、有望なそして有利な夫に伴はれて進み出て來ようとしてゐる時に無残にも死のために奪ひ去られてしまつたのであつた。今や結婚式のために整へられた凡ての物は急にその華かさを失つて悲しい葬式の用に供せられる事になつた。結婚式の御馳走は葬式の食事に用ひられ、婚禮の讚歌は悲しげなる晩歌に、快活な樂器は陰氣な鐘に、花嫁の道に撒かれる花は皆屍の上に撒かれ、僧は結婚させる代りに埋葬を司さどらねばならぬ事となつた。そして本當に結婚して生きる者の楽しい希望を増すためにではなく、怖ろしい死人の數をふやすために、教會へとはこばれたのである。

惡報は常に善報よりも先に廣まるものである。老僧ロオレンスから、ジュリエットの葬式はほんの僞りで、死の影であり眞似であつて、僅かの間墓場にゐるに過ぎないから、ロミオが來てこの愛する婦人を怖ろしい墓場から救ひ出す様に言ふ報知を持つた使者がとぎくまへに、マントウアに

るるロミオの所へジュリエットが死んだと言ふ哀しい噂が傳はつた。丁度その前まではロミオは非常に楽しく氣輕になつてゐた。前の晩に自分が死んだ夢を見たのだ、(死んだ者が考へる事が出来るなごと言ふ全く不思議な夢である)そして死んでゐるジュリエットがやつて来て死んでゐるのを見付けて自分の唇へキッスをして息をふき入れて、そのため自分が生き返つて皇帝になつたと言ふ夢であつた!そこでペロナから使者が来た時これは確かに自分の夢で豫見した様に何か良い報知に違ひないと思つた。然しこの夢は全く反對に、自分の愛する妻が本當に死んでしまつて、何んなキッスを以ても生き返す事が出来ないのを知ると、すぐに馬の用意をせよと命じた。その晩ペロナを訪れ墓場に行つて妻を見ようと思つたのである。そして又禍程絶望した人の頭に早く入り易いものはないので、ロミオは近頃マントウアの街で通りすがりに見た貧しさうな藥劑師を思ひ出した。その男の飢えてゐると思はれる乞食の様なみなりや、又その汚ない棚に空瓶が並んでゐる店のみじめな様子や其他色々な非常に悲惨な様子を見て、その時ロミオはこんな事を言つた。(多分自分の不幸な生涯に於て偶然にもこんな絶望的な結末に出會ふかも知れぬと言ふ様な疑ひを幾分持つてゐたからであらう。)

「マントウアの法律では賣つた者は死刑に處せられる事になつてゐるが、若し毒藥が欲しいと思へばこの男ならきつと賣つて呉れるだらう。」

こんな言葉さへ今は心に思ひ出された。ロミオはそこで藥劑師を訪ねた。老人はしばらくは何だか躊躇してゐるが、ロミオが金貨を差出すと、貧乏のためにはかへられず遂に毒藥を賣つた。そしてそれを飲めば二十人力もあると言ふ様な男でも、速座に死んでしまふと語つた。

ロミオはこの毒藥を持つて、自分の愛する妻を墓場へ尋ねて行くためにペロナへと出發した。實はその姿を充分に見たならば、自分もその毒を飲んで妻の側に埋められやうと思つてゐたのである。ペロナに着いたのはその真夜中であつた。その真中に古風なカブレット家の墓穴があるのを見つけた。燈火と鋤と螺旋廻との用意は怠らなかつたので墓の扉を毀しに掛かつた。其時人聲がロミオを妨げた。その聲は「賤しいモンタグユー」と呼び掛けて、その不法な仕事を止める様に命じた。それは時ならぬ真夜中に自分の妻である可き筈だつたジュリエットの墓の上に花を撒き涙を流すためにやつて来た若いバリー伯爵であつた。伯爵はロミオが死んだジュリエットと何んな關係があつたのかも知らず、唯モンタグユーであり、凡てのカブレットにごつては不具戴天の敵である事を(想像して)知つてゐたので、こんなに夜中に来たのは死人に對して陋劣な恥辱を與へるためであらうと判断したので、怒りを含んで止めるに命じた。その上罪人として、若しペロナ城壁内にゐるのを見付か

れば死刑に處せられるにきまつてゐたので、ロミオを捕へようとした。ロミオはバリー伯に自分の側を去れと強制し、又自分の怒りを惹起し、無理にも自分をしてバリー伯を殺させる様な破目に陥れて罪を重ねさせる様な事になれば、此處に埋まつてゐるタイバルトと同じ様な目に合はせてやると警告した。然し伯爵は輕蔑してその警告をはねつけ、重罪人としてロミオ捕へようとしたので、ロミオはそれを拂ひのけ、兩人はこゝで格闘を初め、バリー伯はそこに倒された。ロミオが燈火の助けに依つて、今自分が殺した人が誰であるかをうかがつて、それがジュリエットと結婚する筈であつた。(その事はマントウアから來がけに聞いたのだが) バリー伯である事を知るこゝ、その不幸に同情を起したのか、手に抱き上げて勝利の墓場に埋めてやらうと言つた。それはロミオか今開いたジュリエットの墓場を意味してゐたのだ。その中にジュリエットは横たはつてゐた。あたかもその比ひもなく美しくい姿や容色を死さへ變ずる力がないかの様に。或は「死」の神は多情でありその憎むべき怪物が自分の樂しみのために彼女をそこに貯へてゐるかの様に見えた。ジュリエットはあの藥を飲んだ時に眠りに落ちたかの様に、まだ生々として血の色を失つてゐなかつたからである又その側にはタイバルトが血にまみれた屍衣を着て横はつてゐたが、ロミオはそれを見るやその命のない屍骸に許しを乞ひ、又ジュリエットのために自分も「從兄」と呼び、タイバルトを殺した敵

を今や自分が殺して好意を示さうとしてゐるこ語つた。そこでロミオは妻の唇にキッスをして最後の別れを告げて後、藥劑師から買つた毒藥を飲んで、疲れた身體から自分の不幸な運命の重荷を振り落した。その藥の効力はジュリエットが飲んだ様な偽りの藥とは異つて致命的であり確實であつた。その藥のためにロミオが今にも息が絶へようとしてゐた時、ジュリエットは段々目を醒しつた。そしてロミオが時期を待たないで、餘りにも早く來過ぎた事を歎かねばならなかつた。

その時期が來ればきつミ目が醒めるミ僧が約して置いた時間がやつて來た。僧は自分がマントウアへ送つた手紙が不幸にも使者が遅延したためロミオの手に渡らなかつた事を知つて、ジュリエットを禁錮から救ひ出すために斧鶴嘴や燈火を用意して自分でやつて來た。所が來て見ると既にカブレット家の墓場の中には火が燃ゐてゐるし、その廻りには劔や血がちらばつてゐて、その上ロミオとバリー伯が息も絶々に墓碑の側に倒れてゐるのを見出して非常に愕いた。

老僧がさうして此んな不運な出來事が起つたのかを想像して推量をする程の間もない時分に、ジュリエットはその夢から醒めて、側に僧の居るのを見て自分の居る場所に氣が付き、そして又時期をも思ひ出したので、ロミオは居るかと思つた。然し僧はその時人聲を聞きつけたので、早く此の死の場所より出て、常ならぬ眠りより覺める様にと命じ、自分等の逆ふ事の出來ぬ偉大な力が自分

達の計畫を裏切つてしまつたのだと言つた。そして人々が来る物音に驚いて僧は逃げてしまつた。ジュリエットは自分の戀人の手の中にコップが握られてゐるのを見た時に、毒を飲んで死んだのを知つた。そして若し少しでも残つてゐるものなら自分も飲み度いものだと思つて、まだ毒が少しでもついてゐるかも知れぬ、まだ暖かいロミオの唇にキッスをした。その時人々の足音がますます近付いて來たのを聞き、自ら帯びてゐた短刀を抜きはらひ、自ら刺して自分の本當の夫ロミオの側に死んだ。

その時夜番は其處へかけつけて來た。バリー伯に従つてゐた小姓が、主人とロミオが格闘を始めたのを見て、警告したのだつた。それが市民達に知れるとその市民達は狼狽して叫びながらペロナの町をあちこち走り廻つた。バリーだ！ロミオだ！ジュリエットだ！と噂は不完全ながら傳はつた。そして遂に騒動は激しくなりモンタグユー卿もカブレット卿も寢床より起き出で、國王もその騒動の原因をしらべる爲に起き出でた。老僧は惑はしげな様子をして震へながら、溜息し泣きながら墓地から歸つて來る所を夜番の一人に捕へられた。大勢の群集がカブレット家の墓所の近くに集つたので、老僧は王の命令に従つて此の不思議な不幸な出來事に就いて知つてゐる事を物語るこゝになつた。

そして今やモンタグユー卿とカブレット卿の前で、老僧は伴らずに兩家の子供達の間の不幸な戀や、又自分がその二人を結婚させれば兩家の間の長い軋轢が無くなるだらうと思つて二人を結婚させた事を語り、此處に死んでゐるロミオがジュリエットの夫であり、又此處に死んでゐるジュリエットがロミオの忠實な妻である事、自分が二人の結婚を發表する適當な機會が來ない前にジュリエットに他の結婚が申出されたため、ジュリエットは二重結婚の罪を避けたため（自分の勧めに従つて）眠り藥を飲んだのを皆が死んだと思つた事、その間にロミオに手紙を書いてその藥が解けぬ前に來てつれて行く様に傳へたのが、使者の失策に依つて遂にロミオにとどかなかつた事を語つた。然しそれ以上僧は話を續ける事は出來なかつた。僧はジュリエットを助けようと思つて來てそこにバリーミロミオが殺されてゐるのを見た以外には何も知らなかつたのであつた。残りの事件はバリーミロミオとの格闘を見た小姓と、ロミオがペロナからつれて來た召使との物語りに依つて補はれた。その召使は主人から、死ぬ様な場合には父親に渡して呉れと言ふ手紙を受取つてゐた。其中には僧の言を證據立てる様に、ジュリエットとの結婚を白狀し、兩親の許しを乞ひ、貧しい藥劑師の處で毒藥を買つた事をも告げ、墓地へ行つて死にジュリエットの側に倒れるのだと言ふ決心まで書いてあつた。此等の事情はこゝごとく老僧が此の入組んだ殺人に關係がないと言ふ事を證明

したばかりでなく、それ以上に僧の良かれと思ふ意志から、餘りに人工的に小器用に計畫したためこんな思ひも掛けぬ結果になつたのだといふ事が判つた。

そこで王は、老貴族モンタグユーミカブレットの方に向いて兩人の残忍な不合理な敵對を非難し天の彼等の罪に加へた罰を示し、兩家の不自然な嫌惡を罰するために兩家の子供の愛を通して行はなと言つて聞かせた。そこで二人の敵手も今は敵對をやめて、子供等の墓へ長い間の紛争を埋めよう同意した。そしてカブレット卿は、若いカブレットとモンタグユーとの結婚に依つて、兩家の結合を認めたかの様に、モンタグユー卿に握手を求めて兄弟と言つて叫んだ。そしてモンタグユー卿との握手が（仲直りの證であるが）娘の遺産として要求する凡てだと言つた。然しモンタグユー卿は、それ以上を差上げようと言ひ、ジュリエットのために純金の像を立て、ペロナの町が續く限り、丁度ジュリエットが眞實で忠實であつた様に、その像がその高價と精巧に於て何よりも尊ばれる様にしようと言つた。するとカブレット卿もそのかはりこして、ロミオの爲に像を立てようと言つた。そこで此の哀れな老貴族達は、餘り遅延しながら、お互に進んで禮讓を盡す事となつた。以前はあれ程迄に激烈であつた忿怒や怨恨も、兩家の子供達の怖ろしい滅亡に依つて（兩家の紛争や軋轢の哀れな犠牲者よ）遂に兩貴族間の深い憎惡と怨恨とを抜き去る事が出来たのであつた。

ハムレット

デンマークの王妃、ガアツルードはハムレット王の不意の薨去で未亡人となつてゐたが、その死後未だ二ヶ月を経たないのに王弟であるクロディアスと結婚したので、其の時は多くの人々から輕忽な無情な否もつと悪い振舞だと思はれてゐた。此のクロディアスは其の性情も、心立も少しも死んだ夫に似てゐないどころか、その容姿が陋劣であると同様に、その性格も野卑であり無法であつた。だからクロディアスがすぐに兄の王妃と結婚し、先王の王子であつて、王位に即く可き正當な嗣子のハムレットを度外視して、デンマークの王位に即いた所なぞからして、或人々の心には、秘かに兄をなきものにしたのではないかと言ふ様な疑惑が起つてゐた。

然し此の王妃の輕卒な行は若い王子に誰よりも著しい印象を與へた。王子は亡くなつた父王の面影を殆んど偶像を拜む程に愛し、尊んでゐたし、又立派な尊敬の念を持ち、禮法をも非常によく辨へてゐたので、自分の母ガアツルードの不人情な仕打ちを深く、心に悲しんだ。そのため遂に王子は父王の死に對する悲しみと、母の結婚に對する恥辱とのために深く、憂鬱に閉され、凡ての愉快や快活な様子を無くしてしまひ、常々よりの書物に對する興味も失ひ、王子らしい遊戯や狩獵

等、青年に適はしい楽しみもこころごとく面白くなくなつてしまつた。此の世の中が段々嫌になり、此の世は草を抜かない花園の様に雑草ばかりが蔓つて、健全な花は盡く枯れてしまつてゐるこしか思はれなかつた。ハムレットの心をそんなに苦しめたものは、例へ若くそして氣品の高い王子にとつてそれが堪えられない痛手であり、惨い侮辱であつたにしても、自分の正しい遺産である王位を奪はれた事を思つてではなかつた。王子をそんなに悩ませ、あらゆる快活な精神を奪ひ取つてしまつたのは、母が自分の父の事を忘れはて、しまつたといふ事であつた。しかもあんなに立派な父王を！母に對しては常に優しくも親切であり、その時分には母も亦父に對しては優しい従順な妻であり、あたかも深い愛情を抱いてゐるかの様に父によりすがつてゐるように見えるたのに。それに今は二ヶ月の間に、ハムレットには二ヶ月以内と思はれたが、二度目の結婚をした。しかも自分の伯父であり、夫の弟である人と、それ丈でも近親結婚で不當であり且不法であるのに、不作法にも急いで結婚し、又あんなに王らしくもない男を自分の王座と寢臺とを供にする伴侶として選んだと言ふ事が、十人の父王國を一時に失つたよりも強く、此の誠實な王子の精神を亂しその心を暗雲を以て蔽はせたのであつた。

母のガアツルードや新らしい王なきが王子の氣を晴さうと思つたが凡ては無駄であつた。王子は

自分の父王の死に對して哀悼を表すために、眞黒な喪服を着て宮廷へ出てゐた。そして自分の母が結婚をするといふ日に祝辭を述べに來た時も、又その上その恥づ可き日の(王子にはさう思はれた)大饗宴にも喪服のまゝで出席した。

ハムレットを最も悩ませたものは、父の死因の不確實であつたこいふ事である。クロードディアスは蛇にかまれて死んだのだこ言ひふらしたけれど、ハムレットはクロードディアス自身がその蛇だつたのではないかこいふ様な疑ひを抱いた。あからさまに言へばクロードディアスが王位を得るために兄を殺したので、王をかんた蛇は今王座に即いてゐるといふのである。

何處までこの推測が正しいか、自分の母を何う考へればいゝか、何の點まで母が此の暗殺に關係してゐるか、母も同意でやつたのか、母の附け智慧か、それとも全く關係なしでか、此んな疑惑が絶へず王子を苦悶せしめた。

二晩か三晩續けて、眞夜中に宮城前の高臺で、夜番をしてゐた兵士が、なくなつた王にそつくりの姿の幽霊を見たこ言ふ噂がハムレットの耳に傳はつた。その亡霊は亡くなつた王がつけてゐたこ同じ甲冑を頭から足の先まで常に着けてゐた。そしてそれを見た者達の話に依れば(ハムレットの腹心の友ホレーシオもその一人だつた)皆その時とその現れた様子こ一致してゐた。丁度時計が

十二時を打つと現れ、怒つてゐる言ふよりも悲しんだ様な青白い顔をして、その鬚は物凄く、サベルの様な銀色をしてゐて、生きてゐた時と同じ様に見える、そして話し掛けても一言をも答へない、唯一度その首を上げて何か話し出さうとするらしく見わたが、丁度話し始めやうとした時鶏が曉を告げたため急いで引込んで、消へ去つてしまつた言ふのである。

王子は此の話を聞いて非常に愕いた。その話が皆一致符合してゐるので信ぜずには居られなかつたので、皆が見たのは父の亡靈に違いないと推論し、それを見る機会があるかも知れないと、其晩兵士共と一緒に夜番をしようと決心した。王子は心の中でその様な亡靈が何の譯もなしに出るものではないから、何か言ひ度い事があるに違いない、今迄は黙つてゐた言ふが、自分にならばきつと話すだらうと判断したのである。そして夜に来るのを今や遅しと待つてゐた。

夜となつた。ハムレットはホレーシオと武官の一人であるマーセラスと共に、夜なく亡靈の出る言ふ高臺の上に立つてゐた。非常に寒い晩だつた。風はいつになく冷たく身を刺す様だつたので、ハムレットとホレーシオは従者達と夜の寒さに就て話し合つてゐた時だつた。突然ホレーシオが亡靈がやつて来ると叫んだ聲で會話を破られた。

父の亡靈を見た時、ハムレットは急に驚き怖れに打たれた。最初は天使や天の神達に加護を

願つた。それは彼には善い亡靈であるか悪いものであるか、又善い事をするために来たのか害を加へに来たのか判らなかつたからである。然し王子は段々と勇氣を鼓舞した。父が如何にも憐れむが如くに王子を見、話をし度さうな様子をしたの、又父の姿は何處から何處までも生きてゐた時こそ、そのまゝであつたので、ハムレットは父に話し掛けずには居られなかつた。王子はハムレットよ、王よ、父よ！と亡靈に呼び掛け、亡靈があんなに靜かに埋められてゐる墓から脱け出して再び此の世へ月明に乗じて来た譯を語り度いのであらうと推量し、自分達が何か父の靈を安める事が出来る様な事があれば、告げてほしいと言つた。すると亡靈は二人ぎりになれる様な離れた所へ來いと言ふ風にハムレットを招いた。ホレーシオとマーセラスとはそれが若し悪い靈であつて近くの中へ誘ひ込んだり、又は恐ろしい絶壁の上へつれて行つたりして急に王子の理性を奪ひ取る様な怖ろしい物の姿に變るのかも知れない等と考へて、それに従つて行く事を熱心に止めた。併し兩人の忠告も懇願もハムレットの決心を變へる事は出来なかつた。王子は自分の命を惜しまず、それを失ふ事など少しも怖れなかつたし、自分の魂もその靈と同じ様に不滅なのだから亡靈とても何うする事も出来ないではないかと言つた。そして兩人が力の限り止めたけれども、それを振り離してライオンの様にも勇ましく亡靈の導くまゝに何處までも従つて行つた。

一人ぎりになつた時、亡靈は沈黙を破つた。そして自分は父のハムレットの亡靈であり、無残にも殺された、その様子をも語つた。又ハムレットが既に疑つてゐた通りに伯父のクロード・ディアスが自分の王位と王床を奪得たい爲にそうしたと言つた。自分が午後には常に習慣にしてゐる様に、花園の中で眠つてゐると邪惡な弟が、眠てゐる間に忍び寄つて来て、毒のある菲沃斯の汁を耳に注ぎ入れた。その効力は怖ろしいもので、見る間に水銀の様に身體中の血管を流れて血を濁りこぼらせ身體中には痲病やみの様な瘡ぶたが出来たのである。さう言ふ風にして、眠つてゐる間に弟の手に依つて自分の王冠も王床も生命をも奪はれてしまつたのであると言ひ、ハムレットに若し父を今までの様に愛してゐるならば、此の悪い暗殺者に復讐して呉れる様に誓はせた。それから亡靈は王子に、その母が最初の夫に示した愛情を裏切つて夫の暗殺者と結婚をする程までに徳を失つてしまつた事を歎いた、が然しハムレットに、悪い伯父に對しては何れ程の復讐をやつてもかまわないが、母に對しては決して何んな害をも加へずに、天命のまゝにまかせ、良心の針と刺しに苦しめらるゝまゝに放つて置く様にといましめた。ハムレットは亡靈の指圖通りに萬事をしようとして約束した。そして亡靈は消れて去つた。

ハムレットは唯一人に取り残された時、凡て自分の記憶にあるもの、凡て自分が書物や、觀察に

依つて學んだ事を、直ちに忘れてしまはなければならない、そして自分の頭には亡靈が自分に語つた事、爲せし命じた事のみを以て満さなければならぬと、嚴そかにも決心した。そしてハムレットは二人の交した會話の詳細を唯親友のホレーシオに語つたのみで誰にも言はなかつた、そして又ホレーシオにも、マセラスにもその晩の出來事に就ては嚴重に秘密を守る様にと命じた。

ハムレットは元より身體弱く又父の死で落膽してゐたので、亡靈を見たためにハムレットの五感に受けた恐怖は、王子の心を亂し、殆んど正氣を失はんばかりであつた。そして此の状態が長く續いて遂に人目に立つ様になり、伯父が何か自分が伯父の爲にならぬ事を考へてゐるのか、それとも又ハムレットが口に言つてゐる以上に實際父の死因に就て詳しい事を知つてゐるのではないかと疑つて自分を警戒する様になるまで大變だと思つて、本當の狂人の様な眞似をしようと言ふ變な決心をした。伯父が自分を大した事も仕出かさないものと信ずる様になれば、疑はれる事も自然少くなるし、又自分の本當の心の苦悶も狂人の眞似をしてゐればうまく蔽ひかくして人に知られぬ様にならうと考へたからである。

此の時以來ハムレットは様子にも、言語動作にも荒々しくなり、奇妙な風を装ふた。王子があまりにうまく狂人の眞似をしたので、王も王妃もうまくとかがつがれて、王子が父の死を悲しんだ餘

りそんな狂氣になつたのであるとも考へずに、二人は亡靈の現れた事を知らなかつたので、その原因は戀であると思ひ込んだ、そしてその相手も判つてゐるを考へた。

ハムレットが前に述べた様なあんな憂鬱に陥らなかつた前には、王の樞密院議長であるポローニヤスの娘であるオオフィリヤと言ふ美しい娘を非常に深く愛してゐた。王子は手紙や指輪を送り優しい自分の愛情を娘に言ひ送つて、男らしく愛情を求めた。娘も王子の愛や願ひを信じてゐた。然し近頃になつて憂鬱に陥つたため娘を疎んずる様になり、そして狂氣を装はうと決心して以來は娘を不親切にあつかふ様になり、時には不禮な振舞をさへ示した。併し娘は、淑女であつたので、以前よりも自分を疎遠にする様になつたのは、王子の心の悩みからであつて、今更氣が變つたのではないと思ひ定めた。そして嘗ては尊い心を持ち、優れた理解力を持つてゐた王子の性質が、王子を壓迫する様な深い憂鬱のために損はれてゐるのを、非常にすぐれた好い音のする立派な鐘も、調子外れに亂打され、無茶なあつかひを受ける時には不快な音を出すのと同じだなきに比較して見てゐたりした。

ハムレットが今しようとしてゐる荒仕事——父の暗殺者を復讐しようとする事は、求婚すると言ふ様な香氣な氣分とは一致しなかつたし又、戀と言ふ様な安逸な考へを容れる事は出来ぬ様に思は

れたけれども、尙オフィリヤに對する優しい考へが入り込んで來るのを止める譯にもいかなかつた。そして王子はそんな時に、自分があの優しい娘に對して餘りに無理性に、亂棒な扱ひをした事を考へて、又自分の狂氣を装ふてゐるのに適はしい様に、荒々しい熱情に満ちた言葉や大げさな語に満ちた手紙を書いた。然し此の誠實な婦人に、自分の心の底には尙深い愛が残つてゐると言ふ事が判らずに置けない様な風に、優しい愛情のひらめきを所々に見せて置いた。王子は娘に、星が光ることを疑ひ、太陽が動く事を疑ひ、眞實が嘘言であるを疑ふことはあつても、自分の愛情を疑つてはならぬなどと書き、更にもつと大げさな句をも書き送つた。娘は正直に此の手紙を父親に示した。そこで老人は何うしてもその事を王や王妃に傳へねばならぬと考へた。その時以來王も王妃も共にハムレットの狂氣の本當の原因は戀であると想像した。そして王妃は王子の狂氣の原因が幸にもオフィリヤの比ひ稀な美しくさである事を願つてゐた。若しさうであれば娘の徳に依つて元の様な正氣に戻るかも知れないを考へたからである。

然しハムレットの病氣は王妃が想像してゐたよりも深く、又そんな事では癒すことも出来なかつた。あの時見た父の亡靈が尙王子の頭の中に出没した。そして暗殺の復讐をしようと云ふ嚴かな誓ひのために、それを成就するまで王子の安靜は得られなかつた。一時間でも遅れれば遅れる程それが

罪惡の様に思はれ、父の命令を犯す様な気がした。言つても常に多くの護衛に守られてゐる王を殺し遂げる言ふ事は容易な業ではなかつた。そして又王と常に共にゐるハムレットの母である王妃の前でそれを仕遂げる事は情において忍びなかつたので、それを斷行する事は容易な事ではなかつた。其の上この潛主が自分の母の夫であると言ふ事情が、幾分後悔の念を抱かせ、王子の刃先を鈍らせた。然も同胞を殺す言ふ事はハムレットの様に優しい生れ附きの人にとつては思はしい怖る可き事であつた。今まで長い間陥つてゐた、その憂鬱や、精神の喪失は不決斷となり決心の動搖をさへ來して、何うしても極端に思ひ切つて突進する事が出来なかつた。それに加へて、自分が見た亡靈が本當に自分の父であつたか、それともどんな姿にでも身を現はす事の出来る言ふ惡魔が、父の姿に現はれて自分の心の弱さと憂鬱につけ込んで、殺人言ふ怖ろしい大事をさせる様な破目に陥らせるのではないだらうかまで、躊躇逡巡せずには居られなかつた。そこであの幻影か亡靈かは自分の妄想であつたかも知れぬから、何かもつと確かりした根據を握りたいと決心した。

ハムレットがこんなに思ひ惑ふてゐた時、宮廷へ役者達がやつて來た。ハムレットは以前常に彼等の芝居を特にトロイの王ブライアムの死や、王妃ヘクユバの悲歎を敘する悲劇を見聞するのを非常に喜んでゐた。ハムレットは此の古なじみの役者達を歓迎して、以前自分があの悲劇を聞いて樂

しんだ事を思ひ出して又それをやる様にと言つた。役者はそれを生々々敘した、若い年寄の王の暗殺から始めて、人民や市街を炎上するあたり、又王妃が狂ほしく悲しみながら王冠を戴いてゐた頭には貧相な布を結びつけ、王衣をまこつてゐた腰には、急いで取つて來た毛布をまこつて、素足のまゝ、宮殿を歩き廻つてゐる有様を演じたので、并み居る者皆はありありその眞景を眼の前に見る様な気がして涙を誘はれたばかりでなく、あまりほんこのやうにやつたので、役者さへも終には聲を曇らせて本當に涙を流しながら演じた程であつた。これを見て、ハムレットは考へ始めた。若し此の役者が唯の虚構の話をして自分をこんなに感動させる事が出来、見た事もない人の爲に涙を流させ、數千年も前に死んだヘクユバの爲に泣かせる事が出来るのに、自分はどうか、本當の動機もあり情熱に満ちた白もあり、本當の王である、父が殺されてゐるのに、少しも感動されず、復讐の心さへもすつと長い間懶鈍い忘却の内に眠つてゐる様にさへ思はれるではないか。この様に芝居や役者の事に就て又善い芝居が寫眞的に演出された時、見物人に與へる強い効果等を想ひ廻らしてゐた時、或る殺人者が芝居の殺人の場を見て、その場面の効果も、そして演ぜられた事情がよく似てゐたために、良心の呵責を受けてその場で自分の犯した犯罪を白狀したと言ふ實例を思ひ出した。そこでハムレットは此の役者達に叔父の前で、父王の暗殺によく似た事を演じさせ、どんな結果を